

MOBI
US

—輝きの使者—

芳田尚哉

YO! YO! 久しぶり!

.....

.....空しいな、これ。

つうわけで、久しぶりだな。ちゃんと覚えてるだろうな。

.....はあ? 覚えてないだ? ふざけんな!

まったく.....自己紹介ってのは無駄で面倒だろーが!

まったく、初めてのヤツもいるとかなんとか.....。ったるいなー!

しゃーねーな。

もう、儀式と思って諦めるけどよ。

おいらの名前はマスター。時をつむ紡ぐ者だ。以上。

これで終わりかって? 終わりだよ。なにが悪い。

つうかな、自己紹介って他になにするよ。名前を言えばおしま終いだろ?

って、こんな事で時間を潰すのも勿体ないな。さっさとナビゲートっつう役目を果たさないとな。だいたい、これが本分なわけで.....。

さて、つうわけだから気を取り直して.....。

今回は、あの野郎の意志を.....遺志の方が正しいか? まあ、どっちでもいいけどよ、その遺志を継ぐヤツの物語だ。

まったく.....今度は実験なんだとよ。あんたらから見て裏の世界の住人はよ、なにを考えてるのかわからんけどな。あ、一応おいらもそっちの住人なんだけどな。

なにを企んでるのか知らないが、試行錯誤ってヤツか。

まったく、迷惑な話だよな。

で、ソイツの話でもあるわけだが、今回は三人の少女の物語でもあるわけだ。

ソイツの実験に利用された悲しい少女たち.....つうとなんだけど、結果的には.....おっと、これから先は物語で、な。

とにかく、これは三人の少女の物語。

あ、そうそう。忘れてたけど、あの死神ヤローの仲間が登場するって噂だぜ。

.....とにかく、前置きはこのくらいでいいか? まあ、おいらとしてはどうでもいいんだが。

おっと、忘れちまうとこだった、これは始まりの物語でもあるんだよ。全ての元凶も登場っつうんだから、豪華絢爛な物語じゃねえか。

今回の舞台は奇妙な建物って話だ。

まあ、この物語にはそういう場所が似合ってるのかもな。

つうわけで、今回の物語だ。

アイツの遺志を継ぐ者と死神ヤロー、三人の少女、そして始まりの物語だ!

とにかく始まりいー!

黒い服に覆われていた。

誰も彼もが黒い服を着ている。

話し声も聞こえない静かな空間。

涙を流している母親。

なにを考えているのかわからない姉。姉もあたしも学校の制服を着せられている。

あたしは、それをただ眺めているだけ。

線香の匂いが部屋に充満している。いい匂いといっていいのか微妙だけど、いい匂いだ。

白い祭壇に飾られた写真を見る。

そこに写っているのは父親だ。黒いリボンで飾られた額におさめられている。

足が痛いな……。

ずっと座っていたので足が痺れてきた。かといって、立つのも躊躇われる。

あ〜あ、だるいな……。

何人もの人が母親の前に正座して頭を下げていく。それに返すように母親も頭を下げる。それに続いて、あたしたちも頭を下げる。

疲れたな……。

こんな空気、慣れろって言われても絶対に無理だね。まあ、慣れるほど機会もないだろうけど

。

早く終わらないかな……。

こんな重い空気、苦手だよ〜。

ふと、学校の先生が来ているのを見つけた。

ここは、世間話でも……と、立ち上がろうとしたのだけれど、立ち上がれなかった。足が痺れていたのもあったのだけれど、姉がそれを察してあたしの身体を押さえたのだ。

「……………」

無言で抗議の視線を送るが、全くの無視。

仕方なく、あたしはこのままでいる事にした。

しばらくして、先生があたしたちの所に来た。

母親の前に正座し、何事か話している。まあ、ご愁傷様ですとかそんな事だろう。

やがて、あたしの前に座った。

「楓（かえで）、あまり落ち込むなよ」

や、あまり落ち込んでないんですけど……とは言にくい。

「しばらく学校は休んでいいから」

ラッキー！ あ、でも退屈かも……とも言にくい。

「落ち着いたら、学校に来てくれればいいからな」

今でも十分に落ち着いてるんだけど……って言っていいのかな？

「また、笑顔を見せてくれよ」

にこっ。

「ありがとうな」

最後の笑顔は本当に笑ったのだが、どうやら勝手に無理をしていると思ったようだ。まあ、これだからしょうがないけど。

あとは、父親の仕事関係の人ばかり。ほとんど知らないし、退屈でしかない。

そんな中に、知っている顔を見つけた。

威仁（たけひと）君だ……。

だけど、やっぱり姉があたしを押しえた。

まあ、別にそんなに親しいわけじゃないからいいんだけど。ちょっと何度か会った事があるっただけだし。それだけ。

退屈のぎになるかと思っただけなわけで……結局ならなかったわけで……。

どうしてこんなに面倒なんだろう？

実感がまだわいていないんだろうけど、焼いて埋めればお終い、それでいいじゃない。なのにさ、わざわざこんな儀式みたいな事しなくても……。無駄。

あたしの父、楓春彦（はるひこ）が死んだ。殺された。

別段、犯人を恨もうとか思っていない。呉羽（くれは）なんとかさんって人が犯人だと言っていた。新聞とか警察とかが。だからなに？

まあ、こういう場面なら復讐とか考えるんでしょうけど、そんな事してもしょうがないしね。月並みだけど、それで還ってくるわけじゃないもん。まあ、還ってきたって、あたしたち家族よりも仕事を愛している人だから、いてもいなくても同じか。収入の面で厄介かも。でも、保険金もおりるようだし、見舞金もあるようだし、しばらくの間はなんとかなりそう。でも、すぐに大変になるのかな……。

あ～あ、冷めてるね、あたし。

やなヤツって感じしかしないかも。

でもさ、実感ってないんだよね。

突然、お父さんが殺された、とか言われてさ。はぁ？ って感じじゃない？

だいたい、家にいるのなんて見た事もない人だしさ。父親ってだけで、思い出なんてほとんどない。お母さんが殺された、とか言われたら、わーわー泣いたでしょうね。その方がよっぽど悲しいもん。

よくわからない。

身近にいなければ、家族だろうが肉親だろうが兄弟姉妹だろうが、あまり実感はわからない。

でも、殺された事は事実だし……。

ともかく、さ。早く終わってくれないかな……。

それにしても、ああも学校を休んでもいいって言われると、逆に行きたくなくなってしまいうんだから、人間って面白い。

お母さんもお姉ちゃんも一ったく、あの場ではそんな呼び方出来ないから肩凝っちゃった。だいたい、母とか姉とか……そんな呼び方って、あたしの性に合わない一休めって言うてるし……。普段なら、休みたいって言っても、サボるなって言われるのに、変なの。

まあ、お蔭で堂々と休めるわけだけどね。

それにしても、未だに実感がない。

病気とかならあったのかな、実感。

いきなり電話が掛かってきて、殺されました……はあ？ どうよ？

だいたい、その犯人も死んだとか言うし。

まあ、どうでもいいんだ、結局のところ。

ずっと家にいなかった人だから。

そんな事を考えていると、目の前に奇妙な建物が現れた。

来ちゃったのか……。

そこはお父さんが死んだ……殺された場所。

そこはお父さんが設計した最後の建物。

ムーンライト・タワー、

そう命名したのは、出資者である光月（こうづき）圭一郎（けいいちろう）だった。その彼もお父さんと同じ日に殺された。

……というと、ちょっと語弊があるかも。その犯人が本当に殺したかったのはその光月圭一郎で、お父さんはそれに巻き込まれただけ。

犯人が逃げる時に殺した。いわば、お父さんはなんの罪もなく殺された、完全なる被害者なのだ。

まあ、そんなものもどうでもいいわけで……。

過程なんて関係なくって、要は結果なわけで……。

それにしても……。

その建物を見上げる。

変な形だよな……。

地面から生えたコンクリートキノコっていうか……。大きなT字の建物。

なにに使うんだろう？

っていうのもなんだかね。この前もイベントがあったし。

なんだか日蝕があるとかで、みんなで観よう！ みたいなイベントをしていた。

太陽が欠けたその日、家族も欠けた……。

あ～あ。なんだかんだで結局お父さんの事ばかりになっちゃう。

同じ事ばかり。

なんだかんだで抜け出せないのかな……。結局は家族なのかな……。血の絆ってヤツ？ なんだか馬鹿らしい。青いね……。あたしも。

特になにをするでもなく、ブラブラとしていた。

「ねえ」

そんなあたしに声を掛けてきた人がいた。歳は同じくらいだろう。とすれば、学校は？ 今日
は平日で、あたしはサボリ。学校公認の。

「……………」

あたしはよくわからず振り返る。

「ここ、変な建物ね」

いや、あんたもたいがい変だと思っただけ……。

「でも、魅力的ね……。なにかが起こりそう。そう……。なにか輝く事が」

そう言うと、その人は去っていった。

なんだったんだろう？

その言葉が現実になるとは思ってもいなかった。

オレはどうすればいいんだ？

後悔してる。

ちょっとした事だったのに、どうしてこうなっちゃうんだ？

勾野（こうの）朱音（あかね）。

オレの親友。

オレが殺してしまった。

後悔してもしきれない……。

この場所……変なT字をした建物。

あの日……朱音は死んだ。

なあ、どうすればいい？

誰も答えてはくれない。

きっと、答えなんてないんだろう。

過去は変わらない。

オレは朱音を殺した。

「ねえ」

誰かが声を掛けてきた。オレと同じくらいの歳の女の子だ。

「……………」

声を掛けてきたくせになにも喋らない。

「なんだよ」

「……なんでもないわ。ただ、魔の時間に輝きを増すのよね、この場所は……その時、ボクはいないんだろうけど」

その女の子はそう呟いた。

っていうか、自分の事をボクだなんて……珍しいヤツ。

まあ、オレも自分の事、オレって言ってるけど。

「な、なんのこ……」

とだ、という言葉は出なかった。それよりも先に、姿が消えていた。

なんだったんだ？

結局、なにもかもがわからないまま、ただただ進行していた。

人生滅茶苦茶。

パパのせいで全て台無し。

もう学校にも行けない……。

行けば虐められる。

人殺し、

——って。

わたしが殺したわけじゃない。

殺したのはパパだ。パパがあの光月って人を殺した。

逃げる際にタワー関係の人を一人殺して、そこにいた自分と同じ年の女の子を殺した。そして、自分は車に轢かれてあの世行き。

その罪を背負ったのは残されたわたしたち家族。

なにもしていないのに殺人者扱い。

もう、どうにもならないんだらうな……。

だから、この場所が嫌い。

ここでパパが人を殺した。

つまり、ここでわたしの人生は終わった……。

どうしようもないのかな……。

「ねえ」

誰かに声を掛けられた。

「誰ですか？」

そこにいたのは、わたしと同じくらいの年齢の女の子だった。

「全ての因果はこの場所に集う。そして、セカイは輝き始める」

「え？」

女の子はスッと塔を指した。

「……………？」

思わず塔を見た……その次の瞬間、彼女の姿はなかった。

幽霊？

もう、世界はどうでもよくなっていた。

★-----★-----★

そして、運命に導かれるように、三年の時を経て彼女たちは集う。

ベッドに横になる。

あれからなにか変わっただろうか。

いいや、なにも変わっていない。

お母さんもお姉ちゃんも相変わらずだ。

あたしもなにも変わらない。

家族が減っても、意外と変わらないものなんだ……。まあ、経済面は変わったか。

もともと家にいなかった人だから、そう感じるだけなのかもね。

とにかく、たいした変化はなかった。

あのあと、境東（きょうとう）学園に入学した。まあ、そこそこレベルの高い進学校だ。もちろん、公立。でないと、お金が……。ね。

そんなこんなで入学して、なにか特別な事があるわけでもなく、一年が経って……。いよいよ来月から次の学年。

ホント、早かったね……。

ホント、退屈だったね……。

なにもしてこなかったもんね。

部活をしたわけでもなければ、恋をしたわけでもない。

そして、番人に選ばれたわけでもない。もし選ばれていれば、なにか変わったかもね。もっと刺激的なものになっていたのかも。まあ、これはまだチャンスはあるか。恋もそうだけど。

あ、番人っていうのは、うちに伝わっている代々の伝統みたいなもの。毎年、学園の誰か一人が選ばれる。それは誰にも知られてはいけない。だから、実際にあるのかもわからないんだけど……。でも、噂通りに目印はあるから、きっと誰かがきちんとかなしているんだろう。

あ～あ、楽しいだろうな……。

どうせ、あたしには関係ないか。

さてと。

する事もないので、携帯電話をいじる。

適当にボタン操作をして遊ぶ。

誰かに電話でもすれば退屈しのぎにはなるんだろうけど、そんな気分じゃない。

暇だな……。適当にコミックスでも読もうかと手に取る。二人の女子高生が図書館で本に吸い込まれて、昔の中国のような世界に行ってしまうというものすごく流行った漫画だ。当時、あたしも大好きで（もちろん今でも好きだ）、なんども読み返したっけ。こんな恋愛もいいかなとか思ったりして。

やっぱり、こういうのって憧れるよね……。一応、あたしも女の子だし。

まあ、する事もないし、このコミックスでも読もうか。何度読んでもワクワクするし。

ページをめくって読み始める。

ピロリロリ.....ピロリロリ.....♪

あ、携帯が鳴ってる。

本を閉じて携帯を見る。

誰からだろう.....。

電話じゃないみたい。あ、メールか。

誰からかな.....。

ボタン操作をしてメールを確認する。

もしかして、今噂の呪いのメールとかいうヤツだったりして。

な〜んてね。あるはずないって。

あったとしても、あたしのところになんて来るはずないもんね。

さてさて誰からかな.....。

ん？ 誰、これ。

〃Obscurit?、

なんて読むの？ オブスキュリト？ 英語読み（？）してみたけど.....聞いた事のない単語だ。読み方もあっているのかわからない。辞書で調べればいんだらうけど、面倒くさい。

まあ、そんな事はどうでもいいわけで。あ、よくないか。でも、それよりも.....なんだろう？

とにかく、メールを見ようと.....っていうか、なにこのタイトルは！

〃Unioへ、

うにお？ああ、ユニオ！

ユニオへって.....あたしのところに届いてるけど.....間違いかな.....？

とにかく、本文を試してみる。

〃おめでとう！ このメールを開いた瞬間、君は 〃輝きの使者、となった。そこで君には 〃輝きの力を授けよう。君はその能力を使い、人々を輝かせなければならない。さあ、全ての者を 〃輝きの園、へ導こうではないか、

.....？

.....なに、このものすごくデンパな内容のメールは！

っていうか、デンパね。

デンパがビビビッ！

なによ、輝きの使者って！

〃輝きの園、？ なにそれ！

能力を授けるって……何様？

これって、噂に聞いてた呪いのメール……なわけないよね。全然違うし。だいたい、差出人が違うし。

にしても、ものすごいデンパ！

ふざけてるにしても、度ってものがあると思うんだけどね……。それとも、なんかそっち系の人たちのメールなのかな？ それがたまたま間違っ、あたしのところに来ちゃったとか……。

どうでもいいか。でも、面白そうだから残しておこうっと！ 新学期になったら、話のネタくらいにはなるだろうし。

そんな事を考えていると、

ピロリロリ……ピロリロリ……♪

また携帯が鳴った。

見ると、またメールだった。

差出人は同じで `Obscurit?、。

間違っ、いそうな気がするけど、あたし的にはオブスキュリトからのメール。

今度は、さっきと違っ、`輝きの使者へ、となっていた。

とにかく見てみようっと。

`ユニオ、君は明日の15時に `ムーンライト・タワー、に行かなければならない。そこで君の仲間が待っている。君たちが力を合わせて、人々を `輝きの園、へ導くのだ。そこで1つだけ注意しておく。決して自分の本名を名乗っ、はいけない。何故なら君は `輝きの使者、のユニオとなっ、たのだから……、

……はあ？

とにかく、あたしはその輝きの使者とかいうのになっ、たわけ？ で、名前がユニオ……。

どこまでデンパなわけ？ 付き合っ、てらんないわね、これ。

でも……。

そこには気になる名前が書かれていた。

`ムーンライト・タワー、

あたしのお父さんが設計した建物。

そして、お父さんが殺された場所。

あれから、そこへ足を運んだ事はない。行く用事もないし、そこでなにかをしているわけじゃないからだ。イベントなどなにもない所に行く理由なんてない。別になにか店があるわけでもない。実際はあるのだが、そんなのあるうちに入るのか？ という規模。ただの建物。街中に生

え

たコンクリートキノコ。それがMLT（ムーンライト・タワー）。

気にせずにはいられない名前には違いない。

それともう一つ、どうやらあたしには仲間がいるようだ。輝きの使者というのは、一人ではないらしい。何人いるのかはわからないけど。

暇だし、どんな人が来るのか行ってみるのも悪くないか。

あいにく、あたしにはお父さんが殺された場所だからどうのっていうものはないし。

というわけで、そのメールの通りに行ってみる事にした。

「Obscurit?、

誰?

あっちの国に知り合いはいないはずだけど……。

っていうか、なんて読むわけ? まあ、読む気にもならないけど。読めなくてもいいしね。

だいたい件名も……、

「Connecterへ、

なに? でも、一応「へ、って事は日本語はできるっていうか……日本からのメールみたいだ。っていうか、英語なんて全然わからない。とにかく、日本語があるようで安心した。

とにかく本文を読んでみる。

「おめでとう! このメールを開いた瞬間、君は「輝きの使者」となった。そこで君には「接、の力を授けよう。君はその能力を使い、人々を輝かせなければならない。さあ、全ての者を「輝きの園、へ導こうではないか、

なに、これ。

……わけがわからない。

悪戯?

……………これがマジだったら、オレはマジで笑っちゃうけどな。

まったく、変なメールを送りやがって。

レスしちまうか。

そう思って、ポチポチとボタンを押し始めていると、

プルル……プルル……♪

またメールが届いた。

差出人は……同じだ。

まったく……せっかく送ろうとしてんのに、送ってきやがって……。

とにかく、なにを送ってきやがったんだ?

「コネクター、君は明日の15時に「ムーンライト・タワー、に行かなければならない。そこで君の仲間が待っている。君たちが力を合わせて、人々を「輝きの園、へ導くのだ。そこで1つだけ注意しておく。決して自分の本名を名乗ってはいけない。何故なら君は「輝きの使者、のコネクターとなったのだから……、

なに、これ。

MLTに行けだ？

どうして命令されなくちゃいけないわけ？

しかも、あの変な建物だろ、MLTって。どうしてあんな所に行かなきゃいけないわけ？

面倒だな.....。

.....っていうか、勝手にコネクターって名前になってるし.....。

わけわかんないし、面倒だし.....。

それに、あそこにはいい思い出がない。むしろ、悪い思い出しかない。できれば行きたくない

。

過去に縛られているのはわかってる。

でも、あそこだけはあまり行きたくない。

気が進まない。

ん？　そういえば.....。

三年くらい前になるだろうか、その問題のMLTで変な女に出会った。まあ、自分と同じくらいの歳なんだけど。

確かその女が変な事を言っていたような.....。

輝くとかなんとか.....。

妙に気になりだした。

もしかして、この事なのか？

だとしたら、あの女はなんだったんだ？　変な予言じみた事をして.....。

だけど、確かに不思議な女だった。だからこそ覚えていたのだ。

あのあと、どうしても見つからなかった。

夢だろうと思っていたが、それにしてはやけにリアルだったし.....ああいう場所だから、幽霊かもとか思ったけど、そうでもなさそうだった。

だいたい、オレには靈感がない。少なくとも、今までにそういう体験をした事はない。

別に、体験したかったわけじゃないしね。

クラスの女たちなんて、心霊写真だ、怪談話だ、都市伝説だ.....暇だよな。

ん？　都市伝説.....？

そういえば、変なメールがどうとか言っていたような.....。オレも無理矢理会話に入れさせられて.....。なんでも、女子全員で話をしようとかわけのわからない事を言い出して.....。なんだっけか。メ.....なんとかメール。もしかしてこれか？

差出人を見るが、明らかに違う。

メ.....なんとかじゃなさそう。これをどう頑張ってもメ.....なんとかとは読めそうもない。

だったらなんだ？

このメールはいったい.....。

クラスの女にでも訊けばいいのかな.....でも、面倒だしな.....。あんまり関わり合いになりたくないしな.....。

まあ、どうせ暇だし。暇つぶしにはなるだろう。
とにかく、行けばなにかわかるだろうし。

わたしは一枚のチラシを見ていた。

「今宵百年に一度の天文ショー！ その奇跡の瞬間をムーンライト・タワーで！」

その下には、

「故光月圭一郎氏の個展を同時開催！」

と、大きく書かれている。その背後には、T字をした建物が聳えている。MLTだ。

わたしにとって忌むべき場所。

パパがしてはいけない事をした。そして、そのままこの世を去った。

大好きだったパパ。

だけど、そんなわたしに対して、面倒だけを遺した。

それでもパパは好き。

わたしの人生はこれを機に一変してしまった。どん底……だと自分では思ってる。何度登校拒否をしたらろう。中学の二年間はほとんど学校に行っていない。不登校を続けていたが、わたしは勉強を続けた。誰よりも頑張った。ここで堕ちる事は簡単だったけど、それはしたくなかった。

わたしは命を救う仕事がしたい。だから、看護師を目指そうと思っている。絶対、看護師になって、病気や怪我の人を救いたい。これがわたしにできる罪滅ぼしだと思っている。

だからこそ勉強した。そして、今の高校に入学する事ができた。

きっと、内申点は低かっただろう。

それでも、全教科ほぼ満点の成績だったのだから、不合格にする事ができなかったわけだ。学校としては、そっちを優先させた。それは、わたしにとってありがたかった。

これで、少しだけ夢に近付いた。

そんな夢を持って、聖・アンジェーロ学園に入学した。それから一年が経ち、余裕も出てきた。もちろん、勉強は怠っていない。怠惰というものはない。

それでも、息抜きというものは必要で……。

というよりも、どうしてもできない時期というものがある。それが今だ。

仕方ないので、マンガでも読む事にした。突然戦争状態になり、自分の彼女が兵器になってしまったという物語だ。そして、終わりゆく世界の中で二人は愛し合う。やがて世界は滅びてしまう……。そんな哀しい物語。

この話を読んで、わたしは何度も泣いた。

哀しすぎるよ……って。

救いがあるとすれば、二人は永遠に結ばれた事だろう。触れあう事はできないけど、二人は永

遠の愛の中で生きていく。

読み始めたただけなのに、そのラストを思い出してしまうと涙が出てきた。

ピリリリリ.....ピリリリリ.....♪

携帯電話が鳴った。友達からかな。

画面を見ると、メールが届いていた。

誰からだろう？

確認する。

「Obscurit?」

そんな名前が差出人のところにあった。

オプスキュリテ？

なにかの悪戯だろうか？

暗闇を意味するその名前の差出人のメールの件名には、

「Separatorへ」

と、あった。

なに、この単語は。こんなスペルの単語は見た事がないし、辞書にも載っていないはずだ。

造語？

だとすれば..... 「separate」〔分離する〕 + (e) r.....分離する者。こういう事だろうか？

それにしても不思議だ。フランス語の「Obscurit?」と、造語英語と思しき「Separator」。このとりとめのなさはなんだろう。

差出人と件名だけでも怪しい。でも、内容が気になる。

うん。

わたしは心を決めて本文を見る事にした。

「おめでとう！ このメールを開いた瞬間、君は「輝きの使者」となった。そこで君には「離」の力を授けよう。君はその能力を使い、人々を輝かせなければならない。さあ、全ての者を「輝きの園」へ導こうではないか、

まったくもって意味不明の内容だ。輝きの使者？ なんの事だろう。

ん.....？ 輝き.....

そういえば三年前.....、あのMLTで確か.....。世界は輝き始める.....。そんな事を言っていたような.....。誰が？ 誰だったのだろうか？ 見た事もない人だったのは確かだ。

「輝きの園、……この事なのだろうか。

とにかく、変なメールである事に変わりはない。

一番の謎は、どうしてわたしのところに来たのかという事だ。

なにもわからない。

そんな事を思案していると、

ピリリリリ……ピリリリリ……♪

メールの受信を告げる着信音が鳴った。

誰からだろう？ と思ったが、すぐに想像できた。案の定、オプスキュリテからだった。

今度はなにかしら……。

メールを読む。

「セパレイター、君は明日の15時に「ムーンライト・タワー」に行かなければならない。そこで君の仲間が待っている。君たちが力を合わせて、人々を「輝きの園」へ導くのだ。そこで1つだけ注意しておく。決して自分の本名を名乗ってはいけない。何故なら君は「輝きの使者」のセパレイターとなったのだから……、

なにこれ。

ふざけるのもいい加減にして欲しい。

どうやら、この謎の送信者であるオプスキュリテは、わたしを輝きの使者のセパレイターだと言っている。しかも、仲間がいるらしい。どこの誰かはわからないけど。

それに、明日の15時にMLTに行け……。

わたしは、あそこには行きたくない。

でも……。

チラシに目を向ける。

きっと彼は来るだろう。彼はこういうものが好きだから。

あそこには行きたくない。でも、彼には会いたい。

ジレンマだ……。

でも、やっぱり……。

よし、このメールも気になるし、行ってみよう。

「なあ、優里亜（ゆりあ）」

岩城（いわき）孝之（たかゆき）は夕食中に、向かいに座っている恋人で同棲中の鳥居（とりい）優里亜に声を掛けた。

「ん？ どうしたの？ なに？」

優里亜は、ご飯を咀嚼してから答える。

「あのさ、明日……暇、かな？」

孝之は照れた風に言った。少なくとも、彼女にはそう見えた。しかし、それは照れたというよりも、言い出しにくいという方が正解だった。どちらもよく似た感じだが。

「暇だけど、どうしたわけ？」

「あの……これなんだけど……」

孝之は一枚のチラシを優里亜の前に出す。

「なに、これ」

渡されたそれを見る。

「これって……」

「明日、MLTであるイベントなんだけど……」

「……ホント？」

優里亜は目を丸くして孝之を見た。

「本当にこれに行くの？」

「え、あ、うん……。イヤ……かな」

予想しない反応に戸惑いを隠せない。

「そんな事ない！ 行きたかったもん！ 天文イベントなんて、断られそうだったから……ロマンチックじゃない。夜空を見上げ星を見る恋人たち。もう、それだけで素敵満点よね」

よくわからないな……と思いつつ、とにかく喜んでもらえているという事に、ホッと胸を撫で下ろす。

しかし、こうも喜ばれてしまっただけで、本当の理由がとてもではないが言えないな、というのが彼の心情だった。

この前のゲームは順調に開発が進み、なんとかメ切に間に合った。売れ行きも好調らしく、次回作もと頼まれたのだ。しかも企画からだ。前回は与えられた内容をシナリオにするだけだったのだが、今回は企画……原案から全てを任されてしまった。

もちろん、別の大きな企画が進行しているわけだが、いつものようにそれと並行してといったものだ。

前作が好評らしく、主なスタッフは前回と同じメンバーである事となっている。

だが、なかなかいい案が浮かんでこず悩んでいた。

そこへ中埜（なかの）さんがあのチラシを持ってきたのだ。

『気分転換も兼ねて、ここに行ってきたらどう？ 彼女に淋しい思いさせてるんでしょ？ サー

ビスしとかないと、振られちゃうわよ。それに、密室でのミステリーなんて面白いと思うけど。この建物、それ自体がミステリアスだし。行ってきなさいよ』

という助言付きで。

余計なお世話の部分もあったが、全体的にはアドバイスをくれたらしい。とよく見ればそうなのだが、じっくりと考えてみると、次回は密室でのミステリーでここなんて舞台にどう？ 取材してきてね、となる。

やれやれ、と思いながらも、一応デートではあるわけで……全く微妙な感じだ。

とにかく、少し後ろめたいが、デートはデートと割り切る事に……と、男の言い訳を自分にする孝之であった。

翌日、あたしはMLTに向かっていた。

行くと決めてからも散々悩んだのだが、結局はこうして向かっている。

だけど、それでもどうしようか悩んでいる自分がいる。

一步一步が重い。なかなか前に進まない。時間だけが流れていく。

別に、その時間に必ず行かなければいけないというものじゃない。だいたい、向こうが勝手に指定して命令してきたのだ。誰かもわからないのに、素直に従うなんて馬鹿馬鹿しい。

それでも、誰なのかが気になってしまう。

お父さんが建てた場所。

お父さんが殺された場所。

忌まわしい記憶だけの場所。

近付いてくると、ほんの少し賑わっていた。

今まで閑散としていたはずの場所だけに、それは異様にも思えた。

着いて初めて知ったのだが、なにかイベントがあるらしかった。

それも、天文ショーとあの光月圭一郎の個展だそうだ。

どういう組み合わせなのかはよくわからないが、とりあえず資金集めなのだろう。

この建物で採算がとれているとは思えない。明らかに赤字だろう。おそらく、会社の中でも足を引っ張っているに違いない。だが、光月圭一郎が建てたものという事で、容易に解体できないのだろう。

まあ、その辺の会社事情はあたしには関係ない。

どうやら、流星群だが、彗星だか知らないけど、なにかあるみたいだし、こんな機会でもなければ賑わう事もないだろう。

それにしても……と改めてそれを見上げる。

お父さんは、どうしてこんなものを設計したのだろうか。

光月圭一郎の要望もあったのだろうが、それにしても不思議だ。

わからないのが、T字にした事だ。どうせ天体観測なりなんなりをしたいのなら、普通の直方体でも構わないだろう。それをこんな風にする理由なんて、あたしにはわからない。きっと、あの光月圭一郎の事だから、たいした意味はないんだろうけど。あの人自体、よくわからない意味不明の人だったし。数回しか会った事ないけど。

とにかく、指定された時間まであと三十分。適当にぶらついていよう。

MLTにやって来た。

オレはここで親友を殺してしまった。

もちろん、オレが直接手を下したわけじゃないし、殺したいと思ったわけでもない。事故だった。

そう、事故だった。

だけど、オレの中ではあれはオレが殺したようなものだった。

朱音……。

彼女の名前を思い浮かべずにはいられない。

彼女は、あの日、あの殺人者によって殺された。

そして、彼女をそこに行かせたのはオレだった。

オレがあの日、彼女にチケットを譲ったせいで……。

本当なら、殺されていたのはオレかもしれない。

殺されるなら、オレの方がよかった。朱音を悲しませてしまうかもしれないけど。

結局、どうにもならなかったのだろうか。

悲しい思い出がこのMLTには詰まっている。

あのメールがオレをどうにか救ってくれるのだろうか。

まさか、そんな事があるはずがない。

誰も救ってはくれないし、救えない。

この十字架は一生背負わないといけないんだろうな……。

過去を悔いていると、MLTに到着していた。

どうやら、なにかイベントでもあるようだ。

なにに……光月圭一郎個展、天文ショー……。

言葉を失った。

皮肉だろうか。あの時と同じイベントだ。

見る星空は違うのだけど、根本は同じだ。

あの記憶を思い出さずにはいられない状況だ。

やっぱり来るんじゃないかった。

だけど、もうここまで来ちゃったわけだし……。今から帰るのも……。

時計を見た。

指定された時間まで、あと二十五分ある。

ちょっと早く来すぎたか。

彼も来てるのかな……。

わたしはチラシを手にして、ウキウキしていた。

あのメールの事も気になったけど、それよりも気になったのが彼の事だった。

もちろん付き合っているわけじゃない。わたしの片思い。

わたしは、遠くから見ているだけでいい。

偶然すれ違うだけでもいい。

第一、今日も確証があるわけじゃない。

来ていない確率の方が高いかもしれない。

それでも、来ていると信じたい。

改めて、この不幸の塔を見上げる。

ここでパパはあの人を殺した。

そして、逃げる途中にここの関係者を殺害し、女子中学生を殺害した。その他にも、数人に怪我をさせた。

パパがどうしてそんな事をしたのか、わたしは知らない。大人の事情なのかもしれない。

でも、わからない。光月光一郎なる人物とどう繋がり、どうして殺そうとした……いや、殺したのか。

わたしは知りたかった。

ママに訊いてもなにも答えてくれない。

新聞にもなにも載っていなかった。

本当に知らなかったのか、報道協定が結ばれたのか、それはわからない。結局、わたしにはなんの情報もなかった。

パパが人を殺して死んだ。

その事実だけが重くのし掛かり、わたしの人生は狂った。

それだけだった。

その狂いは、わたしの努力である程度は修正された。

いや、今目指しているものは、当時とは大きくかけ離れている。当時は、別に看護師になりたいとは思っていなかった。特に決めてはいなかったけど。

考えれば、今でもパパの事件を引きずって、一生そのままなのだと思う。

だとすれば、これは修正でもなんでもないのである。ずっと、本来あった線路からずれた線路を進んでいくのだろう。

それでも、今に幸せを感じている。

時計を見ると、指定された時間まであと十七分あった。

ちょっと早いな……。だいたい具体的な場所の指示は受けていない。とにかく、ここにいればいいだろう。

「へえ～ここがMLTか……」

鳥居優里亜は、MLTを見上げた。

「なかなか人が集まってるみたいだね。普段はサッパリらしいけど」

「ホント。そこそこ集まるもんなのか……」

「そうだよ。夜はきつともっと人が多くなるよ。なんたって、ロマンティックな夜なんだから」

「ロマンティックっていうなら、二人きりで家の窓からって方がそうじゃないか？」

「ぶう～」

優里亜は頬を膨らませる。

「そうだけどさ……こういう場所もロマンティックなの」

「はいはい。どこでもいいわけですね、優里亜さんは」

「なに？ 孝之は家の方がよかったの？ ベッドに入ってニャンニャンって抱き合いながら夜空を眺める……？ 下半身脳味噌だね、ホント。おつむの中は白い液体かしら？」

「おい、ちょっと待て。そんな事言っていないだろうが。優里亜が勝手に妄想膨らませてるんだろ」

「ぶう～」

頬を膨らませてそっぽ向く。

「それよりさ、光月圭一郎って人の絵ってどんなだろうね」

今までの事を無かった事にするかのような笑顔で優里亜が言った。

「光月氏の絵か……。ちょっとクセのある絵かな。個性的というか、独創的というか……」

孝之は少し言葉を濁す。

「ねえ、孝之って観た事あるの？」

「まあ、少しだけ」

資料で、という言葉は言わない事にした。彼も実物を目にするのは初めてなのだ。第一、光月圭一郎の絵を観る機会などそうそうない。芸術としては有名で、写真などが雑誌に載る事はあったものの、こういった展覧会のようなものは行われなかった。

それが今回、公開されるという事で、ちょっとした話題にもなった。

もちろん、それらを詳しく知ったのは、中埜さんに渡された資料のお蔭だ。今までは、よくわからない絵描き、程度の知識しかなかった。

この辺の資料を用意するあたり、初めからこうしようと企んでいたに違いない。

あまりにネタを出さないものだから、自分のネタを僕のアイデアとするつもりなのだろう。まあ、彼女としては自分がしたかったものができる、と。うまく利用されているものだ。別にそれはそれで構わないのだけれど。

「つまりは、今回のイベントは収入確保のためのイベントなわけね」

「……唐突だな。つうか、今の話でどうしてそうなるんだ？ そこが訊きたいね」

「いいじゃない」

優里亜は澄まし顔で答えた。

「まあ、そうなんだろうけどね。それにしても、開場まであと十五分くらいか……」

「でもさ、天文ショーだったらさ、もっと後でもよかったんじゃない？」

孝之は一瞬ぎくりとした。取材だとは言っていないし、言えるはずもない。だいたい、デートのつもりだったのに取材だなんて知れたらどうなるか。

「まあ、絵も観たかったしさ、早めに来るのもいいじゃないか」

と、言い訳にもなっていない言い訳をする。

「まあいいけどね」

優里亜もどうでもいいようで、深くは追求しない。

結果的にデートしているのだからいいだろうという考えだ。

「まあ、どんな風になってるのか楽しみだな」

「どんな風になってるんだろうね。それはちょっと楽しみかも」

俺はここに再びやってきた。忘れもしないこの場所。
俺が大切な人を失った場所。
彼女は永遠に戻ってこない。
そして、俺の恋も終わらない。
この奇妙な塔を見上げる。
俺には魔物の巣窟にも見える。禍々しい歪んだ空間だ。
この奇妙な建物の中でなにが起こっても不思議じゃない。
心のどこかにあったのかもしれない。
ここに来ればなにかが起こる、と。
もしかしたら、もう一度会えるかもしれない、朱音に……。
それは儚い願いかもしれないけど、俺が人としての夢だから。
会えるはずがないとわかっている。だからこそ、願ってもいいんじゃないか？ それだけでも許して欲しい。
開場まで、あと十四分。

私たちは、主催者である高澤（こうさわ）のおじさまに招待されてここにやって来た。

この場所は、お父様が企画して建設したものである。今その管理をしているのは、お父様の後を継いで会社を運営されている高澤のおじさまだった。

よそでは、会社を乗っ取った悪人のように言われているが、そのような事はない。私からすれば、自分から苦勞を背負い込んだようにしか思えない。

塔の裏手にある、関係者が集まっているプレハブ小屋に急ぐ。もうすぐ開場してしまう。少し遅れてしまったのだ、急がなくてはならない。

私は少し小走りになる。

「お姉ちゃん、急ぎすぎじゃない？」

文句を言いながらも、妹の鏡琴（みこと）はちゃんとしてくる。

「そんな事言ってるから遅れるの」

そんな妹をたしなめる。

双子だというのに、どうしてこうも違うのだろうか。なんだか、鏡琴はまだまだ子どもっぽいというか、わがままというか……。

だから、顔はそっくりだけど全然違うんだね、とか言われるのだ。

「そんな事言っても……」

ぶつぶつと言っている暇はない。開場まであと十分と少ししかないのだ。

少し走ったお蔭で、なんとか間に合った。普通の学校なら、チャイムと同時の滑り込みといったところだろうか。

「遅くなりました、申し訳ありません」

入るなり、私は頭を下げた。

「やあ、麻琴（まこと）ちゃんに鏡琴ちゃん……。こんにちは」

落ち着いた物腰の男性が歩いてきた。しばらく会っていなかったが、高澤のおじさまだ。

「お久しぶりです、おじさま。この度は、お声を掛けていただき……」

「まあまあ」

おじさまは、私の挨拶を中断させる。

「そんなに堅苦しくする事はないよ。気軽に遊ぶような感覚で構わないんだから。それに、今回はお客様だ。亡き光月圭一郎氏のお嬢様だ。本来ならこちらが頭を下げなければいけない。ようこそお越し下さいました」

高澤のおじさまは丁寧に頭を下げる。

「あ、その……お招きいただきましてありがとうございます」

私は、隣の鏡琴の頭を押さえて礼をさせた。

「それにしても、二人とも綺麗になったね……」

「そんな……」

照れる私をよそに、

「そでしょ」

と、自信満々で返す鏡琴。

「おやおや、性格はかなり違うようだ」

おじさまは楽しそうに笑う。

だが、私はこういうやり取りが嫌いだ。外見は似ていても中身は違う……嫌悪しか感じない。

「さて、そろそろ展望階に行かないと。おい、威仁！」

おじさまが呼んだのは、息子の威仁くんだった。彼ともしばらく会っていない。

「こんにちは」

品のいい感じはしたが、どこか冷たい感じを受けた。

「では、行きましょうか」

開場の五分前、私たち姉妹と高澤さん親子は、一足先にこのMLTの最上階である展望階に向かった。

「天文ショーね……」

三雲（みくも）政孝（まさたか）は、今日行われるMLTのチラシを手に呟いた。

「暇だね……。そういう俺も暇なわけだけだな」

三雲は、少し前の事を思い出していた。

メビウスと名乗る死神と遭遇した時の事だ。三雲が生きてきた中で、最高にドキドキした出来事だった。まさに命懸けの。

だが、終わってみれば何事もなかったかのように世界はそこにある。

変わり映えのしない社会、経済、政治……。どこも荒みきっている。

それでもする事がないというのはどうだろうか。こうブラブラしていてもどうなるというわけではない。だが、他にする事もないのも事実だ。

もしかすると、またメビウスに出会えるのではないかと思っているのかもしれない。

だが、それはこの世界にとっていい事ではない。メビウスが現れない方が平和だという事だ。

三雲はもう一度チラシに目を向ける。

「光月圭一郎の個展……か。ん？ 光月圭一郎？」

そこで初めて気付いた。建物の名前で思い出してもいいはずなのに、それに気付かなかった。

MLT、光月圭一郎——これら二つが繋がる事件が三年前に起こっている。そして、その事件は解決されていない……いや、正確には闇に葬られてしまったのだ。

世間的には解決している。犯人の自殺だ。

だが、事件としては終わっていないはずだ。その死んだ男がどうして光月圭一郎を殺したのかという疑問が全く解けていない。それどころか、そんな事がなかったかのような状況だ。

会社側の圧力なのだろうかとも思ったが、会社としてはなにも後ろめたい事はないようだった。それは三雲自身が調べた。裏金や政治家への献金など、それらの類を見つける事はできなかった。

だとすれば動機はなんだったのか。個人的な恨みにしても、あの犯人と光月圭一郎の繋がりがわからない。会うはずのない二人なのだ。

では、本当の目的は別にあったのだろうか。

光月圭一郎が殺された事で、彼を狙った犯行とされているが、実は別の人物を殺そうとしたのではないだろうか。

だが、どちらにせよわからない。

そう。これはわからない事だらけの事件なのだ。

こういう事件こそ俺が解くべき事件だ！

と、三雲はその現場となったMLTへ行く事にした。

三年前のあの日も天文ショーが行われていた事も思い出した。

だとすれば、なにかが起こる可能性が高い。

問題があるとすれば、ここからMLTまで一時間は掛かってしまうという事くらいだった

。

「間に合うといいけどな……」

既になにかが起る事が想定されている。予想で終わればいいのだが、現実になにか起こりそうな雰囲気がある。

とにかく、三雲はMLTに向かった。

開場まであと一分。

ピンポンパンポ〜ン♪

少し間の抜けた音がMLTの周辺に響いた。

そして、そのあとアナウンスが流れる。

『本日はお越し頂きまして誠に有り難う御座います。ただいまよりムーンライト・タワーを開場いたします。本日の催しものは、Ability Moon Inc.（アビリティー・ムーン株式会社）主催ムーンライト・タワー天文ショー並びに故光月圭一郎の個展でございます。なお、天文ショーは最上階の展望階にて……』

アナウンスが流れる中、三つの音がそれぞれ鳴り始めた。

ピロリロリ……ピロリロリ……♪

プルル……プルル……♪

ピリリリリ……ピリリリリ……♪

それは同時だった。

それぞれがそれぞれの携帯電話をとった。

三つの「もしもし」。

そして、やや時間があって、

『やあ、輝きの使者諸君。よく来てくれた。オレの名前はオプスキュリテ。闇を継ぐ者と呼んでくれても構わない』

それぞれが困惑の表情を浮かべた。その声は機械で声を変えたような奇妙な声だった。

『さあ、君たちはまだお互いの存在を知らないようだね。それじゃ、顔合わせといこうじゃないか。輝きの使者である君たちには、これからある場所に行ってもらいたい。そこで顔合わせとい

こうじゃないか。その集合場所だが――MLT入口を入ってすぐの所に飾ってあるピエロの絵の前だ。次の指令はそこで行う。君たち三人の健闘を祈る。このゲームを存分に楽しんでくれたまえ』

それだけを言うと電話は切れた。

「ピエロの絵……？」

輝きの使者の一人、楓夏菜ことユニオは思い当たるものがあった。

ピエロの絵……それは、夏菜――ユニオが通っている境東学園の玄関前に飾られている絵もそうなのだ。その絵は誰かから寄贈されたものらしいという事しか知らない。

だが、この絵にはちょっとした怪談がある。本来は、赤ん坊を抱いた母親が前面にいて、その後ろに観覧車が描かれており、後ろの方にピエロが立っている。そう、本来なら母親の絵なのだ。だが、そのピエロがあまりに印象に残るのでピエロの絵で通用する。

そして、その怪談だが一昔、といっても五年ほど前らしい、夜中にその絵の前に立った女子生徒がいた。彼女は翌日提出の課題を学園に忘れてしまい、それを取りに夜中の学園にやってきたらしい。どこにでもある話だ。

校舎は既に閉まっているので入る事ができない。そこで、玄関から宿直室に向かい当直の警備員に開けてもらおうとした。

誰もいるはずがないので、玄関といっても真っ暗だ。その女子生徒はゆっくりと、恐る恐るドアを開けた。

キィィッ！

という音が響いた。実際はたいした音ではなかったのだが、恐怖心も手伝ってそれはかなり大きく聞こえた。

誰もいないとわかっていても後ろめたいものがあり、キョロキョロと左右を見てしまう。

誰もいない事を確認すると、女子生徒は忍び足で中に入った。

カツン！

その音に心臓が飛び出るかと思った。それは自分の足音なのだが、予想以上の音に縮み上がった。

できるだけ音をたてないようにゆっくりと歩いていく。

この学園に七不思議のようなものはないのだが、そんなものは関係なく、なにかがでてきそうな雰囲気がある。

カツン！ カツン！ と、時折足音を響かせながら女子生徒は宿直室を目指して歩いていた。その顔は恐怖で引きつっている。

それでも、なんとか宿直室まで辿り着いた。おっかなびっくりでドアをノックすると、中からひっ！ という小さな悲鳴が聞こえた。宿直室にいた警備員の声だった。その声に、女子生徒の身体もビクンとなる。

すみません……と、小さな声で言うと、警備員がドアを開けた。

どうしたのかという警備員に女子生徒は事情を説明する。それを聞くと、警備員は突然の事に驚いたと笑いながら言い、教室まで一緒に行くと言った。女子生徒は安心した顔で警備員の後ろについていった。

カツン、カツンという音を響かせながら二人は女子生徒の教室まで歩いていく。途中、女子生徒が怖がらないようにと、警備員はなにかと話をした。女子生徒も自分の恐怖心を忘れるように話をした。

そして、無事に忘れ物を見つけた女子生徒は、警備員にお礼を言った。警備員は笑顔で、もう忘れ物をしないようにな、とだけ言った。そして、そのまま玄関まで送ってもらった。

女子生徒は警備員に何度もお礼を言った。気を付けて、と警備員が言った時、ふと彼女の目に

あの玄関の絵が飛び込んできた。

普段あまり玄関は使用しないので見る機会はほとんどなかったのだが、その後ろに描かれているピエロが印象的だったので覚えていた。

やっぱり不気味だな……と、何気なくその絵を見ていた。暗闇という事もあるが、ピエロというものはどうにも不気味な印象がある。

警備員も彼女の視線に気付き、その絵を見る。途端、彼は言葉を失い、その場にへたりこんだ。腰を抜かしたのだ。

どうしたんですか？ という女子生徒の問いに警備員は、絵が変わっている、とだけ言った。言われて彼女は注意深く絵を見るが、どこが変わっているのかわからない。それもそうだ。元々あまり見た事がないのだから。

観覧車の前に女の人が立っていて、その後ろにピエロが赤ん坊を抱いて立っている。それだけの絵だ。

どこが変なんですか？ という彼女の問いに、ピエロが赤ん坊を抱いている……と、震えた声で言った。そう言われて、彼女は記憶を辿って絵を思い出す。

ひっ！ と、彼女は悲鳴を上げた。

彼女の記憶にある絵は、母親が赤ん坊を抱いているものだった。

女子生徒は自分が青ざめていくのがハッキリとわかった。ガクガクと足が震え、ぺたんと腰を抜かしてしまった。

そんな二人を嘲笑うかのように、絵の中のピエロがニタリと笑みを作った。

二人は悲鳴にもならない甲高い声を出して気を失った。

そんな二人を見つけたのは、出勤してきた教師だった。

それ以降、学校の七不思議として噂されるようになった。もちろん、絵になにかあるのではないかと調べられたが、別段異常は見つからなかった。赤ん坊は母親の腕の中にいたし、ピエロが笑うなどという事はなかった。

ユニオはその噂を思い出すと、背筋がゾッとするのを感じた。

もちろん自分が体験したわけではないし、それ以降そんな事があったという事もない。あくまでも噂でしかなく、その二人が幻覚を見たという事で世間的には決着していた。だが、学園内ではまことしやかにその噂は受け継がれているのだ。

まさかね……。

ピエロの絵と聞いて思い出してしまっただけだ。その絵であるはずがない。

まあ、そうだったとしても明るいし、大勢いるので大丈夫だろうけど。

ユニオは恐る恐る中に入る事にした。あまり長くはないが、入場の列が出来ているのでそこに並ぶ。別段並ぶ事なくスムーズに流れていき、ユニオはMLTの中に入る事ができた。

早くその絵の所に行こう……と思ったが、探すまでもなかった。目の前に飾られていた。

「……………っ！」

ユニオは思わず叫びそうになり、慌てて口を押さえた。

そこに飾られていたのは、まさにその絵だった。

赤ん坊抱いた母親の後ろに観覧車が描かれ、そこにピエロが立っていた。

「どういう事……？」

別に不思議でもなんでもなかった。その絵は光月圭一郎が境東学園に寄贈しただけであり、この個展の開催期間中だけ学園から借りここに展示しているだけなのだ。

少し怖さがあったが、噂にあるようにピエロが赤ん坊を抱いているわけではない。普通の絵だ。でも、少しだけ怖い。だが、指定された場所がここであるいじょう、ここで待つしかない。

「早く来ないかな……」

ユニオは辺りをキョロキョロと見回した。人はそれなりにいるが、みんなその絵の前を素通りしていく。

そんな彼女の前に、一人の少女が近付いてきた。どうやら、彼女もここで誰かを待っているようだ。

腰まである長いストレートの髪がとても上品だった。面立ちも整っていて綺麗だ。お嬢様と言われても違和感がない。携帯電話が気になるのか、しきりにそれを見ている。

ユニオは声を掛けようか迷っていた。その時、彼女の方が先に声を掛けてきた。

「もしかして、輝きの使者ですか？」

少女はオドオドとした声で言った。これが間違いなら、なんだこいつは？ みたいな顔をされてしまう。

「……………あなたも？」

ユニオのその返事に少女はホッとした表情になった。

「よかった……女の子で。男の人ならどうしようかと思いました。でも、冗談でなく本当だったんですね……」

彼女は緊張の糸が切れたのか、少し饒舌になった。

「あ、ごめんなさい。わたしは……くれ……」

少女――呉羽彌季（みき）は思わず自分の名前を言いそうになってしまった。

「わたしは、セパレイター。あなたは？」

「あたしは、ユニオ。よろしく」

ユニオは笑顔で手を差し出すと、セパレイターはそれに応えた。

「あたしたち二人だけなのかな？」

「違うと思います」

ユニオの疑問にセパレイターは即答した。

「どうして？」

ユニオはその根拠がわからなかった。

「それは……さっきの電話でオプスキュリテが君たち三人の健闘を祈ると言ってましたから」

言われてみればそうかも、と思った。それにしても、そこまできちんと聞いている彼女に圧倒されていた。ユニオは、オプスキュリテの名前すらきちんと覚えていなかった。なんとなく、そんな感じで覚えていたのだ。最初に名前を読めなかったのだから無理もないだろう。

「なるほど……という事は、もう一人いるわけなんだ……」

その様子を少し離れた場所で一人の少女が見ていた。ポニーテールが、可愛さというよりもスポーティーな感じの少女だった。

「なるほど、あれがオレの仲間か……」

彼女――星霜（せいそう）鴫絵（ときえ）は、二人の仲間を吟味するかのようじっと見ていた。

「まあ、別にいいか」

その二人は、彼女にとって及第点だった。

彼女はゆっくりと二人に近付いていく。

それに気付いたのはセパレイターの方だった。

「あ、あなたも……輝きの使者ですか？」

それに対して鴫絵はコクンと無言で頷いた。

「オレの名前はコネクターってんだ」

「オレ……？」

鴫絵――コネクターの口から出たその言葉に、ユニオは違和感を感じた。というよりも、女の子で自分の事をオレと言う人に会った事がないだけなのだが……。それはセパレイターも同じだった。

「えっと、わたしはセパレイターっていいます」

少し怯えながら名乗った。自分の事をオレという人が少し怖かったのだ。

「あたしはユニオ。よろしく」

そう言って手を差し出す。

「ああ、よろしくな」

彼女は優しくそうな顔をした。

それを見て、セパレイターは安堵のため息を吐いた。怖い人ではないようだ。少なくとも危害を加えるような事はなさそうだった。

「とにかく、これで揃ったわけね」

ユニオがそう言った時だった。

ブブブブッ……ブブブブッ……！

どこかで低い音がした。なにかが振動しているようだ。

「なんの音だ？」

コネクターが二人に訊いた。

わからない、と二人は首を振った。

その間も音は鳴り止まない。

耳を澄まして音をよく聞く。

「この辺から……」

ユニオが音がする辺りに手を伸ばした。そこは絵の裏だった。

「えっ？」

なにかが手に触れた。固くて冷たかった。

ユニオはそれを握りしめ、裏から出した。

……と、三人は沈黙した。それは携帯電話だった。それがバイブレーション設定になっていて、それがずっと震えていたのだ。

三人は他の人の目に付かないようにできるだけ隅に移動した。

「誰の電話だ？」

コネクターが言う。

「わからないけど……」

「出てみてはどうでしょうか」

セパレイターが言った。

「え、でも……」

その間も携帯電話は着信を告げ続けている。

「じゃ、じゃあセパレイターが出てよ」

ユニオはそれをセパレイターに押しつけるように渡すが、セパレイターはそれを拒否する。

「や、でも、わたし怖いですから……」

「それはあたしだって……」

「まったく、しょうがねえな」

それを見かねたコネクターが電話を取り上げると通話ボタンを押した。

「もしもし」

強気で言ったコネクターだったが、少し怯えた声にならざるをえなかった。

『やあ、輝きの使者諸君、なかなか時間が掛かったようだね。だが、どうやら三人が揃ったようだね』

機械で変えたような声が返ってきた。さっきのあの声だ。

「おい、オレたちをここに集めてなにをする気なんだ」

電話を無視してコネクターが言う。

『まあ落ち着こうじゃないか。順を追って説明していこう。その前に、他の二人にもこの声はちゃんと聞こえているね』

オプスキュリテは確認するように訊いた。

その声は、問題なく二人にも聞こえていた。

『返事はないようだが、まあ、聞こえていると判断させてもらおう。そうそう、そのままだも君たちの声はこちらに届くので、電話を代わる必要はない。安心したまえ』

「どういう事ですか？」

ユニオが訊いた。

『どうもなにも、そういう事だよ』

きちんと返事が返ってきた。

ユニオは別に大きな声で言ったわけではない。普通の声で喋っただけだ。

「どういう事でしょう？」

セパレイターが首を傾げた。

『どうもなにもない。そういう事だとしか説明できないね』

その疑問に答えになっていない答えを出したのはオプスキュリテだった。

「そんな事はどうでもいいからよ、オレたちが集められた理由ってのはなんなんだ？」

コネクターが苛立たしげに言った。

『そうやく本題か。だが、それは以前も言っただろ？ 人々を`輝きの園、に導くのさ』

「その`輝きの園、ってのはなんだよ」

『コネクターだね、怒らないで落ち着いてくれよ。今の人々の心は闇に支配されている。それでいいと思うかい？ そうじゃないだろ？ 人々の心は光で満ち溢れていなくてはいけない。だから、君たちがその闇に支配された心を解き放ち、光で溢れさせてあげるのさ。どうだい？ 人々を光の園に導く、素晴らしい事だとは思わないかい？』

どうやら、`輝きの園、というのはそういう事だったらしい。ユニオは一人で納得した。

「だけど、どうやってそんな事をするわけ？ あたしたちはなにをすればいいの？」

『別に難しい事はなにもないさ。君たちの能力を使えばいい』

「能力？ なに言ってんだ？ オレたちは.....他の二人は知らないが、少なくともオレは超能力者でもなんでもないんだぞ！ そんな能力とか言われてもだな.....」

『それに関しては問題ない。確かに君たちは超能力者ではなかった。それは昨日のメールを受け取る前までだ。だが今は違う。今の君たちは輝きの使者だ。君たちそれぞれにそれを実行するための能力がある』

三人は同時に信じられないという表情をした。

『それについて説明しておこう。コネクター.....君が対象となる人物と心を接続し、輝きの使者諸君がその中に入る。そしてユニオ.....君がその闇となっているものを探し出し、闇を追い払って輝かせる。最後にセパレイター.....君がその対象となる人物との心の接続を断つ。以上だ』

説明を聞いたせいで、余計にわからなくなった。

「どういう事なのか、わからないんですけど.....」

セパレイターが訊いた。

『百聞は一見に如かずだろう。実際にしてみればいい。特に呪文などは必要ではない。念じるだけでいい』

「その対象者っていうのは？」

ユニオが訊く。

『そうだったね。しばらくすればわかるさ。対象者の上に闇が見えるだろうからね』

「闇？ どういう事だ」

『コネクター、君は怒りっぽいようだね』

オプスキュリテが小馬鹿にするかのように笑った。

「そんなの、あんたには関係ないね」

『そう言わないで欲しいね。君たちはオレの手足だ。オレにはそれに命令する権利がある』

「なんだと。だったらオレは……」

『辞める事はできないよ。既に始まっているのだからね。さあ、もうすぐセカイは眠りにつくだろう。全ての連絡はこの携帯電話でする事になる。もちろん、君たちから連絡する事も可能だ。落としたり無くしたりしないようにね』

くっくっく、と笑ってオプスキュリテは電話を切った。

三人は、プープープー……♪ と鳴り続ける電話をじっと見ていた。

茫然とした表情のまま、ただ電話を見つめるしかできなかった。

「どうなってるんだ？」

しばらく続いた沈黙を破ったのはコネクターだった。

「わけがわからないじゃないか！ いきなり輝きの使者だとか言われて……どうなってるのかサッパリ……」

コネクターも上手い言葉が見つからなかった。昂ぶった気持ちを言葉に出来なかった。

憤っているコネクターを、二人は啞然と見ていた。

「二人はなんとも思わないのか？」

「なにもって……」

「わたしも、その……」

ユニオとセパレイターはタジタジになる。

「とにかく、その闇が見えるとかなんだよね」

ユニオがまとめようと言った。

「そうですね……。でも、そう言われてもまだよくわかりませんし……」

「ああ。能力がどうのと言われてもな……」

セパレイターとコネクターも戸惑いを隠せない。それはユニオも変わらない。

「で、どうするの？」

ユニオが二人に訊いた。

「どうしましょうか？」

セパレイターが疑問で返す。

「そういえば、なにか言ってなかったか？」

「そうですね……世界が眠りにつくとか、そんな事だったと思います」

セパレイターがコネクターの疑問に答える。

「お前、頭いいのな。どうしてそんな事憶えてるわけ？」

「別になんでもないですよ」

「謙遜するなって……って、オレって結構難しい言葉知ってるねえ」

と、自分に酔いしれるコネクター。

「まあ、それはそれとして、世界が眠るってどういう事だろう？」

コネクターを無視するかのようユニオが言った。

「どういう事でしょう……？」

セパレーターもコネクターを無視するように考え込む。

「……おい、二人ともさ、オレを無視するなよな」

「とにかく、どうすればいいのかわからないし……普通に絵でも観ない？」

「そうですね、そうしましょうか」

と、和みモードのユニオとセパレーターだった。

「あ、オレも仲間に入れろって」

「じゃあ」

と、ユニオを先頭に三人は塔の階段を上り始めた。

MLTは中央が大きな柱のようになっており、そこにはエレベーターやフロアがある。そして、円柱の塔の壁面に螺旋状の階段がある。その壁面に光月圭一郎の絵が飾られているのだ。その数はゆうに百点を超えるものと思われる。

いったいどうすれば一人の人間がこれだけの絵画を描けたのか謎である。何十年も描いているのならわからなくもないのだが、彼が絵筆をとったのは、ほんの三年ほどなのだ。単純計算なら十日で一枚となる。

本職の絵描きならまだしもだろうが、彼はそれが本職ではない。むしろ、本職の方が忙しいはずで、その時間がとれたとはとうてい思えない。

あくまでも趣味の範疇でこれほどの絵を描いたというのは、彼だからこそだろう。それこそ、睡眠時間を削りでもしない限り不可能だろう。第一、その睡眠時間もあったのかどうか定かではない。

そのような生活をしていた彼がどのようにしてこれほどの絵を描いたのか、それは未だに謎のままである。

その光月圭一郎がほぼワンマンで経営していたのがアビリティー・ムーン（株）である。

その光月圭一郎が三年前になくなり、一時期経営が悪化する事態に見舞われたが、役員会を組織し――以前も存在はしていたのだがあくまでも名称だけだったため、生前から光月圭一郎の右腕と云われていた高澤吉郎（きちろう）を筆頭にして新たに組織された――経営をたてなおして以前のようにまで戻った。そして、彼は代表取締役社長として就任した。

そのアビリティー・ムーンのレクリエーション部門が今回のイベントを企画したのだ。その裏には高澤吉郎の提案があったとも云われている。

しかし高澤吉郎も、光月圭一郎がどうしてこの塔を建てたのかサッパリわからなかったし、今でもわかっていない。利用価値がないのだ。少なくとも自分にはわからない。

ワンマンでなければ実現しなかった。光月圭一郎の独断で決まったものなのだ。

もちろん高澤吉郎は反対した。しかし、反対を続ける事はできなかった。何故なら、光月圭一郎は自分の財産でこのMLTを建設すると言い出したのだ。そう言われては反対する事ができない。

建設後はアビリティー・ムーンの一部として取り込まれるそうだ。一社長が自らの資産で会社の建物を建てるなど聞いた事がない。

しかし、彼はそれを問題なくしてしまう男なのだ。

それは高澤吉郎が一番よくわかっている。いや、わかっているつもりでいる。

しかしながら、この利用価値のない建物はアビリティー・ムーンにとってはお荷物でしかなく、なっている事も事実だ。一応会社名義にはなっているものの、その所有者はやはり光月圭一郎であって、それを取り壊すのも忍びない。

なんとか利用価値を見出そうと思案したものの、テナントを入れるには不向きとしか思えない

街の真ん中に聳え建つ謎の建物としか認識されていない。

光月圭一郎はこれをどうしようとしたのだろうか……。

そうして提案されたのが、今回のイベントだった。

光月圭一郎は話題性があるし、お誂え向きにも彗星の接近という天文イベントがある。それが三年前の日蝕イベントを彷彿とさせてマスコミも思ったように騒いでくれた。

マイナスにしかないものをプラスに変える。そうするしかないのだ。でなければ、会社自体が危うくなってしまふ。

今までの管理などは光月圭一郎の遺産でなんとかしてこれた……というよりも、既にそうするように手続きがされていた。だが、それも三年間のみで、これから先ここを維持していく事も困難になってしまう。

もしかすると、彼はそれを見越して……三年後の今を既に知っていて？ そうとしか思えない。

だとすれば、高澤吉郎たちは未だに彼の手の上にいるのかもしれない。

高澤吉郎は、展望階から外を眺めながらそんな事を考えていた。

そして、まさにその通りだったという事に彼が気付くのはまだ先の出来事だった。

輝きの使者の三人は、階段の両脇の壁に飾られた絵を観ながら上っていた。

そこには、空に浮かんだ岩や、'パイプではない、と註釈のついたパイプの絵や、海岸を這うような蠟燭の絵が飾られている。

「……へえ〜、変な絵ばっかだな」

コネクターがぼやくように言う。近くにいる人たちも、なんだろう変わった絵、とか言っている。

「まあ、確かに変わった絵ではあるけどさ」

ユニオが呟く。

だが、セパレーターだけは違った。

「そう？ 素敵だと思うけど。それに、これって模写よね」

「モシャ？」

その意味が分からずコネクターが訊く。

「模写って、あの絵を観て絵を描く……って上手く説明できないけど、あの模写？」

「ユニオは知ってるみたいですね。その模写です。わかりやすく言えばコピーでしょうか」

「それって、ダメなんじゃないのか？」

コネクターが驚きの声をあげる。

「もちろん、それを本物として売買する事はダメでしょうが、それを模写とわかっているなら問題ないと思いますけど？ それに、模写は一種の芸術的作品ですし」

「まあ、よくわからないけど、いいんだ……」

コネクターは納得したように頷く。

「模写って事は、この絵には本来の作者がいるんだよね」

ユニオが訊く。

「そうです。この絵はルネ・マグリットですね。他のものもそのようですし、どうやらここはマグリットの模写のコーナーのようです。あの入口の絵はオリジナルのようでしたし」

ユニオは、へえ〜と納得しながらも、あの入口の絵の話題には背筋を凍らせた。

彼女としては思い出したくもない絵だ。実際にそれを体験した事はないが、その話だけでも怖い。というよりも、絵の雰囲気怖いのだ。不気味なオーラのようなものが出ている。

「なあ、あの絵もその……なんとなんとかって人の模写なのか？」

コネクターは青空の旗が描かれた絵の隣を指して言った。

そこには、この雰囲気とはかなりかけ離れた絵が飾られていた。真っ白な中に一筋の黒いラインが右上から左下に向けて描かれていた。まるで白い中に黒い光が射し込まれているかのようだった。

その隣には、暗闇の中に黒っぽいカーテンが並んでいる絵が飾られている。

「さあ？ その両脇はマグリットみたいだけど……わたしは観た事がないですね。もちろん、わたしは全て知っているわけじゃないですから、もしかしたらそうなのかもしれませんけど……」

「そんな事ないんじゃないかな。あたしも違う気がする」

ユニオもなにか違うものを感じていた。

「やっぱりそう思うか？ オレも変な感じがしてさ」

コネクターも首を傾げる。

「ねえ、ここ、なんだろうね？」

他の客が首を傾げている。その視線の先にはあの白と黒の絵がある……はずだ。だが、

「どうして一枚だけ空いてるんだろう？」

「ホント、変なの」

その言葉に三人は同時にその客を見る。

いきなり三人に見られたその客は、えっえっ、と狼狽える。

「あ、申し訳ありません」

セパレイターが謝る。

「なんでもありませんので。申し訳ありません」

その客は不思議そうな顔をしながら階段を上っていった。

「おい、どういう事だよ」

その客がいなくなるとすぐ、コネクターが言った。

「わかりません」

セパレイターは首を振った。

「どうやら、あたしたちにしか見えていないのかもね」

三人は無言で顔を合わせる。

「どうなってんだ？」

と、コネクターが呟いた時、異変は起こった。

「それにしても変な絵ばかりね……」

さり気なく失礼なことを呟く鳥居優里亜。

「変な絵って――」

そんな事ないだろ、と言おうとした岩城孝之だったが、改めて観てもそうは言えそうになかった。

「――まあ、わかりにくい抽象的な絵ではあるけどな。これはこれでいいんじゃないか？」

二人が観ているのは、月と太陽がいくつも描かれていると思われる絵だった。これは光月圭一郎のオリジナルだ。

「まあ、面白い事は面白いんだけどね……デザインの観点からじゃ……」

「そりゃそうだろうよ。それは無理だって」

「やっぱりそうかな……」

「そうだよ」

そんな事を言い合いながら、それでも二人は楽しそうに光月圭一郎の絵を観ていた。

それにしても、妙な空間だよな……。

と、取材半分で来た岩城孝之はその場所全体が気になっていた。

螺旋階段の両脇に飾られた絵。螺旋階段が人がすれ違う事ができるくらいの幅なので観るのは苦労はしないが、両脇からの絵の圧迫感は否めない。

普通の画廊のような広さではないので、他の人のペースに合わせていけなければならないという事もある。

前の人が進むとようやく次の絵が観れる。しかし、そのペースは的確で、それほど苦ではない、少なくとも彼は。時折じっくりと観たい絵もあるが。

たしかに、ここではなにかが起こりそうな気がする。三年前にあんな事件があった事をどれくらいの人が憶えているのだろうか。

人という生き物は忘れる生き物だ。故にすぐになかった事にしてしまう。

そもそも生き物というものは、現在と少しの未来に生きているのであって、過ぎてしまった過去などどうしようもないのだ。終わってしまったものをどうにかする事など不可能なのだから。

それにしても、やはりわけのわからない絵ばかりだ。抽象画だと云ってしまえばお終いだけど。まるで、変な世界に迷い込んでしまったような気になる。

ラララ～♪ ラララララ～♪ ラ～♪ ……………――♪

ふいに歌が流れた。歌詞のないラララだけの歌で、ゆっくりとしていて静かな歌なので観賞の妨げにはならないだろう。だが、そのリズムは眠りを誘う。

「おやおや、こんな所でか……」

鳥居優里亜がポツリと呟いた。ハッとして岩城孝之が見る。しかし彼にはわかっていた。彼女

は鳥居優里亜ではない、と。

「メビウス……」

彼はその存在を知っていた。

十二年前……いや、もっと前から彼女の中に住んでいた裏の世界の住人。

「やあ」

メビウスは短く答えた。

「どうして、お前が……」

怯えていた。何故なら、メビウスが出てくる時はなにかが起こっている時なのだ。しかも、普通の人間では対処できない異常事態が。

「この歌……」

「この歌がどうかしたのか？」

「……すぐにわかる」

その歌を歌っている歌手が誰だったか、岩城孝之は必死に思い出していた。

確かにどこかで聴いた事がある。それも、かなり頻繁に、だ。

確か、J-POPで人気があって……。

なんとなくの輪郭は浮かぶが、肝心の名前がわからない。

「誰だ……誰だ……」

「気にする事はない。声の主はここにはいない。これは録音されたものを再生しているだけに過ぎない」

気にするなと言われても気になるものはしょうがない。

誰だ……誰だ……。

あいうえお順に名前を浮かべていく。

あ……い……う……え……お……か……き……く……——！

栗林（くりばやし）莉奈（りな）だ。

最近売れ出した歌手だ。しかし、パッと出ではない。長い下積みの末に花開いたのだ。

きちんとした基礎ができており、一発屋ではない。唄うだけでなく、作曲やアレンジを手掛けるなどもしている。

その開花は、作詞家である美竹（みたけ）達也（たつや）とコンビを組むようになったのがきっかけとも云われている。

しかし、この歌は聴いた事がない。

もちろん、歌詞がないのでCD化されていないと推測できる。

このイベントのためだけの曲なのか……。

そこまで考えが到達した時、

パタッ！

パタッ！

トサッ！

ガツッ！

あちらこちらで人が倒れていく。

「な、どうなってるんだ……」

思わずメビウスを見る。メビウスがなにかしたのか？

「ボクはなにもししていない。この曲のせいだろうね」

そう言って上を見た。もちろんなにもない。スピーカーがあるだけだ。

「おい、この人たちどうなってるんだよ」

わけがわからない。

「眠っているだけだ」

眠ってる？

「さて、なにが起こるのか……。厄介なヤツがいないといいがね」

そう言うと、メビウスは姿を消した。

そこに残されたのは、眠ってしまった多くの人と、ポツンと立ち尽くす岩城孝之だけだった。

「やれやれ……」

「どうなってんだよ、これ……」

輝きの使者たちは我が目を疑っていた。というよりも、なにが起こっているのかサッパリわからない。

曲が流れ出したと思えば、すぐに周りの人たちが倒れだしたのだ。それも一人や二人どころではない。彼女たち以外の全員だ。

「大丈夫ですか」

彼女たちはそれぞれ近くの人に声を掛ける。

「……………」

しかし、誰も反応しない。

「どうやら、眠っているようです」

セパレイターが言った。

その瞬間、三人は同じ事を考えていた。

「もしかして、これがオプスキュリテの言っていた……」

ユニオは青ざめていた。半分冗談だと思っていたのだ。それが今、現実になろうとしている。

「これが、世界が眠りにつく……」

セパレイターがガタガタと震えている。

「マジかよ……」

コネクターも声が震えている。

「そ、そうだ。携帯！」

ユニオは携帯の事を思い出した。

「そうだよ。それであいつに訊けば……」

ユニオが頷き、携帯のボタンを押そうとする。

「……………」

「どうした？」

しかし、携帯を睨んだまま動かないユニオ。それをコネクターが不審そうに見る。

「……………番号わかんない」

緊張が解ける声だった。

「大丈夫ですわ、着信履歴を見れば……」

そう言ったセパレイターにユニオは、

「そうなんだけど……番号がないの」

と、言った。

「嘘だろ！ そんな事……」

コネクターはユニオから携帯電話を奪い、ペチペチと操作する。

「……………マジかよ」

全身から力が抜けて、携帯を落としそうになる。それをセパレイターが受ける。

「どういう事でしょうか？ メモリーにもなにも入っていないようですし……」

それ以前に気付くべきだった。そこは圏外だという事に。

あまりの動揺に誰も気付いていないが、この建物の中は最初から圏外なのだ。携帯電話はもちろんの事、PHSも圏外となる。有線の内線しか通じていないのだ。ここではトランシーバーなどの無線関係も使用できない。

それは、世間から完全に隔絶され、心ゆくまでこの空間を楽しんで欲しいという光月圭一郎の提案により、楓春彦がそう設計したのだ。

ブブブブッ……ブブブブッ……！

突然携帯が震えだした。

「え、なに？ どうなってるの？」

ユニオは突然に事に慌ててしまう。

「とにかく出ろよ」

「そうですわね。ここに掛けてくるのは……」

「……オプスキュリテだけ」

そうユニオは頷いて、通話ボタンを押した。

「もしもし……」

『やあ、輝きの使者よ。ついに時は満ちた。心に闇を秘めた者たちを`輝きの園、へ導くのだ』

「ちょ、ちょっと待ってよ」

一方的に切られそうだったので慌てて話をする。

『なにかな？』

「あたしたちからも電話できるって言ったわよね」

『確かに』

オプスキュリテは、なんでもないかのように答えた。実際になんでもないのだから仕方ないのだが。

「それって、どこに掛ければいいのか。番号は？」

『不要だ』

その答えは三人にとってわけがわからないものだった。そもそも、電話に番号が不要などわけがわかるものではない。

「どういう事だよ！」

『コネクターは相変わらずだね。もう少し落ち着いた方がいいと思うね』

「余計なお世話だ！」

『まあ、いいだろう。それは全てオレに繋がる。番号など意味を持たない』

「どういう事ですか？」

セパレイターが訊く。

『通話ボタンさえ押せばいい。わかってもらえたかい？』

「それだけ？」

ユニオが呆気にとられた声で言う。

『そう、それだけでいい』

「どんな原理だよ」

コネクターが呟く。

「さあ？ わたしにはサッパリ……」

セパレイターは首を傾げる。

「ユニオは……」

と、コネクターがユニオに視線を移す。

「わかるわけないって」

「……だよな」

と、ため息。

『さあ、闇が浮かぶ者の心の扉を開き、`輝きの園、に導くのだ』

そう言うと、電話は切れた。

三人は無言で見つめあった。

「するしかないってわけか」

「そうみたいだな」

「そのようですね」

ユニオ、コネクター、セパレイター……それぞれがそれぞれに、そして自分に言う。

しかし、改めて眠っている人たちを見てもどうなっているのか理解できない。あの曲になにかあるのだろうとは想像できたが、理解はできない。

曲を聴いただけで眠ってしまう……？ 一種の催眠術なのだろうか？

セパレイターはそんな事を考える。

だがしかし、自分たちはなんともない。……選ばれたから？ 人を選んで催眠をかけているのだろうか？

それに、有耶無耶になっているが、あの携帯も謎が増えるばかりだ。

もちろん、その電話の主であるオプスキュリテについても。よくよく考えれば、自分たちはなにも知らない。知らずになにかをしようとしている。

とにかくわからない事ばかりだ。

「さて、とにかくなんだっけか？」

コネクターがユニオに訊く。

「闇が見える……だっけ？ そんな人を捜しましょうか」

「そうですね」

セパレイターが頷く。

と、三人は眠っている人を踏まないようにしながら階段を上っていく。

まったく見事なものだ。ここまで綺麗にみんなが眠っているというのは。

「だけどさ、闇が見えるってどういう事だろうな？」

コネクターが誰ともなしに呟く。

「わからないけど……実際にそうならわかるんじゃない？」

ユニオが呟きで答える。

三人は四苦八苦しながら階段を上り続ける。

この塔は、普通の建物にすれば三十階ほどのものに相当する。最上階まで階段で上るだけでも一苦労だ。それに加えて人を避けながらなのだ。

その闇が見える人がどこにいるのかわからないいじょう、最上階まで上るくらいの覚悟は必要かもしれない。

しばらく上っていると、

「あ、あれそうじゃない？」

それを見つけたのはユニオだった。

自分たちと同じくらいの年齢の少年の上に黒い球体が浮かんでいる。おそらくこれがオプスキュリテが言っていた闇なのだろう。

「え……っ？」

その対象者の顔を見て驚いたのがセパレイターだった。驚いているというよりも、引きつっているようにも見える。

「どうしたんだ？」

コネクターがセパレイターを覗き込む。セパレイターは手を口許に当て、ガクガクと震えている。

「もしかして、知ってる人？」

ユニオが訊く。

「……………」

しかし、セパレイターの耳には届いていない。彼女は目の前の少年に釘付けになっていた。

「宮架（みやか）君……………」

セパレイターの口からこぼれた名前。

「……宮架？」

コネクターはその名前に聞き覚えがあった。それは、大切な親友の彼氏の名前。何度か話を聞かされたので覚えている。

「もしかしてお前、宮架の知り合いなのか！ おい！」

コネクターはセパレイターの肩を掴み揺する。

突然のことにセパレイターは声が出ない。

「ちょっと、コネクター……………」

ユニオはコネクターを止めようとする。それに我に返ったのか、少し落ち着いた口調でもう一度訊く。

「宮架を知っているのか？」

「……………う、うん」

セパレイターは小さく肯定した。

「……そう……なのか……」

途端、コネクターから力が抜けた。

「どうしたの、二人とも」

ユニオはなにがわからず、完全に蚊帳の外だった。

どうしてここにいるの？

そんなものは愚問だった。

わたしもそう願っていた。

もしかしたら宮架君がここにいるかもしれないって……。

あの日、なにがあったのかはわかっている。

パパが光月圭一郎を殺した。

その後、彼の哀しそうな顔を見た。

そして、なんとなく悟ってしまっていた。

あの巻き添えで殺されてしまった、もしくは怪我をした人の中に彼の大切な人がいたんだって事が。

当時、誰かと付き合っているとは噂で聞いた。だから、きっとそうなんだろう。

やっぱり本当だったんだ。

淋しいな……失恋か……。

でも、もしその子が死んでいたら……なんて不謹慎な事まで考えてしまった。

その子を殺したのはわたしのパパなのに……。

そんな人殺しの娘なんか絶対好きになってくれない。だって、仇だもの。

だから、好きだっていう気持ちも伝えられない、絶対に。

そう、絶対に、だ。

どれだけ好きでも許されない。もし彼が赦してくれてもわたしがわたしを赦せない。

「セパレイター、大丈夫？」

ユニオの声でハッとす。

「は、はい……大丈夫です。じゃあ、早くこの人を『輝きの園』に……」

そう言うと、セパレイターはコネクターを見る。

「あ、ああ」

彼女も自分の世界に浸っていたのか、驚いてビクンとなる。

だがすぐに目を閉じる。それに倣うように二人も目を閉じた。

三年前に遡る――

「はあ～あ」

俺は盛大なため息を吐いた。

まったくついてない。

このくじ運のなさ……どうしようもないな。

「どうしたんだ、涉琉（わたる）」

落ち込みモードの俺になんの用だろうね……。まあ、心配そうに訊いてくれるのはいいんだけどさ。まあ、いいヤツだね。トモダチってヤツですかね……。いいヤツだよ、この小椋（おぐら）秀治（ひではる）はよ

。

「ちょっと鬱なんだ。だから放っておいてくれないか」

「鬱ってお前な……」

「しゃーねーべや。俺だって好き好んで鬱になるかよ」

「そりゃそうか。で、なにでそんなに鬱ってるんだ？」

鬱ってる、ね……。いい表現だぜ。

「ちょっと、な。自分のくじ運のなさを恨んでいる」

「くじ運……なんだ、そりゃ」

「おう、ちーざす！ そんな言葉も知らないのかね、マイフレンド！」

オーバーアクションの身振り手振り。戯けてみたはいいものの、これはこれでかなり虚しい。

「……………」

とまあ、そんな事を言うと無言になるマイフレンド小椋。

しばらく無言の時間が流れる。

「……大丈夫でちゅか……？ おつむが沸騰していまちえんか……？」

「……………！」

赤ちゃん言葉はやめい！

「……………悪かった」

「よちよち」

そう言いながら頭を撫でてくる。

「だからやめい！」

俺はその手を振り払う。

「で、なにがはずれたんだ？」

「チケット……」

ぽつりと呟く。ちょっと英語風に。

小椋はそんな俺を少し莫迦にするように見て、

「……チケット？ なんのだ？」

と、なんとか真顔になって訊く。

「ムーンライト・タワー完成記念パーティーのチケット」

俺はため息を吐きながら言った。

「……………なんじゃそりゃ？」

本当に知らないのだろう。ポカンとしている。

「そのままの意味だが。他にどう言えばいい？」

「……マジで？ っていうか、なんでそんなパーティーに？」

まあ、確かに変わり者と思われるかもしれない。

第一、そんなパーティーのチケットが抽選ってというのが不思議だ。俺も不思議だった。

だがこのパーティー、メインイベントがある。

それが、世紀の日蝕観賞だ。

こんな街中でこれほど好条件の場所はない。

周りよりも高く、周囲に高い建物はない。

なによりも、天井が開閉でき、普通の天井がガラス張りの天井に早変わり。三百六十度ガラス張りの大パノラマ。

こんないい場所で、日蝕を観賞できるなんて、まるで夢のようだ。しかも、御馳走つきってんだから文句なしだ。

アビリティー・ムーン株式会社様々だ。

で、今回その招待チケットが一般向けとして十組分用意されたのだ。

日蝕に興味はなくても、そのアビリティー・ムーンのパーティー目当ての人間が多かったようで、倍率は一千倍とも五千倍とも……その倍率はミリオンともビリオンとも云われていた（国内限定なのでビリオンは有り得ないのだが）。まさにプラティナ中のプラティナチケットだ。

まあ、天下のアビリティー・ムーンのパーティーだからな、もしかしたら有名人が来るかもしれないし、ミーハーな人にはまさに宝物のようだろうな。

ちなみに、当選者には本人確認がされる。警備上の問題などだろう。まあ、当たり前だ。なので転売は不可能。だが、もし仮にこれが転売可能だとすればいくら値段になるのか、全く想像もできない。一節には、一キログラムの純金よりも価値があるとかないとか。そもそも、金の価値って今どんなもんよ？

とまあ、それくらいのプレミアチケットなわけだ。

「かくかくしかじかで……」

「これこれうまうまというわけか……」

と、省略するとこんな会話。

「で、そのプレミアに応募したが、見事に落選した、と」

「言ってしまえばそうなる」

そうなのだが、改めて実感すると、改めて落胆してしまう。

「っていうかさ、それって当選する方が奇跡だろ。くじ運がどうのってレベルじゃないぞ」

そう、これに当選するのはまさに天文学的な確率なのだ。そこいらの出店（テキ屋）のくじ引きで一等を当てるよりも困難なのだ。まだくじ引きの方がリアリティあるよな。

ちなみに、辞書を引けばわかるのだが、この的屋の説明文はどうだろう。

それはちょっとおいといて閑話休題。

「いや、やっぱりくじ運がいいヤツは当選するだろ」

「や、だからさ、それって確実に運だろ……ん？ あ、それがくじ運か」

「そういう事だ」

当選したって事は、くじ運があったって事。で、はずれたって事は、くじ運がなかったって事。わかりやすいだろ？

「でもよ、どうしてはずれたってわかるんだ？」

「それはだな……」

届いた封書を見せる。

小椋は中からペラペラの紙を取り出し、それを見る。こいつは、当落関係なしに応募者全員に届く。つうか、よく考えたら、郵送費だけでも結構な額になるんじゃないのか？ さすがだぜ、アビリティー・ムーン！ 大企業様はする事が違う！

まあ、日蝕自体はどこでも観れるわけだし、いいんだけどね。

ああ、いいさ！ 別に俺はムーンライト・タワーで絶対に観なきゃいけないわけじゃないしな！

とりあえず、自分を納得させなきゃいかん。

ホント、そうでもしないと……どんどんマイナス方向に……。

ちゃちゃちゃ、ちゃちゃちゃ～♪ ちゃちゃちゃ、ちゃちゃちゃ～♪ ちゃちゃちゃちゃちゃ、
ちゃちゃちゃちゃ～♪

軽快な着信音が鳴る。ちなみに、まだ常識の中で、とかいう訳（かなり意識だが）になる曲だ。

誰からだ……？

俺は鬱モードのまま電話に出る。

「もしもし」

ああ、声に覇気がないね……。

『もしもし、朱音です』

少し緊張したような、震えた声が返ってくる。

「朱音か……どうしたんだ……」

朱音には昨日話したので、俺が落選した事を知っている。今日も優しく彼氏を慰めてくれるのか……。嬉しいね……。

『あのね、落ち着いて聞いてね』

そう言う朱音が一番落ち着いていない。

「どうしたんだよ。……つうかさ、俺は落ち着くもなにも沈みっぱなしなんだけどさ……」

次の瞬間、我が耳を疑った。ああ、疑ったさ！

『あのね、ムーンライト・タワーのチケットが手に入ったの！』

「……………はい？」

『だから、チケットが手に入ったの！』

わけわからん！ だいたい、転売や譲渡は不可能のはずだ。

「あのさ……」

『本物なの！ なんかね、友達が当選したんだけど、それを譲ってくれるって……』

「いや待て。譲渡ってできないはずだろ？ 申し込み時に名前書かないといけなかったしさ……」

」

『うん、そうだよ』

「うん、そうだよ……って、えらく簡単に言うなよな」

『問題なしだよ。あたしの名前だから』

「……待て。確か昨日、朱音もはずれたって……」

『うん』

「だったら、どうして……」

『だから、友達に代わりに出してもらったの』

さっきから会話が進んでいないような気がしてきた。

「朱音、お前どんな裏技使ったんだ？」

『別になにもしてないよ……ちょっと友達の家に着くように……ね』

確かにそうだった。一つの住所に応募権が一つ。つまりは実質一人一通。しかも、家族の名前なども使えない！

だがしかし、それでどうやって……？

『ちょっと代わってくれ』

電話の向こうで声が聞こえる。

『あ、ちょっと代わるね』

『もしもし』

俺の返事を待たず誰かと代わった。

「もしもし」

『朱音の彼氏か？』

「……あ、ああ。そうだけど……」

そのぶっきらぼうな態度に驚いた。えらく敵対心があるように思える。

『まあ、あんたはどうでもいいんだが、朱音に頼まれてな』

「あ、ああ。そうか。ありがとう」

感謝してはいるのだが、なんとなく相手の態度に敵対的な態度になってしまう。本当はもうちょっと友好的にしたいのだが……。

『あんたの為じゃない。礼を言われる覚えはない』

「そうか……。でも、とりあえず言わせてくれ。俺の気持ち的に」

『好きにすればいい』

「ああ」

なんなんだ、こいつは……。やけにぶっくらぼうっていうか……。愛想がないぞ。素っ気ない

。

なんか、朱音と全然性格が違うよな……っていうか、正反対っぽいけど……。でも、友達なんだよな。だいたい、俺の事を話しているという事は、かなり仲がいいんだろう。

『朱音を泣かせるなよ』

「……………」

唐突になにを仰るのかな？ そんなの当たり前だろ。好きな女を泣かせるかっての。

あ、でも……心配はさせたな……。俺、めっちゃ鬱モードだったし……。

なるほど、それで俺に一言物申すってわけか。やっぱり、仲いいんだ。こんなに朱音を心配してるなんて。

『朱音に代わる』

『もしもし……トキ……えっと、今の子なんだけど、トキがチケット当てたんだよ』

嬉しそうだな……。

「それはわかったって。でもさ、どうやって……」

って、会話がループしてるし。

『それはね……うふふ、秘密』

「……………」

秘密って……。

『……もしもし？ 怒った？』

「いや、怒ってはないけど……」

正直、ちょっとムカツときちまった。それと、ちょびっと淋しかった。

『ごめん、ごめん。あのね……キーンコーン……』

遠くの方……っていうか小さくチャイムの音が聞こえる。

『あ、もう授業が始まっちゃう。とにかく行ける事になったから。じゃあね、また』

「……………」

一方的に切られた。

ツーツーツー♪ と空しい音だけが聞こえる。

「なんだったんだ？」

小椋が訊いてきた。

「……いや、よくわからんが、とにかく俺はムーンライト・タワーのイベントに行けるらしい」

「……はあ？ よくわからんが……とにかくよかったじゃないか！」

「そうだよな……よかったんだよな」

いまいち実感がわからない。つうか、わけがわからない。

放課後、俺は朱音に会う事にした。いつもの公園だ。

遠くの方で、女の子二人が騒いでいるようだが、今の俺にはどうでもいい。急いで朱音に駆け寄る。

「お待たせ」

「待ったよ～」

と、にこにこしている。そして、カバンの中からなにかを取り出した。

「じゃーん！」

嬉々とした表情でそれを見せる。

「これがそのチケットなので～す！」

朱音が見せるチケットをよく見る。確かに朱音の名前だ。

「トキね、こういうのがよく当たるっていうからお願いしたの。そしたら、本当に当たるんだもん、驚きだね」

クルクルと回りながら言う。元気だな……。少し恥ずかしい。

「でもよ、どうしてお前の名前で……」

それが気になって仕方なかった。

だいたい、住所が違えば届くはずがないわけで、他人の名前では無理だし……。

「それはね、こうしたの！」

そう言って、招待券が入っていた封筒を見せる。

確かにアビリティー・ムーンの封筒だ。俺の所に届いたものと同じだ。

……………ん？

「この住所どこだ？」

見覚えのない住所だった。少なくとも朱音の住所ではない。もちろん俺の住所でもない。

「よく見てみなよ」

「ああ」

言われてよく見る。

しかし、やはり住所に見覚えはない。

目を名前の所に移す。

「星霜方 勾野朱音様、

にやぬう？

「もしかして、これって……」

「どう？」

朱音が得意そうに笑みを浮かべる。

「これね、トキが思いついたの」

「……すげえな」

正直、俺には考えもつかなかった。

確かにこれなら、その友達の住所で自分の名前のチケットが入手できる。

応募規定では一つの住所……とあるだけで、同じ名前での規制はない。それは同姓同名がいる事を考慮してだろうけど。

まさかこんな抜け穴というか、裏技が……。

存在しない住所や全く別の住所だと宛先不明などになるが、これなら問題なくその住所に届く。その友達を書いたのだとすれば筆跡も違うから同じ人物だとは思われにくい。まあ、住所が近いのがネックだが、規定に反していないいじょう問題はない。

規定に反せず……すげえ！

こんな事を思いつくその友達って……。

いや、感謝せねば！

足を向けて寝れないな……。

あとで気付いたのだが、親戚（同じ名字に限る）に頼むのもありだな、と。

「すごいでしょ？」

「あ、ああ……」

もう言葉が出なかった。

「というわけで、これで行けるね」

俺の我が儘で行きたいと言ったわけだが……。すげえよ！

まさか本当に行けるなんて……。

倍率を聞いた時にはちょっと無理かもって諦めかけてたし、落選の通知が来た時は、まさに鬱モードになったわけだし……。なのに、それなのに……すごすぎる。

「夢じゃないんだよな……」

疑いたくなってくる。俺は夢の世界にいるんじゃないだろうか？ もしくは、これは妄想なのではないだろうか？

「夢じゃないよ。現実だよ」

朱音の優しい声が聞こえる。女神の囁きのようだ。

「なんだか信じられないよ」

「あたしもだよ。トキに感謝しないと」

「本当だな」

とても幸せだった。

もう有頂天だった。

そう……頂点だった。という事は、あとは下がるのみなのである。

当日、俺の胸は爆発してしまいそうなくらい踊っていた！

もう、よくわからない言葉でしか説明できない。

遠足の前なんて比較にならない。

ドキがむねむね（死語）状態！

「おはよう」

待ち合わせは公園の時計の下。

そこへ笑顔で朱音がやってくる。

おはようといっても、既に昼過ぎだ。

「おはよう！」

俺は満面の笑み。周りからは変な目で見られそうなくらい口許が弛んでいると思う。

「涉琉くん、御機嫌だね」

「もう、メチャ嬉しいっすよ！」

「どっちが？ パーティー？ それとも……」

「どっちも違うよ」

そう言うと朱音は、えっ？ という顔になる。

もちろん天文ショー（日蝕イベント）は楽しみだし嬉しい。それにパーティーも場違いな俺が参加できるのは緊張するけど嬉しい。

でも違うんだな……。

「俺が嬉しいのは、朱音と一緒に日蝕イベントを最高の場所で観れる事なんだって。あ、最初の方を強調ね！」

そりゃまあ、正直言うと一人でも嬉しいけど、やっぱり好きな人と過ごすのは最高だと思うんだよね。

俺の趣味に付き合わせて悪いとは思うけど、楽しんでもらいたいし……。

これって自己中でしょうか？ ……自己中ですね。でも、我が儘だろうとなんだらうと、こうなんだから。

「……照れちゃうよ……」

朱音は俯いて頬を染めた。

「でもさ、あんなすごいとこのパーティーだろ？ どんな服で行けってんだよな。正装ってなると、俺タキシードだぜ？ そんなの持ってないし」

「あたしもドレスなんだよね……。持ってない」

そうなのだ。心と現実的な話になったが、俺たちはそんなもんを持っていない。普通の中学生だ。

なので、今は普通のカジュアルな服なのだ。まあ、あんまりだらけたものじゃなく、ちょっとおすましした感じのものは着ているんだけど……。それでもやっぱり、周りが正装だと、ね……。少なくともスーツくらいは着ておくべきなのだろう。

だけどな……。

よっぽどこかでレンタルとかしようと思ったのだが、それもどうだろうという話になった。
なによりも、そこに行くまで（帰る時もだけど）その服で街をうろつかないといけないのは恥ずかしい。まるで仮装行列（行列はできないけど）じゃないか。

七五三なんかでもないわけだし、場違いな恰好だ。

散々悩んだ挙げ句、普通の服で行こうという事にした。

それでも朱音はドレスとまではいかないが、それらしい落ち着いた恰好をしている。俺はまんまカジュアルだ。

う〜ん……まあ、招待状には「楽な恰好でお越し下さい。正装の必要はありません」とは書いてあったけど……。しかもかなり強調して（太字で下線まで引かれていた）。

だからといって、それを鵜呑みにするというのは……。

でも、そういう服がないのも事実だし……。

「とにかく行こうか」

「うん」

お互い場違いじゃないか緊張しながら、会場であるムーンライト・タワーに向かった。

会場に着いた途端、俺たちは肩の力が抜けた。

誰も正装した人はいなかった。いや、数人いた。チケットを持っているところを見ると、俺たちと同じ一般招待客なのだろう。そりゃまあ、案内状に正装の必要はないって書いてあっても、正装してくるものだろうから不思議ではなかった。

だが、今の状況を見る限り、明らかに浮いている。会社の偉いさんのような人たちは、誰も正装していない。それどころか、スーツすら着ていない。綿パンにシャツなどの上着を着ているだけだ。

まったくもってラフな恰好をしている。

これには俺たちも驚いたが、もっと驚いているのは正装をしてきた人たちであろう。なんだか道化だ。

「なんだか、普通の恰好だね」

「ああ、正装とかしなくてよかったな」

と、自分たちの非常識さがかえって常識となった感じだ。

取材のテレビカメラなんか数台あるが、そのスタッフも少し驚いているようだった。

普通こういう席には、ピシッとスーツを着こなした人がいるはずなのに、ここには誰もいない。一部場違いな正装はいるけど。

そのスタッフと打ち合わせをしていると思われるアビリティィー・ムーンの社員っぽい人もジーンズにトレーナーなのだ。

その近くには、俺たちと同じくらいの歳の女の子がいた。同じ様な顔をしているので、多分双子なのだろう。

関係者であろう集団には、他に同じくらいのヤツは……あ、男が一人。あとはいわゆる大人ばかりだ。

本当にここでアビリティィー・ムーンのパーティーがあるのか怪しくなってきた。

キーーーーーンッ！

あのマイク特有の反響音がして、ビクンと驚いてしまった。

『本日はムーンライト・タワー完成記念式典にお越し下さいまして、誠に有り難う御座います。お世話になっております各企業の皆様、高い倍率の中見事に当選されました皆様、ようこそお越し下さいました。わたくし、アビリティィー・ムーン株式会社代表取締役社長の光月圭一郎と申しますー』

マジで？ と思った。今挨拶しているのは、あのジーンズにトレーナーの人だったのだ。確かに、それなりの役職にいる人だとは思っていたけど、せめて部長とかそういう人だと思っていた。なのに、まさか社長とは……。

『ー本日は天候にも恵まれまして、日蝕もよく観測できる事と思われます。まさにこのムーン

ライト・タワーの存在意義があるイベントになるものと思われます。本日は、肩肘張らず、気楽な気持ちでお過ごしいただけますよう、心より願っております。本日は誠に有り難う御座います。どうぞ楽しんでいって下さい』

気楽な気持ち～のあたりで、正装をしてきてしまった人をチラリと見ていたのが気になったが……きっと、企業関係の人たちには、再三に渡って私服で来るように言ったのだろう。それなのに、タキシードとドレスで来た人を見て、自分の意思が伝わらなかった、とでも思ったのだろう。

と、今度は女性がマイクを持った。もちろん、スーツなんかは着ていない。まさに休日のそれだ。

『それでは、一般招待客の皆様のチケットを確認したいと思います。チケットと写真付きの身分を証明できるものを持って、こちらまでお越し下さい』

それに従って、数組が指定された場所に移動していく。もちろん、俺たちもその流れに乗る。その中には、あの正装コンビがいた。やっぱり招待客だったようだ。なんだかとても恥ずかしそうにしている。他には……結構若い人が多いようだ。高校生くらいの人もいれば、俺たちと同じくらいの人もある。

順番にチケットと名前を確認されていく。と同時に、持ち物検査と身体検査もされた。

「はい、失礼しました」

と、検査をした人が言う。

「それでは、あちらでお待ち下さいませ。まもなく開場致します」

と言われて元の場所に戻った。

それにしても、大企業のパーティーなのに、それを感じさせないこの空気はなんだろう。その辺のガーデンパーティーにでも招待されている気分だ（今まで招待された事はないけど）。

『それでは、時間になりましたので中にお入り下さい。今日はパーティーのみという事ですので、申し訳ございませんがテナントなどは出店しておりません。ご了承下さい』

と、ラフなシャツを着た人がマイクで喋る。

完成まで色々と噂になったりで話題になったこのムーンライト・タワーだが、今まで中が公開される事はなかった。それが今……自分はその中に入るとしているのだ。これだけでもすごい体験だ。

「テレビカメラの入場はご遠慮下さい。取材はここまでです」

と、先程のシャツを着た人が取材の人たちを止めている。

「中に入れてもらえませんか？」

などと願い出ているが、

「外の取材だけという約束でしょう。お引き取り下さい。この中に入れるのは、私が招待した方のみです」

と、社長である光月圭一郎氏が凜とした態度で言う。

「しかし……」

それでも、まだ食い下がろうとする。それに対し光月圭一郎氏は真っ直ぐな目で、

「これが不服と仰るのでしたら、今回の取材テープを今ここで回収させていただきます。以降、あなた方の取材は一切お受けいたしませんので……」

これには、取材陣はなにも言い返せない。

若手の取材班なら文句の一つも出ただろうが、どうやらベテランが来ていたようだ。ここで彼に反抗する事が、どういう事になるのかわかっている。光月圭一郎氏の手に掛ければ、会社の一つや二つ……人の一人や二人……簡単に初めから無かったもののできるだろう。

「おわかりいただけたようですね。それではお引き取り下さい。お疲れさまでした」

笑顔でそう言うと、光月圭一郎氏も中に入っていった。その爽やかな笑みが、彼の強大さを物語っているようだった。

「すごいね……」

「ああ……あの社長、すごいよ」

朱音の言葉に、ほとんど自動的に答える。完全に心は彼に向いていた。

「え？ この建物だよ？」

「あ、ゴメン。すごいな……」

ずっと社長を見ていたので、てっきり社長の事だと思ってしまった。そのやりとり一つにしても、なにか惹きつけられるものがあった。カリスマ性……。生まれながらの指導者……。神の資質を持っているのだろう。

で、改めて中を見ると……。

「すごい……」

ホント、壮大というか圧倒的な力というものを感じた。

中心に柱のように塔が建っている……ように見える。まるで塔の中に塔があるような感じだ。その脇に螺旋階段があった。まるで塔に階段が巻き付いているかのようだ。

「最上階までは階段でも行けますが、時間が掛かりますし疲れますので、本日はエレベーターをご利用下さいませ」

と、イベント関連のスタッフであろう、若い女性が案内してくれた。

確かにここを階段で最上階まで上るのは至難の業だろう。事前の情報だと、三十階ほどあるそうだ。確かに階段で上るのは無理がある。

というわけで、目の前の塔のような部分に入る。すると、そこは広々としていた。まるで大きなホールのようなようだ。

そこには、隅の方にエレベーターが三機あった。もちろん、全員一緒には乗れないので、何回かに分けて乗る。

そして、どういうわけか、偶然なのだが、俺たちは光月圭一郎氏と一緒に乗る事になった。

「やあ、君のような若い人がこういう場所に来るとは……私としても嬉しいよ」

と、気さくに話してきてきた。向こうは気さくでもこっちは緊張してしまう。

「は、はい」

「まあ、そんな緊張しなくてもいいよ」

と、俺の緊張をわかって笑いながら言う。これには、同乗している社員の人もどうしていいも

のかわからないようだ。まあ、いつもこうなのだろう。

「今日のイベントはね、みんなに世間のしがらみなんか気にせず楽しんでもらおうと思ってね。取材なんかは初めは断るつもりだったんだけどね……高澤がどうしてもと言ってね……」

と、同乗していたあのシャツの男を見る。

「社長……」

高澤と呼ばれたその人は、俺に向かって話す社長をたしなめるように言う。

「まあいいじゃないか。私もこんな若い人と会話するなんてあまりないからね……つい嬉しくて……あ、まあ娘がいるけどね……あれたちはあれで……難しいんだよ」

と、高澤という人に言う。

俺はどうしていいものか朱音を見る。と、彼女もどうしていいものか俺を見ていた。

と、光月氏と高澤氏が話をしている間に最上階である展望階に到着した。

正直ホッとした。

「さあ、ここが最上階の展望階です」

光月氏がみんなに言う。

次々にエレベーターを降りると、順次歓声があがる。

他のエレベーターからも参加者が次々とやって来る。

すごい……。すごすぎる。

天井はまだ閉じられたままだが。

「全員が到着するまで、もうしばらくお待ち下さい」

と言っている間にも他のエレベーターで次々にやってくる。

「……さて、全員が到着されたようですね」

そう言うと、光月氏は指をパチンと鳴らした。

と、その音を合図に天井がガラス張りになっていく。覆っていたものがスルスルと床の方へ移動する様は、まるで手品のようなようだった。

「おお～っ」

俺は息を呑んだ。そこには、欠け始めている太陽があった。

「どうやらもう始まってしまっているようですね。それでは、挨拶などは抜きに致しまして、この世紀の天文ショーをご覧ください」

俺たちは黒い透明の下敷きのようなものを渡された。まあ、サングラスのようなものだ。太陽を直接見ると目がやられてしまうので。

「すごいね……」

朱音が呟く。

「ああ、本当にすごい……」

俺は朱音の手をギュッと握りしめる。

感動だ……。

もちろん、家でも見ようと思えば見えるのだけれど、家の中からは見づらいので外に出なければいけない。だからといって道路でってのはどうも……。きっと、俺たちが待ち合わせをした公

園でも同じ様な人がいるのだろう。この辺で広い場所といえばあそこくらいだ。

だが、俺たちは建物の中にながらにしてこれを見ている。きっと、誰よりも空に近い場所
で。

「……ったく、こんなのなにが楽しいのかな……」

ん？ 誰だ？

声の主を捜す。

「鏡琴、そんな事言わないで……綺麗じゃない」

「まあ、綺麗だけどね」

と、あの双子だった。

「どうしたの？」

「あ、ううん、なんでもない。綺麗だね……」

朱音は「？」を浮かべていた。

「でもさ、こういう時って……ほら、よくあるじゃない」

と、なにやら照れたように言う。

なんの事……ああ、なるほど。

「君の方が綺麗だよ」

と、朱音をじっと見て言う。

「ぷっ……」

俺たちは思わず笑いそうになって口を押さえた。

思ったほど緊張する事はなかった。普通の展望台で観測しているような感じだった。

そういう雰囲気になったのも、光月圭一郎氏の功績だろう。

堅苦しい人たちばかりで観測しても面白くないだろう。肩の力を抜いて、一人の人間として楽しもうとしたのだろう。この空間を共有して。

その間にも、次第に太陽が隠されていった。

そう、なにが世紀のイベントなのか……それは今回は金環食だからなのだ。

太陽を隠した月の周りから太陽の光が輪として見える……。

部分日蝕は多々あれど、皆既や金環は滅多にお目にかかれるものじゃない。

俺はこの世紀のイベントを心の底から堪能していた。こんな素晴らしい機会を堪能せずしてなにを堪能しろというのか！ 神様にカンシャ。

しかし……十分近くも上を見上げていると（正確には斜め上だが）首が痛くなってくる。というか疲れてくる。

それに、金環食も何時間も続くものじゃない。徐々にずれ始める。

再びゆっくりと屋根が現れる。それよりも先に部屋の電灯が点けられたので、逆に明るくなった感じがする。

すごかった。

こんなにすごいものを、こんな場所で観る事ができるなんて……人生の幸運を使い切ってしまったかのようだ。

「……皆様、世紀の金環食はお楽しみいただけましたでしょうか」

光月圭一郎氏がそう言い、パチン！ と指を鳴らした。

しかし、なにも起こらない。そう思った瞬間だった。

突然暗くなった。

「な、なに？」

「ど、どうしたんだ？」

「きゃあ」

一般招待客が騒ぎ始める。

「落ち着いて下さい」

光月圭一郎氏のその一言で一斉に静まり返った。

その間も暗くなっていく。

やがて、真っ暗になった。次の瞬間、少しだけ明るくなる。

「えっ？」

自分の服を見て驚きを隠せなかった。周りの人の服も光っている。

「これって……」

ブラックライト。

それしか考えられない。

思わずキョロキョロと見回してしまう。

「皆様、天井をご覧下さい！」

と、突然の光月氏の声に天井を見上げる。

「……………」

言葉が出なかった。

それは誰もが同じだったようで、関係者も驚いていた。きっと、この仕掛けを考えたのも作った……作らせたのも光月氏なのだろう。彼だけが知っているビックリだったのだ。

で、天井になにがあったかといえば……。

夜空がそこにあった。いや、宇宙がそこにあった。

ブラックライトによって浮かび上がる星星。

遠くに見える星雲。

そこにあるのはまさに宇宙だった。

よく見れば床も同じように作られており、足元にも宇宙が広がっている。

そう、今俺たちは宇宙に立っている。

この場所全てが宇宙だった。

「……すごい……………」

それ以外の言葉が出てこない。どう伝えればいい？ どう表現すればいい？

すごい。

その一言で充分だろう。

どれだけ讃美の言葉を並べても、この光景には物足りない。

すごい。

この一言しかない。

誰もがこの光景に酔っていた。

宇宙の全てを見ているかのようだった。

宇宙に立っている。

徐々に明るくなっていく。それはまるで宇宙の夜明けのようにも感じられた。

やがて、普通よりは若干弱い光量になる。だが、まだブラックライトの効果はあるようで星星も見える。絶妙なバランスだ。

「今宵はお忙しい中お越し頂き有り難う御座います。それでは、宴をお楽しみ下さい」

光月圭一郎氏がそう言うと指をパチンと鳴らした。その音は静まり返っていた空間によく響いた。

そして、その合図を待ちわびていたかのようにドアが開き、数人の人が入ってきた。ちなみに彼らも私服である。

彼らはそれぞれ銀色のカートを押している。その上には色とりどりの料理が乗せられていた。

だが、普通のパーティーのイメージと違うのは、そこに乗せられている料理の全てが小さいという事だった。いや、小さいというのは表現として間違っていないとは思うのだが、自分でも違うような気がしてきた。そう、言い換えれば一口サイズなのだ。それも、精密に計算されたように洗練されている。まさに芸術だった。

「みなさま、どうぞ気軽に談笑でも楽しみながら味わって下さい」

そう言うと、カートを運んできた人たちが外に出ていった。

なるほど、これなら会話の途中で一口食べるという感じで、会話の邪魔にもならないだろう。普通の立食パーティーなんかだとお皿を持たなくてはいけないから気軽とは言い難い。だが、これならどうだろう。ひょいと手でつまんでお口へポイ。女性でも一口で食べられる大きさだ。

すごいぜ、アビリティィー・ムーン！

俺は朱音と一緒に、その料理に舌鼓をうっていた。

「美味しいね」

「ああ」

そして、金環食について語る。

つつい語ってしまっして申し訳ないと思うのだが、こればかりは自分でも……。だが、朱音はそれを楽しそうに聞いてくれる。嬉しい。

「楽しんでくれているかね」

へっ？ と間抜けな顔で間抜けな声を出してしまう。

突然話し掛けられ対処できなかった。

「申し訳ない。彼女との大切な時間を邪魔してしまったようで……」

と、そう言って頭を下げているのは光月圭一郎氏だった。

「あ、いえ……いや、そんな……」

完全にパニックだった。

「あ、あの……その……」

「いや、そんなに慌てなくても結構。ここではわたしはただのオッサンだ。社長とか主催者なん

かじゃなくね」

と、気さくに笑い掛けてくれる。

「あ、はい……」

だが、どうも釈然としないというか、変な感じがしてたまらない。というよりも、こういう大人に出会った事がなかったのだ。

「彼女さんの方はどうかね？ 楽しんでくれているかい？」

「あ、はい……とても楽しいです」

と、完全に萎縮してしまっていた。

「ほら、そんなに肩に力を入れずにリラックスだよ。別に儀礼なんかはここでは必要ない。なんだったらタメ口でもいいんだぞ」

と、俺たちの肩をポンポンと叩きながら言った。

大会社の社長とはとても思えない。

確かにそれらしい風貌はしているし、そんな空気もあるが、話をしている限りでは普通の人といった感じだ。

「ところで君は――」

俺の目をじっと見る。俺にしか聞こえないくらいの声だった。もちろん、隣にいる朱音には聞こえているだろうけど。だけど、それは俺にしか聞こえていない気がした。

「――世界をどう思う？」

と、真剣な顔で言った。

わけのわからない質問だった。

突然すぎてなにも反応できなかった。

「すまない、忘れてくれていい」

そう言いながら立ち去ろうとする。まるで、ガッカリだとでも言うかのように。なにか期待されていたのだろうか。そして、俺はそれを裏切ってしまったのだろうか。

「謎だらけだと思います」

俺は慌てて答えた。

「……………謎だらけ、か……。なるほど」

と、立ち去ろうとしたのをやめ、もう一度俺を見た。嬉しそうだった。どうやら俺は期待に応えられたらしい。

「わたしは、世界とは裏表があると思っている」

「裏表……」

「そう、ここ……つまりわたしたちが今いるこの世界を仮に表としよう。だが、世界はそれだけでは本当の姿を見せていない。つまりここではない世界――裏があるわけだ。その二つが存在して初めて世界と呼べるのだと思う」

表と裏で世界……。

「まあ、どうでもいい話だ。そう、わたしにはもうどうでもいい」

これが、宮架渉琉が光月圭一郎と最後に交わした会話だった。

いったいなんだったんだろう……。

わけがわからないとかいうレベルじゃない。いや、わけがわからないのだけれども。

光月圭一郎はどうしてあんな事を言ったのだろうか。しかも、俺に……。

世界には表と裏がある……。つまり、裏の世界があるという事。

それもわからないが、どうして俺にそんな事を話したんだろうか。

結局、こんにち今日に至るまでそれはわからないままだった。その答えがわかるのは、彼が裏の世界の

住人に会う時になるだろう。だが、彼にその機会は訪れる事はない。

世界は裏表がある……。

その言葉が三人の心に響いていた。

「あの男、なにを……」

コネクターが呟く。

「でも、そうかも知れませんね」

セパレーターが同意するように言う。

「……………」

ユニオはなにも言わない。ただ、光月圭一郎の背中をじっと見ていた。

「いいじゃない、今はどうだって」

ユニオが冷たく言い放つ。

ユニオにすれば、光月圭一郎は決して印象のいい男ではない。

(そうよ、あんな男さえいなければ……お父さんは死ななかつた)

当時はどうでもいい事だと思っていた。だが、そのきっかけとなった人物を目の前にすると、気持ちも変わってしまう。

——タンッ！

と、というような音が鳴った。瞬間、明かりが消えた。

真っ暗になる。

隣すら見えない。

どうなってるんだ？

俺は恐怖を感じたが、どこか落ち着いていた。きっと、これも光月氏が仕掛けたものだろう。

他の人たちも同じのようで落ち着いている。

「ぐっ！」

近くで鈍い声。

途端に緊張する。

声の感じからして男のものだ。朱音じゃない。

それは少し安心したが、

「きゃっ！」

……………！

「朱音！」

俺は朱音を捜す。あの声は朱音だ。

「朱音！ どこだ！ 朱音っ！」

しかし、返事はない。

たったったっ……！

誰かが走り去る音が聞こえる。

ちっ！

舌打ち？

——タンッ！

照明が戻る。

……………。

全てが止まったように感じた。

実際、そこにいた誰もがなにが起こったのかを把握するまで時間が掛かった。

「きゃあーっ！」

誰かの悲鳴。

それが時間を動かした。

あちこちから悲鳴が上がる。

中央に横たわるジーンズにトレーナー姿。

光月圭一郎氏だ。

赤く広がる水たまり。

誰もが思った。

生きていない、と。

さらに増える悲鳴。

そして、逃げまどう人々。

パニックがここにあった。

だが、俺は動けなかった。

あ……あ、か、ね……………。

朱音は床に横たわっていた。

俺の足元に。

……朱音の服が赤黒く染まっている。

……まるで眠ったかのように……………。

朱音……………。

「うわあああああああああああああああつ！」

俺の叫びが虚しく響いた。

そんな……………。

オレは見ていられなかった。

こんな……こんな事って……………。

コネクターはこみ上げてくる感情を抑える事ができそうになかった。

できるなら、朱音を殺した犯人をこの手で殺したいとさえ思った。

「コネクター……」

ユニオがオレの手を握る。

「輝かせよう……どうすればいいのかわからないけど、輝かせよう」

輝かせる？

どう輝くってんだよ！

どうしたって、朱音は戻ってこない……………。

「コネクター……」

涙目でセパレイターもオレを見ていた。

「ユニオ……セパレイター……」

二人を見る。

そうだ、オレは輝かせるために、この宮架渉琉を`輝きの園、に導くためにここにいるんだ。
きっとそれが、朱音を救う事にもなるはず。

「ユニオ、頼む」

「うん、わかった」

ユニオは頷いた。

あたしは念じた。

この人の心が救われますように、輝きに満たされますように……。

ただ念じた。

それだけでいい。そうすれば、この人の心の闇は消えてなくなる。

その想いに反応するかのよう、周囲が光り始めた。

これで、彼は救われる……。

「そんな事はない」

「……………っ！」

どこからか声が聞こえた。

「やれやれ、こんな厄介な事をしようとしているとはね」

どこからか、一つの影が現れた。

「誰だ！」

コネクターが叫ぶ。

「ボクはメビウス。導く者だ」

影はそう言った。

メビウス……。

あたしはその存在を知っている。学校で噂になっていた。でも、そんなものは噂でしかないはずだった。

だけど……。

今、その噂が目の前にいる。

「キミたちはなにをしようとしているのかわかっているのか？」

感情もよくよう抑揚もない声だった。

「オレたちは、こいつを`輝きの園、に……ひっ！」

コネクターの顔が引きつった。

コネクターの首には、細いワイヤーのようなものが巻き付けられている。

そして、それはコネクターだけではなかった。あたしの首にも、セパレイターの首にも巻き付いている。

一体いつの間に……。

それは一瞬の出来事だった。

「残念だけど、ボクには誰が能力を使うかはわからなくてね……。どうやら、キミたち全員がそのようだからね。全員一緒……それが一番だろうからね」

冷たい声だった。

そんな……。

噂通りなんだ……。

だけど、ここで死ぬわけにはいかない。絶対に死んでたまるもんか！

「セパレイター……」

あたしは小声で話し掛ける。

「なに？」

セパレイターも小声で返す。

「今すぐあたしたちをこの心から切り離して」

一瞬考えたようだが、すぐに理解できたようだ。

「わかった」

言うが早いのか、セパレイターはその能力を解放した。

「ふう～……」

そこは、MLTだった。もちろん現在のだ。

階段では人が眠っている。

「なんだったんだ、アイツは」

コネクターが困惑したように言う。

「あいつは、メビウス。死神」

誰ともなしに言う。ただ、吐き出しただけの言葉。

「死神だって？」

「ユニオさん、どうしてそんな事を……？」

疑問に満ち溢れた視線があたしに注がれる。

あたしは、学校で流行っている噂の事を話した。

「なるほどね……。その変なメールの差出人か……」

「でも待って下さい。わたしたちは、オプスキュリテからのメールは受信しましたが、メビウスからのメールなんて……」

そうなのだ。そこが変なのだ。

あたしたちがここにいるのは、オプスキュリテとかいうヤツからのメールによるものであって、決してメビウスからのメールを受信したわけじゃない。

「とにかく、アイツはやばいヤツなんだな」

頷いた。

ブブブブッ……ブブブブッ……！

その時、携帯が着信を告げた。

オプスキュリテからだ。

「ねえ、どうする？」

あたしは、コネクターとセパレイターを見る。

「出るしかないんじゃないか？」

「でしょうね……叱責されるかもしれませんが、この状況ですから……」

ゴクリと唾を飲み込む。そして、恐る恐る通話ボタンを押した。

「もしもし……」

『やあ、輝きの使者の諸君。彼を`輝きの園、には導けなかったようだね』

知ってるんだ……。途端に怖くなった。

『心配しなくてもいい。君たちを責めたりはしない。邪魔者の事はわかっているつもりだ。というよりも、今頃とは、遅くて驚いているくらいだよ』

「もしかして、アイツが邪魔するのはわかっていたっていいのか！」

コネクターが声を荒げる。

『相変わらず怒りっぽいようだね。だが、その通りだ。アイツが来ない方がおかしいからね』
オプスキュリテは事も無げに言った。

「じゃあ、あたしたちはどうすればいいの？」

『どうもしないさ。これまで通りだ。まあ、彼はもう無理だろうから、別の人間を輝かせれば
いい、それだけの事だ』

「ねえ、宮架君は無理ってどういう……なんとかならないんですか？」

『おやおや、どうやらセパレイターは彼にご執心のようだ』

そう言うと、いやらしく嗤った。

明らかにわかっているのだ。わかっていると言っている。

『残念だけど、彼はもう救えない。途中で放棄するなんて、無茶もいいとこだ。それは君たちの
責だよ』

「そうね、そうかもしれない。あたしが悪い。ゴメン、セパレイター」

そう言うしかできない。

「じゃあもう一つ。メビウスをどうすればいいの？ このままだと、また邪魔される」

『おやおや、君はヤツを知っているようだ。確かにヤツは厄介だ。どうする事もできない。だが
、君は機転を利かせて、ヤツを閉じこめた……違うかい？』

そうだ。閉じこめた。そのはずだ。

「でも、そんな事くらいで勝てるとは思えない」

『確かに。では、ヤツが気付く前に終わらせればいいだけの事』

「そんなの無理！ あの死神から逃れるなんて……」

『なるほど。君はヤツを過小評価していない。それはいい事だ。ヤツを侮ってはいけない』

「そう思うならなんとかしてよ」

あたしは、自分の責任だとはわかっている、どこかにぶつけないと気持ちがおさまりそうに
なかった。

『構わない。君たちならばなんとかできるだろう。健闘を祈る』

それだけ言うと、電話は切れた。

そんな……。

カシャンと携帯が落ちる。

全身から力が抜けていく。

「ユニオ……」

コネクターが慌てて支えてくれる。

「無理よ……。絶対無理。あんな死神に勝つなんて……。あたしたち、殺されちゃう」
本音だった。

あたしたちが勝てるはずがない。

結局はなにもできないんだ。

いくら自分たちに普通じゃない力があるっていっても、あいつには通用しない。

だから、無力なんだ……。

「ねえ、メビウスとかいう死神に邪魔されないよう、早く次の人を捜した方がいいと思いますけど……」

少し遠慮気味にセパレイターが言う。

吹っ切れていない事はわかる。吹っ切れるはずもない。それでも強いな、セパレイターは。

「そうね」

そうだ。負けてられない。直接闘う必要なんてない。自分ができる事、しなければいけない事をすればいい。邪魔さえされなければ、あたしたちの勝ちなんだから。

「はあ……はあ……」

岩城孝之は、肩で息をしていた。それもそのはず、ずっと階段を駆け上ってきたのだ。しかも、寝ている人を避けながら。

「やっと見つけた……」

そんな彼の目の前には、メビウスがいた。もっとも、その身体は鳥居優里亜のものなので、容姿は彼女なのだが。

「やれやれ、危ないところだったよ……」

口調と内容が一致しない。飄々とそんな事を言う。

「危ないって……今回はそんなに危険なヤツなのか？」

孝之はその身体を心配していた。メビウスが負けるような事でもあれば、その宿主である鳥居優里亜も死んでしまうのだ。それだけはなにがなんでも避けたい。

「油断してしまったようだ……」

油断？

あのメビウスが油断など考えられない。

「それにしても、厄介な能力だね……しかも、カノジョたちはそれに気付いていない」

彼女たち……？ つまり、今回は一対一じゃないってわけか。

「申し訳ないが、今回はキミを護る事ができないかもしれない。もっとも、必要ないかもしれないけどね」

と、メビウスはニヤリと笑みを浮かべた。

「そろそろ芝居はよそうじゃないか――」

メビウスは孝之をじっと見る。

「――なあ、クライン」

その言葉を聞いた瞬間、岩城孝之の表情が崩れた。その顔から表情がなくなり、メビウスのような、どこか影のような存在感になる。

どこか薄く白く輝いているようにも見える。それは白い影のようだった。

「気付いていたのか」

抑揚のない声。

「当然だよ。キミに気付かないはずがない。それはキミが一番わかっているはずだ」

「なるほどね」

「まあ、まさかクラインの宿主が……なるほど、これはウンメイというヤツなのかな」

「それはわからないさ。どうでもいい事だ」

「そうだね」

感情のない会話が続く。

「それにしても、これで護るものが一つ減ったわけだけど、それでも大変だ。カノジョたちを護れるかな……」

「厄介な相手か……今回はどんなヤツなんだ？」

「わからない。それはキミの仕事だろ」

「確かに」

「第一、相手なんてボクには関係のない事さ。厄介なのは、巻き込まれているカノジョたちが、セカイに選ばれている、という事さ」

「なるほど、それは厄介だ」

「そう。セカイにさえ選ばれていなければ殺せばすむ事なんだけどね……残念ながら、セカイを護る者としては、そうはできない……厄介だね……」

三雲政孝がMLTに到着した。

それは、MLTに異変が起こってから四十五分が経過していた。

「どうなってるんだ、これは……」

MLTの周辺の人々は眠りについていて、まるで、毒ガスでも発生してしまったかのようだ。

念のためにハンカチで口許を押さえながらMLTに近付いていく。

倒れている人たちが規則正しい呼吸をしているので、生きているという事はわかる。なので、これが致死性のあるものであるとは考えにくい。その点では安心である。だが、いつ自分もそうになってしまうかわからない。なので、彼はずっと口元を押さえていた。

「それにしても、光月圭一郎か……やはりなにかあるのか？」

今までも光月圭一郎に関する噂は幾度となく耳にしていた。だが、どれもこれも信憑性がないものばかりだった。少なくとも当時はそう感じた。

しかし……。

しかしだ。メビウスという非現実的なものと遭遇してしまった今、思い返せば聞いた噂全てが本当だったように思えて仕方ない。

当人が死んでから思い知らされるとは……まさに亡霊のようだ。

「それにしても変だな……。中でなにが起きているのかわからないが、静かすぎる」

そう、この場所は静かすぎるのだ。全ての人間が眠っている事もあるのだが、こういう事態になっているのだ、メビウスが関わっていないはずはない。そうでなくとも、なにかが争っているに違いない。それにしては、なにもない事が奇妙なのだ。

もっとも、塔の中で起きている事が外にわかるはずもないのだが。

三雲政孝は入口に向かって歩き出す。足元には眠った人が倒れている。その人たちを踏まないように気を付けながら進む。

「ったく……どうなってやがる」

愚痴をこぼしながらも進み続ける。

やっとの思いで入口に到着したのだが、

「……なっ！」

中に入る事ができない。扉が開かないのだ。

「施錠されてる……か。まあ、普通はそうだろうな」

と、落胆はしない。それくらいは想像できていた。

しかし、このくらいで諦める事はできない。三雲政孝はMLTの周囲をぐるりと一周した。

「なんにしても不気味だよな……」

街中にぽつんと建つこの建物は、確実に周囲から浮いた存在なのだ。

光月圭一郎の意図がわかる者は誰もいないだろう。みんな、金持ちの道楽として処理していた

。

しかし、彼はそんな無意味な事をする人物でないと三雲政孝は思っている。彼が行う事全てになにかしらの意味は存在するのだ。だとすれば、このMLTの意味は……？ それはわからない

。

その理由を考えながら入口の反対側に来た時、

「これは……」

三雲政孝はそれを見つけた。

「こんな所に裏口……だと？ 非常口ってわけでもないしな……」

それは周囲の壁と一体になっており、よっぽど注意してみないと気付かないだろう。隠すようにそれはあった。

「怪しいが……行かざるを得ないだろうな」

三雲政孝は意を決して扉を押した。

扉は滑らかに動き、入口が現れた。

中に入ると、予想通り真っ暗だった。しかし、行き止まりではないようだ。倉庫のようでもない。まさに非常口かと思える造りになっている。

おそらく、設計上はそれを意図して造られたのだろう。入ってすぐ右手には階段があった。それは壁を伝うように螺旋になっている。

「階段か……」

真っ暗なので見上げてものにもわからないのだが、最上階まで上る事を考えるとげんなりしてくる。

「まあ、仕方がないか……」

三雲政孝は心を決め、階段を上り始めた。

ユニオ、コネクター、セパレイターの三人は、次の人物を捜して階段を上っていた。

人を避けながらなので、体力的にきつい。日頃の運動不足を呪う。

それでも上らなければならない。

死神に殺される前に、自分たちの役目を果たさなければならない。

輝きの園、へ導かなければならない。

その思いがより一層強くなっていく。

能力を発揮できなかったユニオ。

大切な親友の死を目の前にしたコネクター。

目の前で父親が人を殺す瞬間を見たセパレイター。

それぞれが闇を抱えている事に気付かぬまま、光を求めて上り続ける。

「まったく、どうなってんだ」

三雲政孝は真っ暗な階段を上っていた。

ライターの火を頼りに進むのだが、いかんせん長い。

グルグルと螺旋状になっているので、どのくらい上ったのかわからない。

もしかすると、別の変な世界に紛れ込んでしまったのかもしれないとさえ思える。

「どこまで続くんだ……」

おそらく最上階まで続いているとは思っているのだが、もしかすると別の場所に続いている可能性も否定できない。なにしろ、光月圭一郎という人物は理解しがたい事を平気でする人物だったからだ。

この階段も、どういう理由で設置されたのか想像もできない。

「ちくしょー……」

愚痴る気力もなくなってきた。

「中はどうなってるんだ？」

どのくらい上っただろうか、輝きの使者の三人はある少女の前で立ち止まっていた。

「次は……」

コネクターがその少女を見下ろして言う。

自分たちと同じくらいの年齢だ。だが、不思議なのは、その少女は花束を抱えているという事だった。

「誰かにプレゼントでもしようとしていたのかしら……」

セパレイターは哀しそうに言った。なにしろ、その花束は彼女の重みで潰れてしまっていたのだ。

「可哀相……」

セパレイターは自分の事のように、その事を悲しんだ。

「とにかく、彼女を『輝きの園、に」

ユニオが二人を見る。

「そうだな」

コネクターは頷き、そして念じた。

テミーサは、自分の計画が上手くいっている事に満足していた。

明日のムーンライト・タワーのイベントから全てが始まる。

逢魔ヶ刻の時代の前に行動できたという事は、既に勝利したも同然だ。

だが、油断してはいけない。本番はまだなのだから。そして、来るべき三年後まで気付かれてはならない。あの四人の門番には。

だが、それは問題ないだろう。少し前に現れたような噂を聞いたが、心配するほどではないだろう。

こちらが動けないように、あちらも動く事はできない。だが、自分が動けている事から、あちらも誰かが動いているかもしれないが。それでも、四人全員が動けるとは思えない。

誰か一人くらいならどうとでもなる。

さあ、五ヶ所の柱は完成した。準備は出来た。

この場所で全てが始まる。

ワタシが願ったとおりに事は運ぶだろう。我々の同志は、自分たちがワタシの思い通りに動かされているという事に気付く事なく。

さて始めようではないか、始まりの合図はワタシの死だ。

彼女——百花（ももか） 泪（るい）は、いつものように彼を見ていた。

ずっと、ずっと片想いの彼。

彼女はその彼の事をずっと見ていた。

こっそりとあとを尾ける。

「ねえ、犯罪じゃない？」

百花泪は突然声を掛けられて振り向いた。そこにいたのは、親友の坂木（さかき） まりかだった。

「……………まー」

振り向いた泪は、その声の主を咎めるような目で見ると。

「気付かれたらどうするの？」

「でも、犯罪じゃないの？」

「ち・が・う・の！」

と、自分で言って思わず口を押さえる。

「気付かれちゃうじゃない」

「って、さっきのは自分じゃん」

「……………」

正論なだけに反論できない。

「まあ、それはともかく、犯罪とはなんの事かなあ？」

と、あくまでもとぼける泪。

「なに言ってるの。なんて言ったっけ……えっと……スカートーだっけ？」

「ストーカーでしょ」

「って、わかってんじゃん」

「……………」

うっ、と黙ってしまう。誘導尋問に引っかかってしまった気分だ。

「まあ、そんな事はどうでもいいのよ。恋する乙女なんだから犯罪にはならないって」

「なるって」

即答。

「いいじゃない。彼のあとを尾行してじっと見つめてるだけじゃない」

「だから、それが犯罪だって。っていうかさ、あんなののどこがいいのかよくわからないんだけど」

その言葉に泪はまりかをキッと睨む。

「どこがいいって、もう全部に決まってるでしょ。まーの目は節穴？ そこに付いてるのはただの飾り？」

「うっわあ、非道くない？ っていうか、非道いよね。でもまあ、あの男の良さがわからないのは事実だけど。なんだかさ、暗そうっていうか、なんつうかさ」

「暗そうって、非道くない？ っていうか、非道いよね」

「あのさ、私の台詞真似しないでくれない？」

「台詞ってあんた……まあ、ごめん。で、なんの話だっけ？」

「なになって、ま一の男の趣味が悪いって話」

「むっかー！ 謝って。謝って。あ・や・ま・っ・て」

「や、事実だし」

「それが親友の言い種なわけ？ あの彼のよさがわからないなんて、お子チャマね……」

「じゃあ、何処がいいのか言ってみ。あの暗くてインテリっぽくてオタクっぽくて根暗そうじゃない」

「……………そこまで言う？ っていうか、よくそこまでけなせたもんね」

「お褒めの言葉ありがとう」

「褒めてないし」

涙は大きなため息を吐いた。

「彼ってさ、とってもハンサムで理知的な感じがしない？ っていうか、頭良さそうじゃん。そこに惚れる憧れるっていうやつ？」

「や、疑問系で言われても困るし……。……っていうかさ、私はその知識人っていうか、インテリっていうか、エッグヘッドっていうか、そういうのはどうもいけ好かないんだよね……」

「それって、全部同じじゃない？」

「気にしちゃ駄目だって」

「そういう問題？」

「そーゆー問題なの」

「……………」

涙はまた大きなため息を吐いた。

「じゃあさ、ま一の好みってなに？」

「よくぞ訊いて下さいました！ 私はね……爽やか系のハンサムで、スポーツマンで、爽やかな笑顔で、アクティブな人、かな」

「……なんだか、同じ様な事繰り返してるだけじゃん。つうかさ、要は汗くさい人って事？ もしかして、汗フェチ？ 匂いフェチ？ っていうか、それってなんかただけじゃない感じじゃない？ いや、本当に。やばくない？」

「汗くさいのは却下！ 爽やかだって言ってるじゃんよ。これ聞いて汗臭いとか思うのって、人としてどうかと思うよ」

「そんな事ないってば。……スポーツマンでアクティブなんでしょ？」

「そう」

「じゃあ、汗臭いじゃん！」

「それがまたいいじゃん」

「って事はだよ、汗フェチって事じゃん」

「別にフェチじゃないもん」

「フェチじゃん」

「汗が好きなんじゃないもん」

「じゃあ、なによ」

「汗ってキラキラしてるじゃない。そんなキラキラした笑顔がいいんじゃない」

「なにそれ。っていうか、少女マンガでよくある、あの薔薇を背負った感じ？ キラキラのトーンを背負っているような、あんなのがお望みなわけ？」

「ちょっと違うな.....ああいうのは、どっちかっていうと、泪が好きそうなタイプじゃん。なんだかさ、なよっとしてて、女々しくて、インテリで、キザっぽい感じ？ そんなの方が似合うじゃん、やっぱさ」

「あのさ、まーってサラリと非道い事言うよね」

「そう？ 本当の事—事実を述べたまでなんですけどね」

「.....」

「どしたの？ 黙ってさ」

「背後には気を付けた方がいいよ」

「どして？」

「闇討ちにあうかも」

「どして？」

「どしてって.....わたしが狙うから」

「っていうか、予告しちゃう駄目なんじゃないの？」

「関係ない。背後には気を付けてね」

「もしかして、そんな事言って油断させて、前から襲おうって魂胆？ うっわーやっぱ—、気を付けよう」

「っていうか、そんなにわざとらしいリアクションされても困るし」

「っていうか、いきなり闇討ちするって言われたこっちはどうなるわけ？ それはそれですごく困るわけなんだけど」

「それは、まーが悪いから」

「うわっ、私悪者？」

「悪者じゃん。っていうか、なんだとっていたわけ？」

「天使」

「.....」

また大きなため息。

「医者に行け」

「どして？」

「医者に診てもらえ」

「だから、どして？」

「や、本当にさ」

「どしてよ」

「いや……説明するのも嫌」

「……………嫌って、あんた」

「っていうかさ、どうしてわたしはまーと一緒にこんな話してるわけ？　っていうか、彼は何処？」

「ああ、そういえば見えなくなったわね」

「……………むっかー！　まーのせいじゃんよ！　まーのせいで……まーのせいで……彼を見失ってしまったー！」

涙は頭を抱えてうずくまる。

「や、をい、あのさ、そこまで落ち込むもんかね？」

「落ち込むわよ。もう、奈落の底どん底ずんどこって感じよ。恋する乙女のこの気持ち、まーにはわからないのよ……しくしく」

「……あのさ、しくしくとか口で言われても……」

「しくしくしくしく」

「全部掛けると？」

「 $4 \times 9 \times 4 \times 9 \times 4 \times 9 \times 4 \times 9 = \dots\dots$ って、暗算できるわけないじゃない！」

「じゃあ、筆算してもいいから」

「……うん……………って、この計算めんどくさい」

「まあ、ね」

「をいっ！」

裏拳でツッコミを入れる。

「えっとね……」

そう言って、まりかはカバンから電卓を取り出した。

「そんなのあるなら、先に出しなさいよ」

「や、まさか本当に答えようとするとは思わなかったし」

「って、なに？　この問題はなに？」

「や、なんとなく」

「……………」

と、涙は何度目かの大きなため息を吐いた。

「えっとね……いち、じゅう、ひゃく、せん、まん、じゅうまん……」

「って、数えなきゃいけないほどなわけ？」

「パッと見て桁なんてわかんないわよ、普通」

「なんのために区切られているんだか」

「そんなの関係ない。わからないものはわからないの」

「そうですか」

また大きなため息。

「えっとね……百六十七万九千六百十六」

「へえ～」

「それだけ？」

「うん」

「どして？」

「いや、どしてって言われても……どう反応しろと？」

「ほら、もっと感動するとかさ」

「どう感動しろと？ 電子卓上計算機で計算しただけじゃん」

「でもさ、ほら……」

「しかも、問題出したのってまーだし」

「……じゃあ、なんで私が計算したの？」

「そんなの知らないって」

「どして？」

「だから、どしてって訊かれても……」

「これって、涙が計算しなきゃいけなかったんだよね」

「まあ、そうかもね。答える義理はなかったけど」

「……………どして？」

「なにが、どしてなのかわからないし。まーだって答え知らなかったわけでしょ。そんな問題に答えてどうなるっていうの？」

「や、別になにも」

「でしょ？」

「そうだね」

「……………」

ため息を吐かないとやっていられない。

「っていうかさ、さっきから薄い話してるよね……」

「まあね」

「実のない会話だよな……」

「まあね」

「っていうかさ、どうしてまーがここにいるわけ？」

「や、それは涙がいたから」

「それって、説明になってるようななっていないような……微妙ね」

「いいじゃん」

「よくはないけどね」

「そう？」

「そう」

また、ため息。

「結局なにしてたんだろ、わたし」

「さあ？」

「彼は見失っちゃうし、まーと無駄な時間を過ごすし……」

「無駄な時間って、非道いな……」

「非道って、こっちの台詞だって。せっかく彼の姿を堪能してたのに……」

「あのさ、泪。ちょっと訊きたいんだけどさ」

「なに？」

「さっきから、彼彼言ってるけどさ、その彼って泪の事知ってるの？ っていうか、知り合い？」

「ううん」

泪は首を振った。

「なにそれ」

「わたしが一方的に見てるだけ」

「駄目じゃん」

「いいじゃん」

「よくないって。っていうか、もしかして、名前も知らないとか？」

「ビンゴ！」

「や、そんな笑顔で言うような事じゃないし」

「まあ、しょうがないじゃん」

「それでいいの？」

「よくはないと思うけど、やっぱしょうがないし」

「……………」

と、今度はまりかが大きなため息を吐く。

「そういえばさ、今度ね、ムーンライト・タワーで行われるイベントに行ける事になったの」

そう、これが全ての始まりでもあった。

ある傀儡師の仕掛けが起動しようとしている。

「や、また突然話題を変えるね、泪は」

「そう？」

「そうだって。脈略ないし」

「いいじゃん」

「まあ、いいんだけどね」

「でさ、彼を誘っちゃおうかなって……」

「誘えば」

即答。

「って、そんなにあっさり言わないでよ……。今言ったばっかじゃん。わたし、面識ないんだよ」

「そうだったね」

「そうなんだよ」

と、まりかは腕を組んでしばし考え込む。

そして、出た結論は――

「……じゃあ、挨拶すれば。わたしは百花泪という、あなたのストーカーですって」

と、いうものだった。

泪は少し顔を引きつらせる。

「……………馬鹿にしてるでしょ」

「うん」

「……………即答。しかも肯定されたし」

「だから、犯罪は駄目だって言ってるでしょ」

「……うう～。確かに最初に言われたけど……」

ちょっと脈略がわからないが、その言い方には納得せざるを得ない。

「だから、もうやめなよ」

「だからって、これをやめたら接点が……」

「あのねえ、初めから接点なんてないでしょ」

「ぐむう」

「ぐむうじゃないって」

「いいじゃん、好きなんだから」

「や、だからそれが犯罪行為への一歩なんだって。っていうか、既に犯罪行為？」

「なにが犯罪よ。ただ尾行しているだけじゃない……あ、厳密にはしてない、だけか」

「や、そんな言い直さなくてもいいから。どのみち犯罪だし。っていうか、訴えられるよ」

「大丈夫」

「なにが？」

「気付かれてないから」

「そーゆー問題？」

「そういう問題」

「マジ？」

「まこと」

「まことって……どうかな、それ」

「……ってというか、話がループしてない？」

「最初に戻ったね」

「ねえ、今までの会話はなんだったの？」

「無駄な時間」

「即答？ まーってやっぱ非道くない？」

「別に？ あんたが犯罪者になる前に阻止しただけだし。おっ！ 私ヒーロー？ ね、ヒーローじゃない？」

「違うし」

「あ、そっか。ヒロインか。間違えちった、てへへ」

「舌を出して笑われてもね……どうしろと？」

「犯罪をやめなさい」

「だから、犯罪じゃなくって恋なんだってば」

「じゃあ、犯罪らしくない行為をしなさいよ。ってこれ、行為と恋を掛けてみたんだけど、どう？」

「そんなのどうでもいいし。なによ、犯罪らしくない行為って」

「そりゃ、もう……口では言えないような事とか、あんな事とか、そんな事とか、えっ？ って訊きたくなるような事とか……もう、こんな事まで……。まあ、そんな感じかな」

「そっちの方が犯罪っぽく聞こえるんだけど……」

「泪はいったいなにを想像したのかな……」

そう言って、まりかは泪を肘でつつく。

「なにって、そりゃ……ねえ？」

泪は頬を赤く染め、手をモジモジとさせる。

「桃色な事を想像しちゃったりなんかした？」

「……………（コクリ）」

「桃色の血潮め！ まあ、どんな想像しようとして勝手だけどね。私も別段なにかを考えていたわけじゃないし」

「なにそれ」

「なんとなく、それっぽい事を言ってみただけ」

「むっかー！」

「いいじゃん」

「よくないし」

「気にしなさんな、犯罪者」

「だから犯罪者じゃないって」

「ゴメンゴメン、犯罪者予備軍」

「だーかーらー……」

「あ、私、用事あるからそろそろ帰るわ。じゃっ」

　　そう言い残し、まりかはさっさと帰っていった。

「なんだったの……？」

　　ぽつんと、涙だけがそこに残されたのだった。

「まーのせいで彼を見失っちゃった……」

　　坂木まりかとのウィットに富んだ（と、本人たちは思っている）会話を楽しんだ百花泪は、自室の椅子に座って、机に肘をついて考えていた。もちろん、名前も知らぬ彼の事だ。

　　彼女の中で、彼はかなり美化された存在となってしまっている。その姿は、明らかに現実とは異なり、まさに王子様となってしまっている。。

「愛しのあなた貴男……わたしの想い受け止めて……」

　　と、完全に妄想ファンタジーなのである。

「そういえば……」

　　ふと思立って机の引き出しを開ける。そして、一枚の紙を取り出す。

「どうしてこんなものがあるんだろう……」

　　そう、それはムーンライト・タワーで行われるイベントの入場券だった。

「関係者用……って書いてあるけど……ホント、どうしてわたしのところにあるんだろう……」

　　もちろん、そんなものに応募した覚えはない。というよりも、気付いた時にはこれがここにあったのだ。

　　だいたい、関係者用というのが怪しさ炸裂だ。だいたい、抽選で関係者用と書かれたチケットが当たるはずもなく……。要は、すんごく怪しい。

「ホントに不思議だな……」

　　電灯にかざすようにチケットを見る。もちろん、かざしたからといってなにかが見えるわけでもない。

「まあ、考えてもしょうがないよね。あるものはあるんだし」

　　と、引き出しにしまう。

　　考えても答えが出ないようなので、キッパリと諦めてしまう。どうしようと、今ここにあるという事実は変わらないのだ。考えるだけ無駄だろう。疲れるだけだ。

「それにしても……」

　　と、今日の事を思い返す。

　　頭の切り替えもサッとしてしまう。

「もうちょっとで彼の家がわかったかもしれないのに……まったく、まーったらバッドタイミングで声を掛けてくるんだから……」

思い返すと腹が立ってきた。

「明日はちゃんと言わないと。またこんな事されたら、わたしと彼の関係が一向に進展しないじゃないの」

と、ぶんすかとしてみるが、怒りの矛先が明確に目の前にないとどうも不完全燃焼になってしまう。

「でも……面と向かって告白できるほど勇気もないんだよね……わたし」

はあ～、と大きなため息。

「もうちょっと勇気があればな……」

そう、もうちょっとでも勇気があればこんな事をしなくてもすんだかもしれない。少なくとも、まーに犯罪者呼ばわりされる事はなかっただろう。

「もうちょっとの勇気か……」

あと一歩踏み出すだけの勇気。それはなかなか難しい。その一歩はどの一歩よりも重い。

窓の外に目をやる。

真っ赤な空が目に飛び込んでくる。

「明日もいいお天気になるのかな……」

暗闇に二つの姿があった。

一つは男で、もう一つは少女の姿をしていた。

「準備はできた。あとはお前次第だ」

男が少女に言う。

「そう……。でも、テミーサ。本当にこんな事をしなくちゃいけないの？」

少女は男——テミーサを見上げた。

「ああ」

「でも、どうしてあなたが死ななければならないの？」

「カプリオーリの言葉とは思えないな……」

テミーサは少女——カプリオーリを見て笑う。

「別にいいでしょ。というよりも、まだ本調子じゃないから適合者の人格が少し出ちゃうのよ」

「なるほどね……」

「その点、あなたは完璧なようね」

「当然ながらな」

テミーサはカプリオーリをじっと見る。そして、

「前にも話したが、これは必要な事なのだ。それに、ワタシがこのセカイから消えたところで、なんの問題もない。死という概念は適合者であるこの身体が全てを引き受ける。ワタシはあちらのセカイに戻るだけだ」

「そうは言っても……」

「まだ、適合者の人格が強いようだな。昔のお前の面影が薄い」

「どうでもいいでしょ」

「そうだな、どうでもいい。この計画が成功すれば、セカイは一つになる。そう、表も裏もない。一つだ。そうすれば、ワタシは再びこのセカイに……いや、一つとなった新たなセカイに存在する事ができる。そして、セカイを支配するのだ」

テミーサは両手を大きく広げた。

「全てをこの手にするためには、今は舞台から姿を消していなければならない。ワタシは種を蒔くだけ。それを育てるのはこれから——そう、三年後を生きる者たちだ。あとはその者たちが勝手にしてくれるさ。ワタシはその時をゆっくりと待つ事にする。ワタシの役目はここでひとまず終わりなのだから」

「そうね。ワタシもあなたを失望させないようにさせてもらうわ」

「頼むよ。その為にワタシは、いや——彼はこのセカイに五つの建物を建造したのだから」

「五つ？ 鍵は四つでは？」

「ああ、そうだ。だが、センターは必要になる。全ての力はそこに集まり一つになるのだから。そう、扉はそこに現れる」

「なるほど。……………門番だけね、あとは」

「ああ。門番をなんとかしないとな。まあ、その辺も三年後に生きる者たち任せだ」

「テミーサにしては他力本願な計画ね。あなたらしくもない」

「そう言うな。居もしない神や仏よりも、これから現れるであろう同志の方がよほど心強い。その者たちとて、門番に易々とやられはしないだろう」

「そうだといいけどね」

「それは、希望的観測にすぎないかな……」

「いいえ。きっと大丈夫だと思うわよ」

「まあ、完全に信じているわけではない……というのが本音だがね」

「なるほどね、それで今回の事なのね」

「そう、保険として……な」

「納得したわ」

そして、次の瞬間には二人の姿は消えていた。

「おーはよっ！」

と、坂木まりか。

「ぐえっ」

と、百花泪。

こんな会話から始まった翌日。ちなみに、泪は首を絞められたので声が出なかった。

こうも違和感なく背後から首に手を掛け、爽やかな挨拶とともに首を絞める事ができる女子中学生が世の中にどのくらいいるだろうか。

泪はその手を払うと振り返る。

「あのね、さっくりと首を絞めるのやめてくれない？」

「そんな事言われても……、これって挨拶みたいなもんだし」

「あのねえ、どの世界に挨拶に首を絞める人がいるのよ」

「どの世界ね……ちょっと説明しづらいかな……。あ、簡単に言うと、泪の目の前、かな」

と、悪びれる事なく言う。

「あのねえ、それって犯罪じゃない？」

「なして？」

「なして……あのね、どうしてって……」

と、自分でもどうして犯罪なのかよくわからないのでなにも言えない。悪い事とはわかっているのだが……。傷害罪なのかな……？

泪が口ごもっているときまりかが、

「そんな事、ストーカー犯罪者の泪に言われるとは……」

と、にこやかな笑顔で言う。

「……………」

「や、そこで真剣な顔で黙られると、さ……」

なにか言い返されると思っていたまりかは、思わぬ沈黙にたじろぐ。

「ほんの、ウィットに富んだ朝の会話なわけだし……さ」

「わかってるわよ、そんな事」

と、からかうような（いや、事実からかったのだが）笑顔で言う。

「ほえ？」

さすがのまりかも、これにはポカンとしてしまう。

「わかってるわよ。何年あんたと一緒にいると思ってるわけ？ あんたもまだまだね」

「むっきーっ！」

と、ぽかすかと泪を殴る。

「いたい、いたい……いたってば……」

「泪のいちわるう～」

「あはは、ごめんってば」

「いちわるう～」

「ごめん、ごめん……って、別にわたしが謝る必要ってなくない？」

「そう？」

「そうじゃない。最初に首を絞めてきたのはまーだし、言葉責めをしてきたのもまーだし……よく考えれば……って、よく考えなくてもさ……」

「ほら、そんなちっちゃな事は気にしない、気にしない。そんなのは全部ツリー・フェアリーだよ」

「……ツリー・フェアリー？ なにそれ」

「ツリー・フェアリー……木の妖精……木の精……気のせい」

ニッコリと笑ってまりかが説明する。

「……………ちゃっ！」

涙はサッと手を振ると慌ててその場から離れる。

「ちょ、ちょっと……置いていかないでよ……」

「今から他人」

「や、前から他人だし」

「ぐっ……！」

どうしてだか揚げ足を取られてしまう泪。

「知らない人だし」

「それって、淋しいな……まー、泣いちゃう」

「泣いてれば」

「淋しいな……。まーはね、淋しいと死んじゃうんだよ」

「ご自由に。ちなみに、淋しいからってウサギも死なないわよ」

「……………先読みですか」

「単純」

「きつついなー、ルイルイは」

「勝手に人のあだ名を決めないで」

「いいじゃん、今日からルイルイって事で。というか、むしろ今からルイルイ！」

「本名より長くなるあだ名ってどうかと思うけど」

「いいじゃん。可愛いから、さ」

「却下」

「そんなあ～……」

とかなんとか話していると、学校に到着した。

「さて、今日も楽しい一日になるといいね」

そんな元気いっぱいのみりかに対し、

「わたしは、朝からまーに首を絞められ言葉責めをされ……はあ～」

と、小声でぼやく泪であった。

休み時間。

「でね、今度さ、ムーンライト・タワーのイベントに行くんだけどさ……」

「ルイルイ、突然なにかね？」

「いや、だから昨日も話したじゃん。ムーンライト・タワーの……」

「そんな事話したっけ？」

「話したよ……」

「した？」

「したってば」

「してなくない？」

「したの」

「ちょっと待っててね」

まりかは、そう言って昨日の事を回想し始める。

——回想開始——

「あのさ、泪。ちょっと訊きたいんだけどさ」

「なに？」

「さっきから、彼彼言ってるけどさ、その彼って泪の事知ってるの？ っていうか、知り合い？」

「ううん」

「なにそれ」

「わたしが一方的に見てるだけ」

「駄目じゃん」

「いいじゃん」

「よくないって。っていうか、もしかして、名前も知らないとか？」

「ビンゴ！」

「や、そんな笑顔で言うような事じゃないし」

「まあ、しょうがないじゃん」

「それでいいの？」

「よくはないと思うけど、やっぱしょうがないし」

「……………」

「そういえばさ、今度ね、ムーンライト・タワーで行われるイベントに行ける事になったの」

「や、また突然話題を変えるね、泪は」

「そう？」

「そうだって。脈略ないし」

「いいじゃん」

「まあ、いいんだけどね」

「でさ、彼を誘っちゃおうかなって……」

「誘えば」

「って、そんなにあっさり言わないでよ……。今言ったばっかじゃん。わたし、面識ないんだよ」

「そうだったね」

「そうなんだよ」

——巻き戻し——

「それでいいの？」

「よくはないと思うけど、やっぱしょうがないし」

「……………」

「そういえばさ、今度ね、ムーンライト・タワーで行われるイベントに行ける事になったの」

「や、また突然話題を変えるね、泪は」

「そう？」

——また巻き戻し——

「そういえばさ、今度ね、ムーンライト・タワーで行われるイベントに行ける事になったの」

——回想終了——

「あ、そういえばそんな事も話したね～」

「思い出した？」

「うん」

にっこり。

「でね、彼を誘おうかと思うんだけど……」

「誘えば」

と、まりかは真顔で即答する。

「……………」

泪は沈黙する。

「だから、誘えばいいじゃない」

「……冷たい」

「なにがよ。誘えばって言ってあげてるじゃない」

「そうなんだけど……」

「どう言って欲しいわけ？」

やれやれとため息を吐く。

「.....それは.....どうしたらいいか一緒に考えよう、とか.....セッティングしてあげようか.....とか.....さ」

「甘えた事ぬかすね～」

「なによ！」

「まあ、いいけど。面識ないとか言ってなかったっけ？」

「.....うん」

「しかも、違う学校だしね.....。塾とかが一緒ってわけでもないし.....。接点ないし.....」

「そうだけど.....」

「それなのに、ずっと好きでしたって.....なんか怖くない？ っていうか、気持ち悪くならない？」

「そう？」

「だってさ、自分は知らないのに相手は自分の事知ってるのよ。監視されてたみたいで、怖いじゃんよ」

「そうかな.....」

「自分に置き換えて考えな」

「.....わたしは、彼がわたしの事を知っていてくれるのは嬉しいよ」

「.....駄目だ、こりゃ。じゃあ、相手が彼じゃなくて別の人だったら？」

「.....きゃーっ！」

頭を抱えてうずくまる。

「どうしたの、ルイルイ」

「最悪だ.....考えただけでもおぞましい」

「そこまで.....。でもわかったでしょ。彼もそう思うって」

「でも、わたしにそんな事されてるんだから幸せ感じたりすると思うんだけど.....」

「どこまでもおめでたい脳してるわね.....。さっきあんたが想像した相手も同じ事考えてるんでしょうね」

そう言われて再び想像する泪。

「.....きゃーっ！」

「をいをい」

「怖い。っていうか、気持ち悪い。嫌悪感満載だ」

「でしょ？」

「うん.....」

と、しょんぼりと肩を落とす。

「だから打つ手なし。諦めな」

「そんな.....。やっぱり、まーは冷たいよ.....」

「こんなに親身に話を聞いてあげてるっていうのに、人の事を冷徹女とは.....ルイルイの方が非

道くない？」

「……そこまでは言ってないし……」

「同じじゃない」

「……そうなの？」

「そうなの！」

「そうかな……」

「そうなの……っていうかね、よく考えてみれば、どこであんたはその彼の事を知ったわけさ。だってさ、出会うきっかけなんてあるとは思えないし」

「それは……」

涙は言いにくそうに手をモジモジとさせる。

「それは？」

「偶然」

ちょっと上目遣いで言う。

「……………はあ～。まあ、そんなこったろうとは思ったけどさ」

「……いいじゃない、偶然って。ほら、運命の出会いって感じしない？ 赤い糸とか」

「しない」

「ロマンないな……」

「ルイルイが乙女チックすぎ」

「そんな事ないって。まーが冷めてるだけだよ」

「そんなもんかねえ」

「そんなもんなの」

「で、運命的に出会った、と。それから犯罪続きってわけ？」

「だから、あれは犯罪じゃないって。好きだから……でも、恥ずかしいからこっそりと見ていただけだし」

「その行為が犯罪なんだけどね」

「恋する乙女の……」

「だーっ！ 会話がループするから。それに、ルイルイもさっきそんな事されるのは気持ち悪いとか言ってたじゃん」

「そうだっけ？」

「……超鷄頭（スーパーとりあたま）？」

「ああ、そういえば言った。うん、言った」

そう言われて、慌てて肯定する。

「でしょ？ 気持ち悪いでしょ？ 怖いでしょ？ 犯罪でしょ？」

「……なんとなくそんな気がしてきたかも」

「うん、自覚してきたか。で、そんな状況でどうしろと？ っていうか、どうしてそのムーンライト・タワーのイベントなわけ？」

「それはね……彼が言ったの」

「言ってた？」

「うん。ムーンライト・タワーのイベントに行きたいなって」

「立ち聞き？」

「盗み聞き」

「どっちでもいいけど」

「友達と一緒に話してたから……それで……」

「なるへそ」

「わかった？」

「それで、ルイルイは彼を誘おうと……でも、彼にそのチケット渡してもさ、やっぱり気持ち悪くない？」

「どうして？」

「行きたいって気持ちはあるだろうけどさ、見ず知らずの人にチケット貰うのって……怪しくない？ しかも、一緒に行こう、でしょ？ 私だったらパスするね」

「どうしてよ。行きたいんでしょ？」

「でもね……やっぱ変じゃん」

「そうかな……喜んでくれると思うんだけどな……」

「まあ、そこまでルイルイが言うなら実行してみる？」

「実行？」

「そう。彼にそのチケットとやらを渡すの」

「どうやって？」

「告白するの」

「コクハク？」

涙はなんの事かと首を傾げる。

「そう、告白。愛の告白」

「告白……えーっ！ こくはくーっ！」

「や、そんなに驚かれても……」

「驚くよ。っていうか、心の準備が……」

「はい、深呼吸」

「すーはーすーはー」

「落ち着いた？」

ブンブンと首を振る涙。

「全然落ち着かない」

「落ち着きなさい」

まりかは涙の両肩に手を乗せる。

「ゆっくり息を吸って……」

「すう～」

「吸って～」

「すう～」

「吸って～」

「す…………ごほっげほっ！ ちょっと、まー。吸ってばかりだと苦しいじゃない」

「落ち着いた？」

「死にかけた」

「よし、オーケー」

「なにがオーケーよ。殺人未遂じゃない」

「そう？ さっきのはルイルイの意思なわけだし。私は強要したわけじゃないし。まあ、運が悪かった事故ってトコ？」

「……納得はできないんだけど、なんだか間違っていないっぽいし……ああ～、なんだか悔しいな……………っていうか、むかつくな……」

「でも、落ち着いたでしょ？」

「まあ、ね」

「じゃあ、そういうわけで早速考えようか」

「なにを？」

「やっぱり、超鷄頭？」

「違うもんっ！」

「あ、そ。じゃあ始めるわよ」

「だからなにを？」

「ルイルイ告白大作戦のシナリオよ」

「……………マジ？」

「マジもマジ。大マジ」

「……………わかった」

真剣な目で見られた泪は、観念したように頷いた。

「でもひとつ」

「なに？」

「その名前はやめてくれない？」

「名前……？ ルイルイ告白大作戦の事？」

「そう」

「なして？」

「恥ずかしいから」

「そう？ 私はとてもいい名前だと思うけど」

「それに、バカっぽいし」

「そう？ 私はとってもカッコイイと思うけど」

「……………」

泪は大きなため息を吐いた。

これ以上なにを言っても無駄だ、という事がわかったからだ。

「わかったわよ。考えましょう。……はあ～」
諦めのため息。

というわけで、二人で話し合った結果、帰り道で待ち伏せして告白しよう、という事になった。

涙の何度かのストーカー行為の結果、とある公園をよく通る事が判明。そこで待つ事にした。

二人は適当なベンチに座って彼が来るのを待つ。

「今日は来るかな……」

心配そうにしている泪だが、その隣に座っているまりかは、退屈で仕方なかった。

「さあ？ 来るかもしれないし、来ないかもしれないけど……」

「ねえ、まー」

「なに？」

「もしかして、飽きた？」

「結構」

「マジ？」

「それなりに」

「……………はあ〜」

と、泪はため息を吐いた。

近くのベンチには、二人と同じくらいの年齢の少女が座っているので、誰かと待ち合わせでもしているのだろう。

「暇だね〜」

そう言って、まりかは大きな欠伸をする。

「暇って……そりゃ、まーにしてみれば他人事だからどうでもいいんだらうけど……わたしは胸バクバクなんだよ」

「そりゃそうだらうけど」

「ホントに飽きてるみたいね」

「うん」

「……って、そこで即答されるとつらいな……」

「でも、ホントだし」

「きつつー」

「ホント、遅いね〜。っていうか、本当に来るのかねえ〜」

「そんなのわからないわよ」

「そうなんだけどさ……。ルイルイの勤しかアテにならないわけだし……で、そのルイルイはただの犯罪者だし……」

「だから犯罪者じゃないって」

「でも逆に考えれば、犯罪者の方が世の常をよく知っていると思うんだけどね……」

「褒められてるの、それ」

「微妙だねえ〜」

「まー……………」

と、涙は呆れたようにため息を吐く。

「で、心の準備はできたんでしょうね」

「……それは……………」

「もしかして、まだ？」

「もうちょっと……………」

「って言って。結局いつになるのかね」

「それは、ちょっと……………」

「まあ、時間が来れば問答無用なんだけどね」

「まー……。それってちょっと……かなり非道くない？」

「そう？　そうでもしなきゃ、ルイルイは告白できないでしょ？」

「……………」

ごもつともなので反論できない。

そんな事を話していると、誰かが公園に入ってくるのが見えた。学生服だ。

それを見た瞬間、涙は身体を強張らせた。

「彼、だねえ〜」

と、まりかは呑気にそれを見る。

一方の彼はというと、どことなく肩を落としているように見える。気落ちしているようだ。なにかあったのだろうか？

「彼、なんだかしょんぼりとしてない？　もしかして彼女に振られたとか？　もしそうなら、ルイルイ・チャンス！　傷心のところに温かなラヴを注ぎ込めば男女関係なくイチコロよん♪」

と、他人の不幸は蜜の味……ではない（ないったらない）が、ワクワクという感情は隠せない。

「なんだか、それって卑怯じゃない？」

「ここまできてきれい事ぬかすか。恋は卑怯でいいのよっ！」

力強く言い切るまりか。

「よくないでしょっ！」

そう言いながらも、少しだけそれもありかな、と黙ってしまっている。

「いいじゃん。それに、彼ってよく見るとヘタレっぽいし」

「ヘタレじゃないもんっ！　彼の事を悪く言うなんて……まーのバカ！」

——パンッ！

「えっ……？」

乾いた音がした。

まりかは頬に熱を感じた。

「ルイルイ……？」

「あ、ご、ごめん……まー……あの……」

涙は自分の手とまりかを見てオロオロとする。

「びえ～ん！ ルイルイがぶったあ～！ うわあああんっ！ うえええんっ！」

「……………」

わざとらしく泣くまりかに呆れて言葉が出ない泪。

「ちょっと、まー……」

「ルイルイがぶった～！ ママァンにもぶたれた事ないのにい～（あるけど）」

「ちょ、……あの、まー……？」

この場にいるのがとてつもなく恥ずかしい。できるなら、一秒でも早くこの場から立ち去りたい。

しかし、そうしたくても、まりかにぎゅっと服を握られているためそれができない。

できるのは、まりかに泣きやんでもらう事だけだった。

「うええええええんっ！」

「まー、あの恥ずかしいから、さ。やめてよ」

「ルイルイがぶったあ～」

「ごめんって。本当にごめんなさい。だから、そのやめてくれないかな……」

「びえええええんっ！」

「ホントにやめてよお～」

「ぐすっ！ ひくっ！」

「わたしが泣きたくなっちゃうじゃない……」

と、本当に涙ぐむ泪。

「あのさ、冗談だし。そこまで本気にされても……」

と、そんな泪を見て、何事もなかったかのようにケロツとした顔で言う。

「そりゃ、ほっぺは痛かったけど……ってというか、みっくりしたけど……」

「ホント？ 赦してくれる？」

「まあ、そんな顔されちゃあね」

「……じゃあ、彼の事を悪く言うのはやめてよね」

と、泪が真顔に戻って言う。

「……………ルイルイ？ もしかして……」

「名演技？」

自慢そうに胸を張る。えっへん！

「……………さて、ヘタレはどうなったかな……って」

そんな泪を無視して、まりかはその彼に視線を移す。

「ヘタレ言うなって今言ったでしょっ！ って、まー、どうしたの？」

「ルイルイ見ちゃだめ！」

そう言って、胸を押さえるまりか。

「なっ……………」

突然の事に涙は戸惑いを隠せない。

「まー……」

「あ、間違えた。えいっ！」

そう言うと、今度は間違いなく涙の目を押さえる。

「どうしたのよ、まー……」

「とにかく、見ちゃだめ！」

涙の目を押さえながら、まりかは涙の想い人を凝視していた。

「まさか、こんな展開になろうとは……」

そこには、一人の女の子と楽しそうに話している彼の姿があった。しかも、その女の子は誰かを待っていたっぽい女の子だ。

「ルイルイ……あんたの負けだよ」

まりかがポツリと呟いた。

その二人の光景は明らかに昨日今日の仲でない。以前からラヴな関係だったのだとまりかにもわかった。

「そんな二人の仲を裂く事なんて、そんなヤツは……なんだっけ？」

人の恋路を邪魔するヤツは、馬に蹴られて死んじゃまえ！

「痛い、痛い……痛いよ、まー……」

目を押さえていたはずのまりかの手は、いつの間にやらアイアンクローになっていた。涙のこめかみをまりかの指が食い込むかのように締め付ける。これでもかというくらい綺麗に。

「うぎっ！」

そんな声が聞こえないくらいまりかは彼を凝視していた。

「まー……やめて……痛い……」

彼と女の子の逢い引きをじっと見つめているまりかは、さらに手に力を込める。

「痛い……痛い……痛いって言ってるでしょっ！」

涙は渾身の力を振り絞ってまりかの手を振り払う。

「ルイルイ、見ちゃだめっ！」

まりかは再び涙の目を塞ごうとしたのだが、涙はそれをひよいとかわす。

「ちょっ、ルイルイ……」

「まー、いきなりなによ」

と、そう言った涙の視線の先には彼の姿があった。

「……………っ！」

涙は目の前の光景を目にして固まった。

「だから見ちゃだめって言ったのに……」

「そんな……………」

涙はその場に膝をついた。

「ルイルイ……？」

「まー……わたし……………」

「ルイルイ、泣いちゃいな。泣いて全て忘れちゃいな。涙と一緒に流しな。私が胸を貸してあげるから……」

「平らな……………ご、ごめん」

涙は場を和ませようと冗談を言ってみたのだが、まりかのキッとした視線に思わず素になってしまう。そして、気を取り直してまりかの胸に顔を埋める。

「うわああああああああああああああああああああああああああああんっ！」

涙は泣いた。

大きな声で泣いた。

そんな二人の少女を気にする事なく、涙の想い人はムーンライト・タワーのチケットをゲットした事に喜び舞っていた。

ワタシはその建物を見上げている。

地面から生えた巨大なコンクリートキノコ。

なるほど、言い得て妙だと思う。

どうして彼がこれを建てたのかは理解したし、納得もしている。が、この形はどうだろうと思う。

美的センスがどうのと問う気にはならないが……周囲とこれ程までに溶け合わない建物も珍しいのではないだろうか。

なんて、こんな事を考えるのはワタシらしくないな。やはり、適合者と感覚が交ざり合ってしまったようだ。

イベントの集合時間まではまだある。

ワタシはその辺をぶらついて時間を潰す事にした。

ここで、テミーサに近づくわけにもいかないし、これくらいしかする事がない。まあ、周囲の偵察を兼ねてなのだけれど。

それにしても変な感じだ。適合者の感覚があるのでそう思うのだろうが、誰もスーツなど着ていない。

このセカイのニンゲンは、こういった席には正装するのが当たり前という認識があったように思うのだが……。まあ、そんな事はどうでもいい。

本当に色んな人が集まっている。

だいたいテミーサの適合者と同じくらいの年齢の男だ。だが、それに紛れるように子どももいる。

どんな基準で集めたのだろうか？

ここに未来を担うワタシたちの手駒がいるのだろうか。それとも、本当に適当なのだろうか。それは、ワタシなどにはわかるものではない。テミーサの奸計はワタシにはサッパリわからない。もっとも、わかる必要なんてどこにもない。ワタシはテミーサに従っていればそれでいいのだ。

道化師は傀儡師に従っていればいい。

理由はわからないが、そういう風に子どもがいるお蔭でワタシもそう目立たずにすんでいる。もしかして、そういう配慮なのか？

そうならば有り難い。

さて、誰にしようか……。

糸を付ける相手を物色する。

どんな仕事でも、この時間が一番楽しい。

お人形さん選びはワクワクする。

ふふふっ、あの男にしよう。なんだかソワソワして落ち着かないみたいだし。ワタシが落ち着かせて、あ・げ・る。

場違いなタキシード姿のお人形さん。

感謝してよね。

お人形さんにされる事、誇りに思いなさい。

にやりと笑うと、カプリオーリはその男に指先を向けた。

そこから目には見えない糸が伸びたかと思うと、男の手足をはじめ、全身にくっついた。

これでもう、あなたはワタシのお人形さん。

カクンと一度だけ項垂れたかと思うと、何事もなかったかのように元に戻った。その瞬間を見た者はわずかしかなかった。

「またここなわけ……？」

楓夏菜——ユニオは目の前の光景を見て呟いた。

「そうみたいです」

呉羽彌季——セパレイターがそれに答える。

「なんでもかんでもか……どうなってんだよ」

星霜トキー——コネクターもぼやく。

「とにかく、全てがここからって事でしょうか」

「どういう事？」

セパレイターの呟きにユニオが反応する。

「全員がそうとは限りませんが、どうもここでなにかがあったとしか思えないんです」

「そりゃ、あつただろうよ。さっきもあの男が殺されたんだぜ」

と、コネクター。

「そうですが、それだけではなくて…… `輝きの園、へ導かなくてはならない人たちって、この事件になんらかの関係があるのではないかと……」

「そうかも知れない」

ユニオはその考えに賛成だった。

自分は父親を殺された。コネクターは自分の親友が殺された。そして、さっきの男の子も彼女を殺された。

これは偶然？

この、あたしたちが覗いている女の子も、きつとなにか関係があるに違いない。

三年前、いったいなにかがあったの？

ここで……あたしはお父さんを殺された事でいっぱい他の事はなにも知らない。

いや、知らないようにしていただけなのかも。

……そんなはずはない。

いったいここでなにかがあったんだろう？ 今になって気になりだした。

私は時計を見た。

そろそろ開場かな……。

私は行かなかったけど、ルイルイ大丈夫かな……。

せっかくだから行くって……。新しい恋を見つけなよ、ルイルイ。

でも、あそこに行くと、あの想い人に会うんじゃない？

って、やばくない？

や、そんなの考えるまでもなく、やばいんじゃない？

あ、でも……このチケットってなかなか手に入らないとか言ってたっけか。じゃあ、大丈夫でしょう。

でも……気になるな……。

って、気になるなら行けばよかったじゃん、私。

……今頃後悔しても遅いか……。

でもさ、こういうのって苦手なんだよね……。

なんだか大人ばかりいてさ、息苦しいったらありゃしない。

着飾ったりしてさ……考えるだけでも息が詰まりそう。

今から行っても入れないだろうし……。

まあ、明日を待つしかないか。

明日、ルイルイに色々和讯こうっと。

キーーーーーッ！

マイク特有の反響音がした。

ついに時間が来たわけね。

ワタシは人だかりの中に戻った。ちょうどこちらの準備もできたし。

少し先に準備された台の上に一人の男が上がる。

テミーサ。

ワタシは彼をじっと見る。

なるほど、堂々と振る舞っている。おそらくは適合者の方なのだろう。ワタシにも区別できないが、なんとなくそう思う。仮にテミーサだとしてもなんら問題はない。

『今日はムーンライト・タワー完成記念式典にお越し下さいまして、誠に有り難う御座います。お世話になっております各企業の皆様、高い倍率の中見事に当選されました皆様、ようこそお越し下さいました。わたくし、アビリティー・ムーン株式会社代表取締役社長の光月圭一郎と申します。今日は天候にも恵まれまして、日蝕もよく観測できる事と思われます。まさにこのムーンライト・タワーの存在意義があるイベントになるものと思われます。今日は、肩肘張らず、気楽な気持ちでお過ごしいただけますよう、心より願っております。今日は誠に有り難う御座います。どうぞ楽しんでいって下さい』

そう、楽しむといい。ワタシたちの計画はもう止まらない。着実に進んでいる。今日はその仕上げなのだから。

あとは三年待つだけ。

百年や千年待つ事に比べればないも等しい。

さて、テミーサの事だからなにか仕掛けているはず。

あくまでも自然に行わなければならない。

別にニンゲンに気付かれても問題ないのだが、門番たちに気付かれる事だけは避けねばならない。

あいつらがどこにいるのかわからない。

まだこのセカイに現れず、門にいてくれればいいのだが……。

あまり楽観的なものの考え方はよそう。

油断は出来ない。

そういう相手なのだから。

なんだか自分だけが緊張しているようだ。どうやら、この適合者はそういう性格らしい。

だが、それはワタシにいい刺激となっている。

「大丈夫」

小さく呟く。

ん？

誰かがワタシを見たようだが、気にする事ではないだろう。

やがて、招待客の検査が終了し、いよいよ中に入る事となった。

この中はワタシも知らない。

本邦初公開というわけだ。

ワタシは流れに任せて進んでいく。

「二度目の暗転だ」

そんな声がした。

近くをテミーサが通ったらしい。今は少し先を歩いている。

「了解」

と、自分に言い聞かせるように呟く。

中にはエレベーターが三機あり、ワタシはテミーサとは別のエレベーターに乗った。

ワタシのお人形さんはもう一つのエレベーターだ。

このくらいの遮蔽物では、ワタシの能力になんの影響もない。

が、さすがに地上とこのムーンライト・タワーの最上階ではそうもいかない。

本来なら現場に姿を現したくないのだが、今回は致し方ない。

なるべく普通にしていよう。そうすれば、なんの問題もないはずだ。そもそも、別に不審な行動はとっていない。

……ん？

なんだろう、視線を感じる。

もしかして、門番？

あ、消えた……。

ほんの一瞬だったが、確かに視線を感じた。

あいにく誰かまではわからなかったけど。

誰かが紛れ込んでいる。誰だろう。

とにかく、気を抜いちゃいけない。なんとしても成功させないと。

改めて誓ったところで、エレベーターは最上階に到着した。

そこには、もうすでにほとんどの人が集まっていた。どうやら、ワタシたちが最後の方らしい。少しして、もう一つのエレベーターも到着した。それが最後のようだ。

「……さて、全員が到着されたようですね」

そう言うと、光月圭一郎が指をパチンと鳴らした。

と、その音を合図に天井がガラス張りになっていく。覆っていたものがスルスルと床の方へ移動していく。

こんな仕掛けをしているの……。ホント、すごいわ。

と、なんだか感心してしまった。

これはテミーサというよりは、適合者が考えた事なのだろう。テミーサはこんな事をしたりしない。

空を見上げると、そこには、欠け始めている太陽があった。

なるほど。どうして今日なのか……こういう事ね。

昼でありながら太陽が隠れ、夜のような時間になる。かといって夜でもない時間。それはまさに魔の時間。逢魔ヶ刻。

確かにこれほどお誂え向きな日はない。

だからこそ、ワタシたちの計画も成功の可能性が高い。

だが、同時に他の連中が行動している可能性もある。それには用心しないとイケない。

これはワタシとテミーサの計画なのであって、他の連中は知りもしないのだから。

「どうやらもう始まってしまっているようですね。それでは、挨拶などは抜きに致しまして、この世紀の天文ショーをご覧ください」

光月圭一郎の言葉のあとすぐ、ワタシたちは黒い透明の下敷きのようなものを渡された。サングラス代わりといったところか。

周囲のニンゲンたちがそれ越しに空を見上げる。

ワタシも空を見上げる。まあ、太陽なんて観ても面白くもなんともないわけだが。

こんなものを観て、なにが楽しいのか。ニンゲンとはよくわからない。とか考えていると、「……ったく、こんななにが楽しいのかな……」

どうやらワタシと同じ意見のニンゲンもいるようだ。

だが……そうならどうしてこんな場所にいるのだろうか。今日のイベントはこれがメインではなかったか？

どんなニンゲンだろうか。ちょっと面を見てみたい……と、声のした方を向く。

同じ顔をしたニンゲンが二人……。

「鏡琴、そんな事言わないで……綺麗じゃない」

「まあ、綺麗だけどね」

なんだか同じ顔同士で話しているのは奇妙だ。

本当、ニンゲンとはおかしなイキモノだ。

その間にも、次第に太陽が隠されていった。

ワタシは、自分の力が増大しているように感じた。いや、正確には増大ではなく、本来の力が戻っているだけなのだが。

これも、太陽が消えていっているからでしょうね。

別に太陽が苦手というわけではない。カプリオーリたちは、逢魔ヶ刻の世界に生きているため、中途半端で曖昧な時間が最も心地いいのだ。

テミーサの力も本来のものとなるこの瞬間、きっと彼は……。

そう考えた瞬間、またしても気配を感じた。

これは明らかに同類の気配だ。しかも一つではない。

思わず振り向いてしまいそうになったがこら堪える。ここで周囲と違う行動をとる事は致命的だ。

相手も気付いているのかはわからないが……いや、気付かれていないはずだ。ワタシはテミーサの傍にいたお蔭でこういった事に敏感になっている。そう、普通のヤツならワタシに気付くは

ずはない。もちろん、気付かれるような事はしていない。本来の力になったとしても、気付かれないようにしている。

こちらは気付いているが、向こうは気付いていない。それでいい。

しかし……この二つの気配はなんだ。

どちらも微弱で、それぞれも気付いていないだろう。

抑えているのだろうが、ワタシには通用しない。

もしかして、門番だろうか。

だとすれば危険だ。

いや……。

と、考える。

門番がこうも気配を感じさせるだろうか。門番であれば、気付かせないように……いや、わざと気付かせようとしている？ そんなはずはない。そういう意図であればもっとあからさまにしているだろう。

だとすればどういう事だろうか？

試している？

いや、そんな事をするような遊び心はないはずだ。門番たちは飄々としているが、それでいて容赦しないと聞いている。もし門番であれば、あらゆる事を気にせずワタシたちを抹消しているだろう。だが、ワタシたちはこうして生きている。明らかに門番たちの敵だというのに。

だとすれば、なにも知らずにこの場に居合わせたただの同類だろう。そう考えるのが普通だ。ならば問題はない。……そう願おう。

その間も、太陽は徐々に消えていく。

月が太陽を覆い隠していく。

そして、それはやがて重なる。

皆既日食でないのが残念といえば残念だ。

だが、この金環食も悪くない。

そんな金環食も長くは続かない。

完璧に重なった瞬間などわずかで、すぐにズレ始めてしまう。

そのタイミングを見計らったかのように天井が元のように覆われ、室内に明かりが灯り始める。

「……皆様、世紀の金環食はお楽しみいただけましたでしょうか」

光月圭一郎がそう言い、パチン！ と指を鳴らした。

しかし、なにも起こらない。そう思った瞬間だった。

突然暗くなった。

一度目の暗転。

さて、この暗転でなにが起こるのか……。それが少し楽しみでもある。あのテミーサがなにもしないとは思えない。

「な、なに？」

「ど、どうしたんだ？」

「きゃあ」

莫迦なニンゲンどもが騒いでいる。

たかが電灯が消されただけだというのに……。それほどまでにニンゲンは闇が恐ろしいのだろうか。それほどまでに光が愛おしいか。

その光ももうすぐ消えてしまうというのに……。

「落ち着いて下さい」

光月圭一郎の声だ。

その声に、ニンゲンどもが静まり返った。

さすがに説得力といおうか、力があるようだ。やはり彼はセカイを統べるに相応しい力量の持ち主だ。

完全に闇に包まれた次の瞬間、ほんのりと明るくなった。

「なっ……」

思わず声を出してしまった。

ニンゲンの服が光っている。

そして、部屋には無数の光が……。

この光景は……いったい。

ワタシは戸惑いを隠せない。

「皆様、天井をご覧下さい！」

と、突然の光月圭一郎の声に天井を見上げる。

「うそっ……」

冗談でしょ？

そこにあったのは、星空……いや、宇宙だった。少なくともニンゲンどもはそう判断しただろう。

だが、ワタシは知っている。テミーサに一度だけ連れて行かれた事がある。

これは……。

門までの道。

そう、これこそ門番たちが護る門へと続く道だ。

まさか、こんな事をするなんて……。

同類でもこの存在を……いや、門番の存在すら知らない者も多い。さっきの気配のヤツらが知っているとは思えないが……。これはやりすぎだ。

もし気付かれでもしたら……計画はどうなるかわからない。

これではまるで挑戦状ではないか。

門番に対して……これは危険だ。

でも……とも思う。テミーサならやりかねない。

『さあ、門番どもよ。もうすぐお前たちが護り続けた門が開かれる。そして、ワタシがセカイを一つにしよう！』

とでも言いそうだ。

そして、テミーサならば実現するだろう。ワタシはそう信じている。だからこそ、ワタシはこうしてテミーサに協力しているのだ。

テミーサにしてみれば、ワタシなどはただの手駒にすぎないのかもしれない。使い捨ての可能性もある。それでも構わないと思っている。これはワタシの自己満足だ。

徐々に部屋が明かりを取り戻していく。

「今宵はお忙しい中お越し頂き有り難う御座います。それでは、宴をお楽しみ下さい」

光月圭一郎がそう言うと言をパチンと鳴らした。その音は静まり返っていた空間によく響いた。

そして、その合図を待ちわびていたかのようにドアが開き、数人のニンゲンが入ってきた。彼らはそれぞれ銀色のカートを押している。その上には色とりどりの料理が乗せられていた。

「みなさま、どうぞ気軽に談笑でも楽しみながら味わって下さい」

そう言うと、カートを運んできたニンゲンたちが外に出ていった。

なるほど、ニンゲンたちが喜びそうな事をする。

まだ日蝕の影響はある。まさに逢魔ヶ刻の状態だ。できればこの状態のまま終わらせたい。

だが、ワタシがそういう状態であるのだから、さっきの二つの気配も同じだろう。もちろん、今もわずかに気配がする。

ふとテミーサを見ると、テミーサはショウネンに声を掛けている。

別段、顔見知りというわけではないようだ。主催者として参加者に話し掛けているといった感じだ。

今話しているのはテミーサなのだろうか、それとも適合者なのか……。

だが、次の言葉が聞こえた時は、鳥肌が立った。

「ところで君は、世界をどう思う？」

なにを訊いているのだろうか。

セカイをどう思う？

テミーサだ。

こんな質問はテミーサしか考えられない。

突然そんな事を言われたショウネンは啞然としたまま黙っている。

当然だ。そんな質問をするニンゲンがどこにいるというのか。

「すまない、忘れてくれていい」

少し残念そうにしている。

もしかして、これはテミーサではないのか？

適合者が自らそのような質問を……？ 嘘でしょ？

でも、そうとしか思えない。

「謎だらけだと思います」

と、去ろうとしていた背中にそう言った。

「……………謎だらけ、か……………なるほど」

なるほど……。いい答えかもしれない。ワタシたちの事を知らないニンゲンには、これからセカイに起こる事は謎以外のなにものでもないだろう。

そして、そう言われた適合者は、

「わたしは、世界とは裏表があると思っている」

なんて事を口にした。

本当はテミーサじゃないだろうか。ワタシにすら気付かれないようにしているのではないだろうか。

「裏表……」

ショウネンはキョトンとしている。

「そう、ここ……つまりわたしたちが今いるこの世界を仮に表としよう。だが、世界はそれだけでは本当の姿を見せていない。つまりここではない世界、裏があるわけだ。その二つが存在して初めて世界と呼べるのだと思う」

表と裏でセカイ……。

まさにその通りだ。

テミーサだ。テミーサに違いない。

「まあ、どうでもいい話だ。そう、わたしにはもうどうでもいい」

が、この言葉でその考えは消えた。

テミーサじゃない。

テミーサはこれからセカイを手に入れるのだ。どうでもいいわけがない。

適合者だ。

そうに決まっている。

だが、適合者がこんな事を……それも考えにくい。

もしかすると、これがテミーサの本音なのだろうか。ワタシはテミーサのオモチャで、遊ばれているだけなのだろうか。

それは考えたくない。

適合者だ、と信じたい。

適合者であれば、諦めも説明できる。何故なら、カレはここで死ぬのだから。

そうだ。

ワタシがこの適合者と完全に乖離できずに感情が伝わってくるように、テミーサと適合者もそうなのだ。

お互いの考えの一部が共有されてしまっているのだ。

だから……。

——タンッ！

そんな音がしたかと思うと、明かりが消えた。

二度目の暗転。

今だ。

ワタシはお人形さんを操り、テミーサを――いや、正確には適合者である光月圭一郎を殺させる。

暗闇であろうと狙いははずさない。

「ぐっ！」

くぐもった声。

やった。

あとは、このお人形さんを始末してしまえばいい。

このまま放置しておく、色々と面倒な事になる。一番簡単なのは、お人形さんにも死んでもらう事だ。

だけど、このまま光月圭一郎だけを殺すのも面白くない。

そうだ……周囲のニンゲンも……。

もう一度お人形さんを操り、その時光月圭一郎の側にいた男を殺す事にした。

「……………」

音はなかったが、感触はあった。

くっ、あまりのショックにお人形さんが暴走しかけている。とりあえず、お人形さんを外へ出さないと、騒ぎが大きくなりすぎてしまう。

調子にのりすぎたかも。

とりあえず、外へと走らせる。

「きゃっ！」

その途中で、また誰かを殺してしまったようだ。

悲鳴が聞こえたが、気にしてられない。

ワタシはお人形さんと一緒に外へ飛び出す。

「パパッ！」

セパレイターは思わず叫んだ。

「えっ？」

それに驚いたのはユニオだった。

「……おいっ！ 今なんて言った！」

コネクターはセパレイターに掴みかかる。

しかし、セパレイターは魂が抜けてしまったかのように動かない。目は虚ろで焦点があってない。

「おい、答えろよ！」

そんな……。これがパパのした事……。

情報としてはあったものの、やはりその現場を見るとそうもいかない。

「コネクター、やめよう」

ユニオがコネクターの手を放させようとする。

「どうして止める！ こいつが……こいつの親父が朱音を……朱音を……」

「コネクター……」

ユニオはコネクターの手に自分の手を重ねる。

コネクターは手の力を抜く。

「わかってるさ。わかってる！ ……だけど、けどさ……納得できるわけないだろ！ だいたい、オレの気持ちがユニオにわかるのかよ！」

コネクターは泣いていた。全然泣きそうもないのに、泣いてる……。

そうだよ。親友を殺されたんだもんね……。そして、その犯人は、わたしのパパ。

赦せるはずなんてない。

ああ……仲間ができたと思ったらこれだ。もう、友達なんて言えないよ……。

「わかるよ……」

えっ？

「そんな、慰めなんかいらん！ ちっぽけな同情で自己満足するんじゃねえ！ 当事者しかわかるわけないんだよ、この気持ちはな！ 知ったかぶった感情で喋るな！」

「わかるよ……同情なんかじゃないんだよ——」

そのあとにユニオが言った事は信じられなかった。

「——だって、あの光月圭一郎の側にいた男の人は、あたしのお父さんだから……」

「なっ……」

コネクターは言葉を失った。

それはわたしも同じだった。

そんな……。あの人がユニオの……。どうしたらいいの？ わたしはどうしたら……。

仲間のお父さんを……仲間の親友を……わたしのパパが殺してしまった。

「お前も……あの事件の当事者……？ 冗談だろ？ オレに同情して……」

「同情でこんな事言えるわけじゃない！」

ユニオは感情をあら露わにして叫ぶ。

「人の生死を冗談で言えるわけないでしょ！」

ユニオも泣いていた。

「わ、悪かった……」

ユニオの怒りで我に返ったのか、気圧されたのか、コネクターの口調は落ち着いていた。

「セパレイター……自分を責めないで——」

ユニオの優しい声が聞こえる。でも、今はその優しさが針のように突き刺さる。

「——確かにあれはセパレイターのお父さんだったのかもしれない。でも、きつとなにかあったはずだよ……」

ユニオはなんとか自分の感情を抑えようとした。コネクターの気持ちはよくわかる。自分も同じ事をしていてもなんら不思議ではない。

目の前に自分の父親を殺した犯人の娘がいるのだ。でも、彼女に罪はない。そう自分に言い聞かせる。そうでもしないと、彼女を殺してしまいそうだった。

「ごめんなさい」

わたしは、そう言うしかなかった。

なにか理由があった？ 人を殺す理由？

面識もない人を殺害する理由なんて、わたしにはわからない。あったとしても、だからといって赦される行為じゃない。

「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい……」

涙が止まらない。それと一緒に、謝罪の言葉も止まらない。

ごめんなさいしか言えないけど、謝りたい。

ごめんなさい。

謝っても、もう過ぎてしまった事を変える事はできない。

こんなの残酷だよ……。どうしてこんな辛い過去を見せるの？

非道いよ……。

苦しいよ……。

ごめんなさい。

とにかくこの場から離れよう。

誰かの記憶に残るような行動はとっていない。ワタシがいなくなっても誰も気付かないだろう。

とにかく、急いでお人形さんと一緒にエレベーターで下りる。

なんだか、お人形さんと一緒に乗るとは変な感じだ。

だけど、今はそんな事を言っている余裕はない。

テミーサの計画は成功した。適合者を殺す事には成功した。

だが、後始末が問題だった。

そういえば、テミーサは後始末についてはなにも言わなかった。いや、もう、どうでもよかったんだ。

わたしがどうなるうとも、さして問題ないと判断したのだろう。

お蔭で、ワタシは大変な事になっている。

元々は、ワタシがお人形さんの暴走を制御できなかった事にあるわけだが。

それにしても、このお人形さんが土壇場で精神を戻しそうになって、ニンゲンがもつ、リョウシンノカシャクがこんなにハッキリとあらわれるとは……。

これ以上の事をさせなくてよかった。

と、なんとか下まで下りてくる事ができた。

おそらく外にはまだキシヤどもがいる事だろう。ワタシの姿を見られる事は避けなければならない。ここから先はお人形さんだけにしてもらおう。

ワタシはお人形さんを外に走らせた。

と、すぐに外が騒がしくなった。

それもそうだろう。返り血を浴びたタキシード姿の男が出てくれば何事かと思うに決まっている。

ワタシはそのままお人形さんを走らせる。

――キキーッ！

と、いう鋭い音と、

――ボブッ！

と、いう鈍い音がした。

キシヤどもが騒ぎ立てて駆け寄る音が聞こえる。

それを聞きながら、ワタシは外へ逃げ出す。

もう誰もそこにはいない。みんな、お人形さんの所へ行ってしまった。

これでお人形さんの始末もおしまい。もう誰もワタシたちの計画を知る者はいない。ワタシを除いて。

このまま姿を消そう。適合者に身体を返してあげればそれで全てが終わる。

ワタシの役目もおしま終いだ……。

もうすぐこのセカイは終わりを告げ、ワタシたちのつい終のセカイが訪れる。

ワタシたちの勝ちだ。

門番を出し抜いたんだ。

嬉しかった。

あとは三年待つだけ。

それなりの距離を移動した。もうこれで誰もワタシがムーンライト・タワーにいたとは思えない。普段着で行っていたお蔭で、マチにも馴染みやすい。

「キミは誰だ？」

その時だった。後ろから声がした。

「誰なんだ？」

同じ声が言う。

ワタシは振り返った。

そこにいたのは、ワタシの適合者と同じくらいの年齢のショウネンだった。

「逢魔ヶ刻の住人ってわけ？」

「キミは誰だ？」

ワタシの質問には答えられないようだ。

だが、ワタシの考えは間違っていないようだ。

なるほど、さっきまでの気配の正体はこいつか。もう一つは来ていないようだ。

「あまり不完全な状態で現れるものじゃないわよ」

「関係ないね。不完全だろうとなんだらうと、お人形ゴッコしかできないようなヤツに負ける気はしない」

かなり強気のような。

「ワタシをテミーサの相棒と知っての事かしら？」

「テミーサ？ 誰だ、そいつは。あいにくと知らないな。お人形使いさん」

と、ショウネンはムーンライト・タワーの最上階を見る。

「あれをしたのはあんただろ？ どういう事だ？」

「あんたには関係ない事よ。これはワタシたちの仕事なんだから」

「そうかい……でも、この場所をなくしてしまうような事はやめてほしいな……。オレはこの場所が気に入ったんだ。逢魔ヶ刻の時代には、是非ともこの場所で実験でもしてみたいと思ってるんだ」

なるほど……テミーサが遺したこの場所は、こいつの役目なのか……。きっと、こいつが鍵を開けてくれるのだろう。

「そう……それはごめんなさいね。でも大丈夫でしょ。とにかく、頑張りなさいよ」

こんなヤツに関わるのはゴメンだ。さっさと離れよう。

「そう、頑張るよ。オレがセカイを闇に覆い尽くすんだからね。だから、あんたが邪魔だ」
どういう理屈なんだか。

「邪魔をするつもりはないわ」

「そう……。だけど、必要でもないんでね。それに久しぶりに出る事ができて嬉しいんだ。ちょっと遊ぼうか」

遊ぶですって？

「遠慮させてもらうわ」

「そう……人形がなければなにもできないものな」

ちっ！ 目障りかも。

「なければ人形にするまでよ、あんたをね！」

ワタシは糸を伸ばす。こいつを人形にしてしまえばそれでいいのだ。

「死んでもらうよ」

なにっ！

ショウネンは、ワタシに向かって突進してきた。

「がっ……！」

そして、次の瞬間には……ワタシの身体をショウネンの手が貫いていた。

一瞬の出来事だった。瞬きする時間もない。

う、うそ……………。

ワタシはその場に倒れた。

ダメだ……意識が薄れる……元の場所に戻されてしまう。

せっかくの適合者だったのに……。

ダメだ……もうこのセカイにいられない。

でも……もう与えられた仕事は果たした。あとは向こうで時が来るのを待つだけだ。テミーサと一緒にいるのも悪くない。

こんなセカイにいるくらいなら、その方がいいかもしれない。

ああ……そんな事考えてる余裕もないか……意識が向こうに引き戻されていく。

適合者には可哀相だけど、アナタの人生ここでお終い。じゃあね。バイバイ。

こうして、百花泪は人生の幕を下ろした。

私はその事を知ったのは翌日だった。

ルイルイ遅いな……。

今日は学校に行く途中に会えなかった。もしかしたら先に行っているのかもと思ったけど、教室にも来ていない。

そして、もうすぐ授業が始まってしまう。

どうしたんだろう……。

もしかして休み？

ずる休みですか？

もしかして……ムーンライト・タワーであの思い出の人に会ってショック受けてそれで……？

あり得る。

ルイルイの場合、なきにしもあらずだ。

っていうか、絶対にそうだ！

もう……そんなにショック受けるなら行かなきゃよかったのに……っていうか、やっぱり一緒に行ってあげた方がよかったのかも。ちょっと後悔。

でもな……やっぱり、なんかああいうイベントって苦手だし……。

帰りに家に寄って慰めてあげよう。

このまりかちゃんの熱い抱擁で……ね。ハグハグしてあげちゃおう。

——ガラガッ！

と、教室の扉が開いて担任の先生が入ってきた。

あれ？ 一時間目って担任だったっけ？

時間割を見るが違う。

予定変更かな……？ とも思ったが、そんな事は聞いていない。

「おはよう。知っている人もいるかと思うが——」

そう言って、担任がなにか話した。

「——昨日、百花泪さんが何者かに殺害されました……………」

私は耳を塞いだ。

聞きたくなんてない！

そんなの嘘だ！

嘘に決まってる！

そんな事あるはずない！

だって、あんなにキラキラと恋してたんだよ。

今度はもっといい人を見つけるんだって……それなのにどうして……？

ねえ、神様……どうしてなのよ！

どうして私の親友は殺されなくちゃいけないの？

これからじゃない！

これから、いっぱい笑って、いっぱい恋して、いっぱい泣いて……いっぱい幸せになるんじゃないの？

それなのに……そんなの……。

担任の声はもう聞こえなかった。

みんなが黙祷している間、私はなにもできなかった。

ただ、神様を呪う事だけしかできなかった。

いや、本当に悪いのは私なのかもしれない。

あの日、私も一緒に行っていたら……そうすればこんな事にはならなかったかもしれない。

だったら、責任は私にある。

涙を殺したのは私なんだ……きっと。

「これが、この子の闇ってわけか……」

やっと核心にきたようだ。

「そうみたいだな」

コネクターは気落ちしたようだが、なんとか平静を保っている。しかし、セパレイターはそうはいかないようだ。

「……………」

黙ったまま、そこにいる。なにも出来そうにない。

「それにしてもさ、これって彼女とは関係ないんじゃないの？」

「オレもそう思うけど……よ」

別に彼女が来ていたとして、これは変わったのだろうか？

なにせ、あの子を殺害したのは奇妙な少年で（それにしても、どこかで見た事があるような気がする。誰だったっけ……？ 思い出せない）、あたしたちにはよくわからなかった。

きっと、彼女と一緒にいたとしても変わらなかったのではないだろうか。そもそも、彼女のせいにしてしまうのが間違っている。

「でも、自分が悪いって思うものなんです……」

セパレイターが壊れそうな声で言った。

「パパの事も、わたしたちが悪いような事を言われて……ずっと殺人者って言われて……だからわかるんです。わたしもそうかもしれないから……」

セパレイターのお父さんが殺人を犯したのはセパレイターのせいじゃない。あの子が殺されたのは彼女のせいじゃない。

それでも、自分が悪いとってしまう。

「セパレイターのお父さんの事はセパレイターはなにも悪くないよ」

「そうだぜ。お前の親父さんだとしてもさ、お前は悪くないわけだからよ」

あたしの言葉に追従するようにコネクターが言った。

「そんなに責めちゃダメだよ。あたしは赦すよ。あたしはセパレイターを赦す。セパレイターのお父さんを赦す。だから、自分が悪いなんて言わないで」

これはセパレイターを慰めるための詭弁なのかもしれない。でも、そんなつもりはない。心からそう言える。

だって、お父さんが死んだなんて事、当時はどうでもいいって思っていたんだから。当時のあたしは、躊躇せずに赦していただろう。

「オ、オレだって……」

慌てたようにコネクターが言う。

「ありがとう」

セパレイターは涙を流しながら言った。

「さて、とにかく今はこの子を『輝きの園』に導きましょうか」

「そうだな」

「はい」

そこで改めてユニオは能力を発動させた。

この子——坂木まりかが救われますように、と。

救われて欲しい……。

自らに罪を課した女の子。

自ら十字架を背負った女の子。

自ら傷付く事を望んだ女の子。

ユニオの周囲に光が溢れる。その光は、坂木まりかをゆっくりと包み込んでいく。

「あなたは悪くないの」

ユニオはまりかにゆっくりと語り始める。優しく話せば彼女の心が解放されると信じて。

しかし——

「また同じ事をしているのかい」

輝きの使者の三人は同時に声の方を見た。

「メビウス！」

そこにいたのは、彼女たちが閉じこめたはずのメビウスだった。

「ったく……どこまで続いてやがるんだ……」

三雲政孝が階段を上り始めて十分ほどが経とうとしていた。

下を見ても上を見てもどのくらい上ったのかサッパリわからない。

結構上ったような気はするものの、直線距離でないのでよくわからない。しかも、螺旋階段なので尚更だ。

塔の内壁をそのまま階段にしたような感じなので一周が長い。しかも、勾配がそれほど急ではないので一周して本来の一階分も上っていないのかもしれない。

「ったく……終わりが見えないのはきつって言うが、本当だよな……。なんだか疲れた……って、これは、ただの運動不足なのか？ でもな……こんなの、誰でも疲れるよな……絶対」
上るにつれ、独り言が多くなっていく。そうでもしないとやってられない。

こんなところで、煙草なんて吸ったらやばいだろうな……。窒息死してしまうかもな……。

まあ、そんな事しないけどな。

どこまで続いているのかな……

そろそろ……っていうか、結構前からイヤになってきたんだがな……。

三雲政孝はため息を吐きつつ、それでもとりあえず上り続ける。

「あたしたちが心の中に閉じこめたはずなのに……どうして……」

ユニオには目の前の光景が信じられなかった。

心を切り離し、メビウスを閉じこめたと思っていたのに今は目の前にいる。

しかし……とも思う。あれほど噂になるメビウスがそれしきの事で……やはり、噂に違わずというところだろう。

「あの時は本当に危険だったよ。もう少しで本当にそうされるところだった」

しかし、その口調は内容とは裏腹に全く危機感を感じさせない。そこには余裕しか感じられない。

「これ以上あたしたちの邪魔をしないで！」

ユニオはメビウスをね睨め付ける。

しかし、もちろんメビウスはそんな事で引き下がりはしない。

「キミたちこそ、セカイの歪みを作る事はしない方がいい。僕のシゴトを増やさないでほしいものだ」

「なっ……」

ユニオは反論しようとしたが、メビウスの後ろに見た事のない影が見えて言葉に詰まった。

「仲間……？」

ユニオの視線がクラインに注がれている事に気付いたメビウスは、

「ああ、カレかい？ カレは僕のナカマだ。というよりも、パートナーの方がいいかい？」

クラインに同意を求めるように言う。

「どちらでもいいさ」

クラインは淡々と言う。

そんな……メビウスに仲間がいたなんて……。そんな情報はなかった。噂でもそんなものはなかった。ただ、メビウスという名前の死神がいるというだけ……。

そんな……メビウスだけでも厄介なのに……あたしたちは勝てるの？

もう、逃げる事もできそうにない。

どうすればいいの……。

ユニオは明らかに動揺していた。その動揺はコネクターとセパレイターにも伝染する。二人も奇妙な恐怖を感じていた。

「とにかく、キミたちはこれ以上なにもしなければいい。カノジョの心を解き放ち、元のセカイに戻すんだ」

「ユニオ……」

セパレイターが助けを求めるようにユニオを見る。

「……」

ユニオは無言で頷く。

それを見て、セパレイターは能力を解放した。

次の瞬間、輝きの使者の三人とメビウスとクラインは元のMLTに戻っていた。

「さて、ボクたちは今回の首謀者に会いに行こうか」

そう言うと、ユニオたちには目もくれず、上を目指して歩き出した。

「ちょっと待って！」

ユニオがその背中に声を掛ける。

「あんたたちは、オプスキュリテって何者なのか知ってるの？」

「なるほど……オプスキュリテか……闇を継ぐ者。それが首謀者か……」

クラインはその名前を聞いて納得した風に頷く。

「ボクはただ、セカイを歪ませる者を消すだけだ。誰であろうと関係ないね」

そう言い残し、二つの影は消えた。

「おい——」

コネクターがユニオの肩を掴む。

「——彼女を、`輝きの園、に導かないばかりか、あの死神の言いなりになるなんて……どうかし
ちまったんじゃないのか？」

どうかした……。そうなのかもしれない。

あたしは従わなければいけないような気がした。そうしていなければ、メビウスはあたしたち
を一瞬のうちに殺していた事だろう。

あたしだけならともかく、コネクターとセパレイターを巻き込む事はできなかった。

それに……。

メビウスとあの白い影はオプスキュリテを知っている。消す気だ。

そのオプスキュリテはこの最上階にいるという。

「コネクター、セパレイター」

あたしは二人を見る。

「最上階に行ってみよう」

「はあ？」

コネクターは首を傾げたが、セパレイターは頷いた。

「わかりました。オプスキュリテに会いに行くんですね」

あたしは頷いた。

あたしたちを輝きの使者にした張本人に会いに行こう。

「ったく……まあ、いいか」

あたしたちは最上階を目指して駆け出した。

MLTは眠りに支配されていた。

光月圭一郎の遺産であるこの仕掛けが今回の事に貢献していた。まさに、これのために仕掛けられていたかのようにお誂え向きなものだった。

高澤威仁——いや、オプスキュリテは、自分の計画に酔いしれていた。

しかしそれもまた、テミーサの手の内でしかないのだが。オプスキュリテは彼の掌の上で踊っているだけだという事を知る由もない。

そんなオプスキュリテの目の前に信じられない光景があった。

「何故だ！ どうしてお前は眠っていない！」

オプスキュリテは、目の前の少女に向かって言った。

「説明が必要かしら？」

少女——光月鏡琴はニヤリとくちもと口許を歪めた。

「……………」

その威圧感にオプスキュリテは声が出ない。

まさか……このオレが……。

「アタシの名はシュピーゲル。まあ、あなたとは属性が違うから知らなくても無理はないでしょうけど」

「シュピーゲル……どうしてお前のようなヤツがここにいる」

その言葉から、すぐに自分と同じセカイの者だとわかった。

「別に理由はないわ。あなたの邪魔をするつもりは毛頭ないわ。安心した？」

にこりと、その適合者に似合った笑みを浮かべる。

「質問に答えろ」

しかし、その笑みがオプスキュリテは気に入らない。余裕を感じさせるそれは、自分を莫迦にしているようにしか感じられない。自然と声が荒くなる。

「そうだったわね。どうしてアタシがここにいるのか？ だったかしら？」

「ああ」

「それは簡単。アタシの適合者をここに招待したのは、あなたのお父様じゃなくて？」

「……………」

その通りだった。彼女を招待したのは、自分の適合者の父親である高澤吉郎なのだ。

「お前はそれだけの理由でここにいるのか？」

「そうね。でも、あなたがしようとしている事は楽しく拝見させてもらったわ」

「そうかよ」

「ついでに言えば、三年前も面白い事をしていたわね」

三年前……？

思い当たる節は一つしかない。

「カプリオーリを殺したでしょ？ 正確には、その適合者を」

シュピーゲルはニヤリと笑った。

「ああ、そういえば誰かを殺したような気がする。……なるほど、あの人形使いはそんな名前だったのか。それで、お前はその復讐か？」

「いいえ」

シュピーゲルは首を振った。

「アタシは別にカプリオーリをそれほど知っているわけじゃない。ただ、話に聞いて名前を知っていただけ。それだけよ」

イヤな笑い方をする。

見ているだけで虫酸が走る。

「まあ、もう少しあなたのご活躍を近くで見たいようと思ったんだけど……そうはいかないみたいね。アタシは退散させてもらうわ。もうすぐ終わりでしょうし」

そう言うと、シュピーゲルの姿は消えた。

あっという間の出来事だった。

「なんだったんだ……？」

最上階に残されたのは、突然のイレギュラーに戸惑いを隠せないオプスキュリテと、その適合者の父親である高澤吉郎の二人だけだった。

その時だった。

最上階の扉がゆっくりと開いた。

せっかくのアタシのターゲットだったんだけど……。

まあ、この鬪いに生き残る事ができたら、今度はアタシが遊んであげよう。

楽しみだわ……。

三年前のあの日、カノジョたちは闇を抱えていた。

まあ、それをオプスキュリテが利用しないとは思っていなかったけど、楽しかったわよ。でも、あなたは生き残れるのかしらね。

光月鏡琴の姿のまま、シュピーゲルは何事もなかったかのように雑踏に消えていった。

あたしたちが息せき切らして最上階の前まで到着すると、そこにはメビウスとあの白い影がまるで彫像のようにそこに立っていた。

まるであたしたちを待っていたかのようだ。

「やっと到着したようだね」

メビウスはあたしたちを見て言った。

どうやら本当にあたしたちを待っていたようだ。

「これ以上、キミたちに邪魔をされるのは面倒なんでね。やはり、諦めてもらうにはその首謀者をキミたちの目の前で消す事が一番だろうからね」

「あたしたちは殺さないわけ？」

「キミたちはセカイに選ばれている。少なくとも今はね」

世界に選ばれている？ わけわかんない。

とにかく、今は殺されないらしい。

でも、この先はどうなるかわからないわけだけど。

「さて、そろそろ行こうか」

そう言うと、メビウスは扉をゆっくりと押した。

ったく……。

三雲政孝は階段に座り込んでいた。

前を見ても後ろを見ても階段しかない。

狂っちまいそうだ。

どうして俺もこんなの上ってるんだろうな……。

まあ、上りきればなにかあるんだろうけどよ。

ってというか、これでなにもないなんてオチはイヤだぜ。骨折り損のくたびれもうけなんてまっぴらゴメンだ。

これも、あの光月圭一郎の仕掛けの一つなのか？ 本当になんの意味があるのかわかりやしない。

「誰だ！」

オプスキュリテは扉を見た。

一瞬だけ時間が止まったかのようだった。

「威仁君！」

その空気を破ったのはユニオだった。

どうして威仁君がここに……？

「おやおや、キミが今回の首謀者、オプスキュリテかい？」

メビウスが前に出る。

「お前がメビウスか」

どういう事……オプスキュリテが威仁君……嘘だ……。

信じられない……。

別にそれほど親しいってわけじゃないけど……。知っている人が……。そんな……。

輝きの使者の三人は、事の成り行きを茫然と見ているしかなかった。

「お目にかかれて光栄だよ」

オプスキュリテは手を差し出すが、メビウスは目を向けようとしめない。

「キミはどうやらセカイには不要なソンザイのようだね」

「おやおや、冷徹なんだな」

オプスキュリテは肩をすくめる。

「ボクとしては、手早く終わらせたいんだ。あまりカノジョたちを危険な事に巻き込むのは申し訳ないのでね」

「なるほど」

そう言うと、オプスキュリテはユニオたちを見た。

「……輝きの使者よ、初めまして。オレがオプスキュリテ――闇を継ぐ者だ。せっかくこうして会えたわけだが、キミたちには死んでもらう事にするよ」

ニヤリと笑うと、オプスキュリテは小さな楔を投げた。

「きゃっ！」

「うわっ！」

「きゃあっ！」

ユニオ、コネクター、セパレイターは反射的に悲鳴をあげ、目を閉じる。

――パンッ！

オプスキュリテが投げた楔が目の前で弾かれた。

輝きの使者は、それぞれ恐る恐る目を開ける。

「あれ……？ あたしたち……」

もう、わけがわからなかった。

確かに投げられたはずなのに当たった感触はない。

もしかして外れたのだろうか？

「カノジョたちに手を出すとはね……わかりやすい行動をとるものだ」

そこに立っていたのは白い影——クラインだった。

「ちっ」

オプスキュリテは舌打ちする。

「無駄な事はしない方がいい。クラインの障壁を突破できるものなどないのだからね」

「なるほど……」

「さて、キミは闇を継ぐ者といったかい？」

「ああ、確かにオレは闇を継ぐ者さ」

「そういえば、前にも同じようなヤツがいたね」

「ナイトメアか……」

「そう、そんな名前だったよ」

メビウスは惚けたような声で言う。

「オレをあいつと一緒にしてもらっては困る。オレはアイツとは違う。お前に簡単に殺されたりはしないさ」

そう言ってオプスキュリテは身構える。

「おやおや、なにか勘違いをしているようだね。ナイトメアを殺したのはボクじゃない。あれはゲシュペンストの仕業だ」

オプスキュリテは聞いた事のない名前に首を傾げる。

「誰かは知らないが、オレは簡単に負けるわけにはいかない」

「ところで、オプスキュリテ——」

突然クラインが口を開いた。

「——キミはこの実験をいつまで続けるつもりなんだい？」

「なるほど……そちらさんはお見通しってわけかい」

そう、これは実験だった。

`輝きの園、

そんな場所はどこにもない。それは、輝きの使者をその気にさせるためだけの言葉。

そして、本気で世界をどうのこうのするつもりはない。

もし闇に包まれるのならそれでいい。ただそれだけだった。

「ナイトメアが殺されたのを知って、一応だがその時の事は調べさせてもらった。……確かお前は言ったよな。`闇の中に闇は生まれぬ、とな。ならば、セカイを光で覆えばいい。そうすればそこに本当の闇が現れる」

「なるほどね……。それがキミの実験というわけなのかい？」

「そうさ。その為にそこにいる三人を利用した」

そんな……。

と、ユニオは愕然とした。

自分たちは人々の闇を祓い、光で満たそうとしていた。だけど、それが本当の闇で覆い尽くす事だったなんて……。

じゃあ、あたしのしてきた事は逆効果だったの……？

「なるほど……キミはそうカイシャクしたわけか……。光で覆えば闇になる……面白いよ。だけどね、それは違う。本当の光などソンザイしない。そして、本当の闇などソンザイしない。それは混ざり合っているものだからね」

と、メビウスはわけのわからない事を言う。

「なるほどね。だとすればオレの実験は失敗か。それでか……それでカノジョは……」

オプスキュリテは、シュピーゲルの言葉を思い出していた。

もうすぐ終わり……か。なるほどな。あいつにはわかっていたのか、この実験が失敗で、もうすぐ終わると言う事が。

「さて、死神さんはオレを殺すのか？」

失敗したのならどうでもいい。それに、この場から逃げる事はできないだろう。

オプスキュリテは達観した笑みを浮かべる。

「キミはセカイに選ばれなかった。そして、不要なものとニンシキされた」

そう言うと、メビウスは捻れた指環をオプスキュリテに投げつけた。

メビウスの指とその指環は光の糸で繋がっている。そこ糸がオプスキュリテに絡みついたかと思うと、瞬時にその身体を締め付ける。

「さようならだ」

次の瞬間、そこにはなにもなかった。オプスキュリテの適合者である高澤威仁の姿もなにもかも。全てが消えた。

どう……なったんだろう。

「終わったようだな」

クラインがメビウスに歩み寄る。

「ああ」

そう言い、メビウスはあたしたちを見る。

あたしはその視線に恐怖を感じた。

目の前で威仁君は殺された。いや、本当に殺されたのかはよくわからない。消されたの方が正しいのかもしれない。世界からその存在全てを消された。

「キミたちのその能力も自然と眠りにつくだろう。その時がくるまで」

と、クライン。

なるほど……なくなるのか……。ん？ でも……その時がくるまで？

「ねえ、この能力はまた戻るの？」

「それはわからない。だが、キミたちはセカイに選ばれている。セカイがそれを必要とした時、キミたちは再びその力をもって闘う事になるだろう」

と、優しい声でクラインが説明してくれた。

よくわからないけど、そういう事という事にしておこう。

「さて、その前にキミたちの能力の本当の使い方を……いや、この場合の使い方をしてもらおうか」

「本当の使い方……？」

「キミたちはわずかだがココロというものに触れた。カレやカノジョのココロをそのままにしておくつもりかい？ 他にもあったろうが、それらを放っておくつもりかい？」

「でも、それは……」

闇に覆われるからって……。どういう事？ 言ってる事が滅茶苦茶じゃない？ さっきメビウスは使うなとかそんな事を言ってたけど……このクラインは……どういう事？

「セカイは闇に覆われない。安心して使うといい。ただ、セカイを目覚めさせるだけだ」

「おい、どういう事だ！ オレたち……」

「コネクター……そうしよう」

「でもよ……」

「……………」

あたしは無言で首を振る。

「仕方ないか」

どうやらコネクターも諦めてくれたようだ。

「それで、どうすればいいの？」

クラインを見る。

「ココロを繋ぐ事が出来る能力で全てのココロの扉を開き、輝かせる能力を使えばいい」

つまりは、コネクターの能力で心を接続して、あたしの能力を使えって事ね。

「コネクター……しよ」

「わかった」

そう言うと、コネクターは目を閉じた。おそらく繋がるようにと念じているのだろう。

あたしとセパレイターも目を閉じる。そして、コネクターの能力を感じる。

「繋がったぞ」

わかる。

感じる。

伝わる。

MLTの全ての心と繋がった。

今だ——！

目覚めて！

あたしは念じる。

今までにない力を感じる。

正直疲れる。

どうなっているんだろう。

イメージとしては、MLTが光に包まれるというものなんだけど.....本当にこれでいいの
だろうか？

よくわからないけど、とりあえず念じる。

「ユニオ、お疲れ」

「お疲れさまです」

そこにはコネクターとセパレイターがいた。

「どうなったの……？」

少し頭が痛い。

辺りを見ると、そこはどこかの公園のようだった。ベンチに寝かされているらしい。

「MLTにいた人たちはみんな目覚めました。元通りです。少し騒ぎになっているようですが、誰にもわかりませんし」

と、セパレイターはにこりと笑う。

「とにかく、オレたちは面倒な事になる前にここに運ばれたようだぜ」

運ばれた……？

「どうやら、あの死神さんたちが運んでくれたみたいです」

「オレたちもあの後、気を失ったみたいだよ」

とコネクターは苦笑いを浮かべる。

そうなんだ……。

「そうですわ」

と、セパレイターがなにか思いついたように手を打った。

「自己紹介しませんか？ わたしたち、お互いの名前をまだ知りませんし」

「そうだな。それがいいかもな」

コネクターも賛成のようだ。

「ユニオはどうだ？ やっぱり秘密にしておくか？」

「ううん。あたしたち、友達でしょ」

そう、あたしたちは友達だ。

それぞれに闇を抱えているけど、それでも友達だ。

「わたしは、呉羽（くれは）彌季（みき）といます。聖・アンジェーロ学園の二年生です」

「オレは星霜（せいそう）鴉絵（ときえ）。まあ、トキって呼んでくれ。桐沢（きりさわ）高校の二年だ」

「あたしは楓（かえで）夏菜（なつな）。境東（きょうとう）学園の二年。よろしくね」

はあ……はあ……。

あれからどのくらい経ったんだ？

やっと、扉が見えてきた。

終わりか……。

そう思うと、急に足の力が抜けてくる。

おっと、これからだぜ。こんなとこでへばってるわけにゃいけない。

それにしても、光月圭一郎のこの設計は恨むぜ。きつついわ……これ。

とにかく、この扉の向こうにはなにがあるんだ……っていうか、鍵が掛かっているとかいうオチはやめてくれよ……。って、想像すると本当になりそうでイヤだな。

とにかく……。

と、三雲政孝は扉を押した。

扉には鍵が掛かっておらず、ゆっくりと開く。

「うわっ」

暗い場所にいたために、外の光が眩しい。思わず目を覆ってしまう。

すっかり忘れてた……不覚。

が、次第に目も慣れてくる。

「さて……なにがあるんだ……………なっ」

そこにいたのは、あの死神だった。

「お、お前は……」

「やあ、いつぞやの探偵さんじゃないか」

と、感情のない表情でこっちを見る。

やっぱり、こいつが関わっていたのか……。

ん？

死神だけじゃない。誰だ。もう一人いる。

「初めまして……。この姿で会うのは初めてだろうね。オレはクライン。メビウスのパートナーだ」

メビウスのパートナー？ あいつに仲間がいたのか。

「もうこの事件は終わったよ。せっかく舞台に上がったのに申し訳ないけどね」

「終わった……どういう事だったんだ。外じゃみんな眠っちまってるし！」

「そうだね……実験だったのさ。その実験は失敗に終わったけどね。それだけの事さ」

そう言うと、メビウスとクラインは消えてしまった。

「実験……だと？ わけわからんじゃないか！」

もうちょっと説明して欲しかった……。

と、メビウスに気を取られていて気付かなかったが、誰かが倒れていた。

思わず駆け寄る。

「大丈夫ですか」

ん？ この男は……。

見覚えがあった。確か、光月圭一郎の死後、アビリティー・ムーンの代表取締役役に就任した高澤吉郎だ。

もちろん、彼がこの場にいる事に疑問はない。

どうなってるんだ？

今回の事件、誰がどういう風に関わったのか、サッパリだ。

これは調べようにも誰も知らないだろうしな……。

メビウスに問い詰めるなんてできるわけもないし……。

ちくしょう！

結局は闇の中ってわけかよ！

「まー、泣かないでよ。わたしは平気だよ、

ルイルイ……。

でも、私があの時一緒に行っていたら……。

「ううん。あの時まーがいたら、まーを傷付けてしまっていたと思うから。まーのせいじゃないんだよ。まーは悪くないの、

でも……。

「でもじゃないの。ちゃんと人の話は聞きなさい！ まーは悪くないの。誰も悪くないの。あれは仕方なかった事なの、

でも……。

「しつこいなっ！ 怒るよ！」

ごめん。

「でも……ありがとうね。ずっと気にしててくれたんだよね。ごめんね。もっと早くに言ってあげればよかった、

ルイルイ……。

「ありがとう、まー。わたしの友達でいてくれて、ありがとう、

「ルイルイ！」

しかし、そこには誰もいない。ただ、絵が飾られているだけの階段。

潰れてしまった花束を足元に見つけ、少女はただ涙を流した。

「ルイルイ……私こそありがとう」

少年は最上階に向かって走っていた。

まだ眠っている人がいるので、踏まないように気を付けながら走る。どうしてみんなが眠っているのかなど、その時は疑問に思っている余裕はなかった。

ただただ、最上階に向かって走っていく。

息が切れるが、そんなものを気にしてられない。

一心不乱に最上階だけを目指していた。

そして……。

思い出の場所。

傷を負った場所。

恋人を喪った場所。

そして……………。

十字架を背負った場所。

最上階には、二人の男がいた。一人は眠っており、もう一人がそれを起こしている。

「朱音……」

少年はその名前を口にする。

しかし、その名前の少女はそこにいるはずもなく……。

「朱音……」

その名前だけが音としてそこに存在するだけ。

あの時と同じように天井はガラス張りにされており、空がよく見える。

「朱音……」

空には虹が架かっていた。

Fino.

MOBIUS 一輝きの使者一

<http://p.booklog.jp/book/48954>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48954>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48954>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ